



JANES

Newsletter no. 23 2016



■ 巻頭言 エチオピア、30 年を振り返って	重田眞義	1
■ JANES フォーラム		
エチオピアとその周辺の言語に対して日本人研究者はどう取り組んできたか		
序にかえて	柘植洋一	2
ハマル語の研究 ～古代と現代の接点を求めて～	高橋洋成	3
アはアムハラ語のア、アリ語のア	柘植洋一	6
幸運に支えられたエチオピア言語研究	若狭基道	10
私の言語研究 ～エチオピアでの出会いと別れ～	乾 秀行	15
フィールドワークを体験して	小脇光男	18
現代エチオピアと古代エジプトを繋ぐロマン	吉野宏志	21
言語類型論の研究の魅力と英語教育における有用性 ～私の研究の経験から～	河内一博	25
北東アフリカで話されるナイル・サハラ言語ファミリーに属する言語	稗田 乃	34
「民族」になった「難民」とアラビア語クレオールの来し方	仲尾周一郎	38
衝撃的なフィールドワーカー ～中野暁雄先生の御研究と思い出～	若狭基道	41
■ 第 19 回国際エチオピア学会学術大会報告	有井晴香	43
■ 第 24 回学術大会最優秀発表賞		
グンダ・グンド修道院旧聖堂修復に向けた外構修復の報告と、地域の伝統建築技術	清水信宏、 エフレム・テレレ、 青島啓太、三宅理一	46
ウガンダ都市部における燃料ブリケットの生産と人びとの食事および調理方法への適応性	浅田静香	50
■ フィールド通信		
ウガンダの HIV/AIDS 対策と性をめぐる「公序良俗」のゆくえ	中澤芽衣	54
フリードリッヒ・ユリウス・ビーバーの生涯と、彼の遺した資料群	吉田早悠里	59
■ 新刊ライブラリー		
伊藤千尋 著『都市と農村を架ける ―ザンビア農村社会の変容と人びとの流動性』	原 将也	66
浜本 満 著『信念の呪縛 ―ケニア海岸地方ドゥルマ社会の妖術の民族誌』	橋本栄莉	67
大門 碧 著『ショー・パフォーマンスが立ち上がる ―現代アフリカの若者たちがむすぶ社会関係』	中澤芽衣	68
澤村信英 編『アフリカの生活世界と学校教育』	有井晴香	70
大林 稔・西川 潤・阪本公美子 編『新生アフリカの内発的発展 ―住民自立と支援』	吉田早悠里	71
岡野英之 著『アフリカの内戦と武装勢力 ―シエラレオネにみる人脈ネットワークの生成と変容』	村橋 勲	74
佐藤靖明・村尾るみこ 編『衣食住からの発見』(100 万人のフィールドワーカーシリーズ第 11 巻)	児玉由佳	77
波佐間逸博 著『牧畜世界の共生論理 ―カリモジョンとドドスの民族誌』	白石壮一郎	78
● 会員の異動		79
● 編集後記		80

(表紙写真提供：清水信宏、浅田静香)

巻頭言

エチオピア、30 年を振り返って

日本ナイル・エチオピア学会会長 重田眞義

2015 年になって突然、これまで在東京エチオピア大使館で発給されていたビジネスビザが本国の入国管理局からの発給通知なしには入手できなくなった。この 10 年近く、毎年 1 年間有効の数次ビザをもらって気ままに行き来していたことに比べると不便きわまりない。領事と交渉しても、大使に依頼しても、彼らにはその権限がなくなったという。本国のコントロールが厳しくなった理由は定かではないが、憶測ではテロ対策を含め、外国人訪問者への管理を強化するためとのことらしい。

エチオピアに限ったことではないが、私たち研究者がアフリカの国々でフィールド調査をする場合の身分や滞在許可の確保には苦勞させられることが多い。かつて社会主義政権時代のエチオピアでは、ビザを切り替えて滞在許可をもらうのに数週間かかることはふつうであった。調査地まで国内を移動するのに旅行許可が必要だったし、車の燃料を買うのにも切符を発行してもらわねばならなかった。1986 年、はじめてのエチオピアで、なにをするにも必要な役所のお墨付きを求めて、役所と大学を何往復もしたことが今となっては懐かしく思い出される。

しかし、役所の手続きが不便で時間がかかるだけというわけでもなかった。アジスアベバの内務省で旅行許可をもらった翌朝に出発して、600 キロ離れた次の町で役所に出頭すると、きちんと確認の書類が届いていて驚かされたものだ。この国の行政システムが、警察や公安に限らず意外にきちんと機能していると思わされることは他にもよくあった。「帝国」による支配のしくみのいくつかは次の体制によって引き継がれたというか強化された部分もあったのかもしれない。

そのデルグ社会主義政権が倒された 1991 年の 7 月、私はまだ兵士達がキャンパスに駐屯していたアジスアベバ大学を訪問した。戦車の前にいる少年のような兵士が手にしている本には、MARX という名前が大きく印刷されていた。エチオピア研究所に挨拶に行くと、もう旅行許可の仕組みはなくなったといわれ、半信半疑のまま国内線の飛行機に乗ってジンカへ向かった。途中、降りたアルバミンチの空港で、エチオピア航空のパイロットと男性パーサーがやけに明るい顔をして話していたので、なにげに飛行機の写真を撮ってもよいかと尋ねた。それまでは、空港内ではカメラを出すことすら憚られた時代であったから、断られることも予期した上での申し出であった。しかし、予想に反して、撮影は次のような言葉で許可された。「撮りたまえ、自由に。もうこの国では何でも自由にできるようになったんだ！」

それから 21 年、今から三年半前のことになるが、この国を率いていたメレス首相が亡くなった。そのときも、偶然だが私はエチオピアにいて、それもアジスアベバからは車で一日半ほどかかる南部諸民族州の農村で訃報をきいた。その前後のエチオピアという国の様子は至って落ち着いたものだったし、3 日後には村の広場で弔いの式が、在来のやり方と同時に、エチオピア正教会およびプロテスタントの作法でそれぞれおこなわれた。1991 年の社会主義政権崩壊の際は、軍隊が到着するまえに旧政府関係の役人達はこぞってケニアに向けて逃げ出し、ジンカの町には自動車も 1 台もなくなった。それと比べることじたいおかしいことなのかもしれないが、メレス首相の亡くなったあとも、辺境の町には平穏な日常が続いていたといえる。

その後のエチオピアでは、歴史上はじめて南部出身のセム系以外の言語を母語とする人物が国の長につき、南部の人びとにはある種の期待が高まったことも事実だろう。期待は期待として、今はただ、国のありかたとは関わりなく人びとの平安が続くことを願わずにはおられない。

(しげた まさよし/京都大学教授)

エチオピアとその周辺の言語に対して 日本人研究者はどう取り組んできたか

序にかえて

柘植 洋一

エチオピアの諸言語の研究は、17 世紀半ば、エチオピア学の祖と呼ばれる天才的学者ヒーオブ・ルドルフと、エチオピアの事象万端に通じたエチオピア人神父アッバ・ゴルゴリオス（アッバ・グレゴリウス）のローマでの出会いから始まる。その後はエチオピアの鎖国状態の故もあり研究の拡がりは遅々としたものであったが、19 世紀後半からは現地調査をもとに、主にセム系、クシ系言語の研究が進み、周縁部に分布するオモ系、ナイル・サハラ系諸言語の研究も 1960 年代以降、活発に行われてきている。

日本人研究者がエチオピアの言語に関心を何時頃から持つようになったかは分からない。おそらくセム語に関心を持った研究者の中にはゲエズ語やアムハラ語を研究の一環として学んだ者はいただろうが、これらの言語を研究の中心に据えた者はいなかっただろうし、そもそもこうした研究者の数はごく少数であっただろう。

1930 年代、日本国内でエチオピアへの関心が高まるとともに、エチオピアに関する出版物のなかで、アマラ語／アムハリック語（アムハラ語）やガラ語（オロモ語）といった言語が広く話されているという記述が見られるようになった。この時期、日本はアジス・アベバに公使館（のち領事館）を設置したが、そこでアムハラ語についての冊子が編まれたことを紹介しておきたい。これは、『アムハリック語初歩』というタイトルの 45 ページからなる小冊子で、当時の在アジス・アベバ公使館員尾戸書記生の手になるものである。公刊はされず、タイプ印刷で 3 部のみ作成された模様である。内容は 700 語強の語彙と簡単な会話集（7 ページ分）からなり、日本語とそれに対応するアムハラ語がカタカナで記されている。まだ詳しい分析はしていないが、先行する同種の実用目的の語彙集（当時イタリア語や英語で各種出版されていた）をそのまま日本語に直したものではなく、例えば、緒言に「アムハリック語ノ発音ハ頗ル困難ナルモノ多ク日本人ニハ到底発音シ得サル音二十八音アリ」とあるように、おそらくは放出音には苦労しながらも、自分の耳でかなり正確に聞き取っていることが窺われる。

しかし、言語研究面からみればこの仕事は一つのエピソードに止まり、日本の言語研究者の目がエチオピアに向けられるのは、ようやく 1960 年代になってからである。現在に至るもこの流れは大きなものではないが、着実に研究成果が蓄積されてきていると言うことが出来るだろう。

さて本ニュースレターの藤本編集長から JANES フォーラムで言語研究について書かないかとお誘いを

いただいたのは2014年の夏であった。おそらく JANES 関係者のなかには、フィールドで言語学の研究者とは出会うけれど、彼らはいったい何をしているのだろうと訝しく思っておられる向きもあろうし、ご自身言語にも大きな関心をもっておられる編集長自身も同様のお気持ちから声をかけて下さったのかも知れない。有りがたいお誘いであったが、私一人では到底手に負えないので、しばらく他の方々とも相談したうえで、JANES のカバーする領域のなかでもエチオピアとその周辺地域に限定し、執筆スタイルは自由とすれば多くの方々に書いてもらえそうだとの見通しが立ってお引き受けした。フィールドで調査を行ってきた方々に依頼をしたが、その際、執筆スタイルは自由であるが、無味乾燥な業績リストやあまりにも言語学に特化した内容は避けて他分野の方々にも読んでいただけることを念頭に書いていただくようお願いした。また、この企画はエチオピアの言語研究に取り組んできた者にとっては、これまでの道程を振り返るまたとない機会でもあるので、既に他界された私達の先輩の方々についても近い関係のある方に言及していただく事とした。具体的には、石垣幸雄、福井勝義、中野暁雄、鈴木秀夫といった方々である。

ご覧いただくようにそれぞれ書き方も内容もバラバラではあるが、現在の日本人研究者の status quo をそれなりに反映しているかと思われるので、統一性の欠如についてはご寛恕いただきたい。個別寄稿分の配列に関しては、およそ、対象とする言語の関係が近いものが隣り合うように配置し、最後に若狭さんによる中野先生のエピソードで締めくくりとした。個々の研究者の活動について更に詳しく知りたいと思われたならば個別にお尋ねいただければ幸甚である。

なお、本企画で取り上げられている言語は、全て西アジアからアフリカ大陸にかけて広く分布する一つの大きなまとまり（(大) 語族またはファイラム）に属する。本文中ではこのまとまりを指して、アフレイジアンまたはアフロ（・）アジアという名称が用いられているが、同じ対象を示すものである。これらの言語の分布、話者人口などの情報については、Ethnologue のサイト <https://www.ethnologue.com/> を参照いただきたい。

最後に藤本編集長、趣旨に賛同して原稿を寄せて下さった言語学研究者の皆さん、厄介なまとめ役を担って下さった若狭さんにお礼を申し上げる。

（つげ・よういち／金沢大学名誉教授）

ハマル語の研究～古代と現代の接点を求めて～

高橋 洋成

エチオピア南部諸民族州、南オモ県の県都ジンカから車で2時間ほど南に下るとディマカの町がある。結婚年齢に達した男性が牛の背中を渡り歩くというユニークな儀式で知られるハマル族の中心地の1つである。ハマル族が使うハマル語は、同地域に分布しているバンナ語、カロ語、アリ語、ディメ語などと共に南オモ諸語（あるいは東オモ諸語）に分類される。中でもバンナ語、カロ語との関係は非常に近く、ハマル語話者はバンナ語のことを「アリ化したハマル語」だと言う。Lewis et al. (2005) によれば、現在は約47,000人のハマル語話者がいる。

なぜハマル語なのか

中東のシリアからアラビア半島、そしてエチオピアの一部に広がる言語グループをセム諸語と呼ぶ。さらにエジプト、リビア、チャド、エチオピアなどに分布する（オモ諸語を含む）非セム諸語の多くと、セム諸語とをまとめてアフロ・アジア諸語と呼ぶ。

もともと筆者はセム諸語、とりわけ旧約聖書のヘブライ語やエチオピア古典のゲエズ語といった古代語に関心を持ち、その多様で複雑な「語形変化」に魅せられていた。サピア（1998：377）が言語を人間の「思考の溝」と表現したように、人間の思考は言語という「かたち」に当てはめなくては外に出すことができない。たとえば、英語話者がある概念を名詞で表現したいとき、それが単数か複数かは伝えたい情報ではなかったとしても、必ずどちらかの範疇を選ばねばならない。それは人間の純粋な思考というより、言語という「かたち」が思考に干渉した結果である。ただし、筆者はここで「言語が人間の思考を規定する」と主張するつもりはない。それよりも、セム諸語の複雑な語形変化がいったい何のために生じ、どのように人間の思考に役立っているのか知りたいと願うものである。

エチオピアはセム諸語地域の最南端に位置し、しかもアフロ・アジア諸語の最南端に近いオモ諸語を抱える国である。「言語の古い特徴は周辺部に残る」という仮説にしたがい（亀井他 1996：1274-1276）、もしオモ諸語の中にアフロ・アジア諸語の古い特徴と見なしうるものがあれば、古代のセム諸語にも通ずる手がかりになるかもしれない——2006年、柘植洋一先生（金沢大学）を代表とするエチオピア言語調査にお誘いを頂いたとき、当時大学院生だった筆者の目論見はこのようなものだった。古代文献言語を専門としていた筆者にはフィールドワークの経験がほとんどなかったが、当時アジス・アベバ大学の言語学科に在籍していたハマル族のB氏を紹介していただくという幸運にも恵まれた。B氏はディマカ近郊の出身で、ハマルの文化と言語に誇りを持ち、かつご自身も言語学徒ということで、筆者の未熟なインタビュー調査に忍耐強くお答えくださった。

さて、数年に渡る現地調査を経た筆者の感想であるが、ハマル語をはじめとする南オモ諸語は、他のアフロ・アジア諸語とあまりに違いすぎる気がしてならない。実際、最近ではTheilのように、オモ諸語をアフロ・アジア諸語から外し、独立した言語グループと見なす研究者も現れている。とはいえ、筆者は「現代のオモ諸語を通して古代のセム諸語の謎を解き明かす」という目論見を諦めてはいない。今後はオモ諸語とセム諸語とを歴史的なつながりの中で見るというより、オモ諸語そのものが持つ一般性と特殊性に着目していこうと考えている。オモ諸語に見られる言語現象を、人間の言語一般に通じるものと、ある言語または地域の言語群に特有なものとして整理していけば、そのデータはいずれ古代のセム諸語の研究にも、そして一般言語学の発展にも役立つものとなろう。

そのようなわけで、以下ではハマル語の代表的特徴をごく簡単に紹介したい。

かたまりの複数、数えられる複数

英語の名詞は原則として単数か複数かを標示しなければならない。それに比べ、ハマル語は日本語話者にやさしい言語で、「カスキ」（犬）は1匹の犬にも用いられるし、「カスキ・ラマ」（2匹の犬、「ラマ」は



写真1 調査の合間の一休み（左が高橋）
（2008年2月、ジンカ）

「二」の意味)のようにそのままの形で複数の犬を表すこともできる。また、日本語では「イヌ-タチ」のように接尾辞「タチ」を付けることで複数であることを明示できるが、同じようにハマル語も接尾辞によって複数を明示することができる。ところが、ハマル語の複数の概念には2種類ある。1つは「カスキ-ノ」(犬の群れ)のように集団・かたまりとしての複数であり、もう1つは「カスキ-ナ」(数匹の犬)のように数えられる個々としての複数である(高橋 2012)。

思い起こせば、筆者は中学校の英語の授業で「複数形をとらない集合名詞」に悩まされた。それは英語の遠い先祖が持っていた集合的複数の名残であるが、アフリカの地のハマル語では集合的複数が今も生産的なシステムとして働いており、多様な意味を生み出している。たとえば、「ノコ-ノ」(多くの水)が川や湖の意味になるのに対し、「ノコ-ナ」(数個の水)は水たまりやコップの水といった意味になる。

面白いことに、集合的複数を表す「-ノ」は大きなものを表す場合にも用いられる。たとえば、無数の石ころを表す「セーン-ノ」は文脈によって大きな石、岩の意味にもなる。さらに、これを生物に適用すると女性を表すことにもなる。たとえば、前述の「カスキ-ノ」(犬の群れ)は文脈によって雌犬の意味にもなってしまうのだ。一方、男性や小さなもの、あるいは唯一のものを明示したいときは「-タ」という接尾辞を付ける。「セーン-タ」は小さな石ころを表し、「カスキ-タ」は雄犬の意味になる。



写真2 ハマル族の女の子
(2008年2月、ディマカ)

表1 接尾辞「-ナ、-ノ、-タ」と数、大きさ、性との対応関係

接尾辞	数	大きさ	性
-ナ	数えられる複数	—	—
-ノ (-トノ)	集合的な複数	大きなもの	女性
-タ	唯一のもの	小さなもの	男性

最近「-タ」の使用頻度が少なくなり、逆に「-ノ」の使用頻度が増えているようであるが、いずれにせよ男性は小さく独りであり、女性は大しく群れをなすのである。

主語要素の両脇に居並ぶ動詞

これも日本語話者にはありがたいことであるが、ハマル語の動詞は主語によって形を変えることはない。私が食べようとあなたが食べようと彼が食べようと彼女が食べようと、日本語の「食べた」に対応するのは全部「クンミディ」で済む。

ただし、場合によっては主語要素が義務的に置かれることもある。「これから食べる」あるいは「ちょうど食べている」場合には「クンマ・イ・クンメ」(私が食べる)、「クンマ・キ・クンメ」(彼が食べる)のように、2つの動詞の間に「イ」(私が)や「キ」(彼が)のような短い主語要素を挟み込む。たいていは同じ動詞を繰り返して2つにするのだが、まれに「アルダ・キ・クンメ」(もうすぐ彼が到着して食べる)のように違う動詞を用いるので油断ならない。

このような動詞の使い方は2つの意味で興味をひく。第1に、1つの文の中に2つの動詞が使われるというのは世界の言語の中でも珍しいように思われること。一般に、動詞を主要部とする語の並びのことを動詞句と呼ぶが、この場合の主要部は前の動詞だろうか、後の動詞だろうか。あるいは、どちらか一方が主動詞であり、一方は助動詞(または類するもの)だろうか。実は近年、こうした複雑述語に関する議論

が様々な言語研究者の間で行われており、動詞と動詞の間に主語要素を挟み込むというハマル語の特徴はそうした議論に新たな視座を提供できるかもしれない（高橋 2014）。

第2に、主語によって動詞を変化させる言語も、かつてはハマル語のように主語要素が独立していたかもしれないということ。特にセム諸語の動詞変化は、Lipiński (2001: 367) によれば、かつての主語要素が動詞と融合したものである。しかも、セム諸語には動詞の前に主語要素を付ける接頭辞活用と、動詞の後ろに主語要素を付ける接尾辞活用の両方が存在するのだが、ハマル語の動詞-主語要素-動詞という並びはそのどちらにも派生しうるものである。もちろん、今述べたことは単なる想像にすぎないのであるが、遠い将来にハマル語がどのように変化していくかを様々な可能性にもとづいて想像するのは楽しいものである。

ハマル語に関する先行研究は乏しく、包括的な文法記述と呼べるものは1976年に公刊されたもの1つしかない (Lydall 1976)。その内容は、約40年後に行われた筆者の調査との食い違いも目立つ。エチオピアの交通網が整備され、都市化した若者が多くなるにつれ、ハマル語の「かたち」もまた変わっていくのだろう。

参考文献

- エドワード・サピア（安藤貞雄訳）（1998）『言語：ことばの研究序説』東京：岩波書店。（原典は Sapir, Edward (1921) *Language: an introduction to the study of speech*. New York: Harcourt, Brace & World Inc.）
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）（1996）『言語学大辞典 第6巻（術語編）』東京：三省堂。
- Lewis, M. Paul, Gary F. Simons & Charles D. Fennig (eds.). (2015) *Ethnologue: Languages of the world*, eighteenth edition. online version. <http://www.ethnologue.com/> [2015年8月アクセス]。
- Lipiński, Edward. (2001) *Semitic languages: Outline of a comparative grammar*. Second edition, Leuven: Peeters.
- Lydall, Jean. (1976) Hamar. In: M. Lionel Bender (ed.) *The Non-Semitic languages of Ethiopia*, 393-438. East Lansing: Michigan State University.
- 高橋洋成（2012）「ハマル語の数量・程度表現についての覚え書き」 *Studies in Ethiopian Languages* 1: 282-291.
- 高橋洋成（2014）「ハマル語のモダリティに関する試論」 *Studies in Ethiopian Languages* 3: 50-70.
- Theil, Rolf. Is Omotic Afroasiatic?: A critical discussion. <http://www.uio.no/studier/emner/hf/iln/LING2110/v07/THEIL%20Is%20Omotic%20Afroasiatic.pdf> [2015年8月アクセス]

（たかはし・よな／筑波大学）

アはアムハラ語のア、アリ語のア

柘植 洋一

エチオピアの言語への関心

私のエチオピアの諸言語への関心は、セム語族への比較言語学的関心から始まる。アラビア語やヘブライ語といったセム系諸言語の中でもいわばポピュラーな言語の学習を進めていく中で、エチオピアのセム系諸言語は、セム諸語の中でもいわば辺境に位置すること、また、現代でもいくつもの言語が生き残って

いるという点で、比較言語学的な研究の上で重要な役割を担っているということがわかってきた。そこで、まずは既に死語になってはいるが、二千年にわたる記録を持つゲエズ語の勉強を中心に、アムハラ語の勉強も少しずつ始め、Leslau の文法書に取り組んだが、当時（1960 年代末）は、エチオピア人を見つけることも、音声資料の入手も容易ではなかった。そこに、思いがけず、東京外大 AA 研の言語研修という好機が訪れた。

AA 研の石垣幸雄先生と中野暁雄先生

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下 AA 研とする）は、アジア・アフリカをフィールドにする研究者にとって馴染みの深い研究所であるが、特に、毎年いくつかの言語を対象とする集中的な研修を長年にわたって開催し、多くの研究者がその恩恵に与って来た。私が受講生として参加したのは、1970 年に開催されたアムハラ語と現代ヘブライ語の言語研修である。

現代ヘブライ語の講師は中野暁雄先生であった。アフロ・アジア語族のさまざまな言語について、おそらく世界で最も広くフィールド調査を行い、精力的にさまざまな言語の記述を行った中野先生も当時はまだ 30 代前半であった。詳しいことは若狭さんに譲るが、私自身はこの機会が縁となり、先生の調査データの整理を手伝ったりしてセム系言語の知識を深めることが出来たし、また AA 研の大きな科研のメンバーに入れていただいたお蔭で、当時はなかなか難しかったフィールド調査も 1980 年に初めて行うことができた。その後 1995 年に中野先生がアムハラ語の研修を担当された際には、講読を担当させていただいた。後には自分が代表の科研のメンバーとして加わっていただき、こう言うのもおこがましいが、自分としてはいささかなりとご恩返しが出来たかと思っている。

さて、中野講師の現代ヘブライ語研修を申し込みに行くと、既にもう一つの言語研修が始まっていることを知った。石垣幸雄先生のアムハラ語研修である。幸い中途からの参加を認めていただいたが、他の出席者は全て東京外大の学生であったことが示すように、当時はこうした情報はなかなか入って来ず、あやうく好機を逃すところであった。ヘブライ語研修が夏休みの集中であったのに対し、こちらは毎週土曜日午前の開講であった。私としてはアムハラ語の初級文法を学べると期待していたのだが、そうではなく先生の独自の言語（学）論の話が多く（石垣先生の本来の関心はロマンス語そして類型論にあったと思う）、比較言語学志向の私には馴染めないところが多かったが、それでも大いに刺激されることがあった。石垣先生は日本の言語学者でアムハラ語についての論文を最初に発表された方であり、また類型論的な観点からアムハラ語などのエチオピアの諸言語を扱ったハンドブックを AA 研から出版された。また、ある旅の本の付録レコードに収録されたアムハラ語会話の監修・吹き込みもされた。因みに、このレコードの片面には守野庸雄先生によるスワヒリ語会話が収録されている。

石垣先生は残念なことに 1983 年、52 才で急逝された。

初めてのエチオピア調査（1980 年）

先に述べたように、AA 研のプロジェクトに参加させていただき、初めてエチオピアの調査に出かけることが出来たのは 1980 年であった。この数年前からやっとインフォーマントを見つけることが出来アムハラ語の調査を進めていたが、アムハラ語での会話経験はゼロだった。因みに、この留学生ソロモンさんは東大の博士課程で水産の研究をしていたが、後に東京のエチオピアレストラン「クイーン シーバ」のオーナーとして成功をおさめるとは夢にも思わなかった。当時は助手をしていたこともあり、夏休みを挟んで、7 月中旬から 10 月中旬の 3 ヶ月間の出張となった。書類上はエジプト、エチオピア、南イエメンでの調査であったが、南イエメンは最終的にはビザの問題で行くことが出来なかった。その結果、2 週間エ

ジプトで文献の収集を行った以外はエチオピアに滞在することが出来た。

出発前に、その前年までエチオピアの青年海外協力隊（以下 JOCV とする）の駐在員であった JICA（国際協力機構、当時の組織名は国際協力事業団）の田口定則さんとお会いできたので、JOCV には大変お世話になることになった。この時期はレッド・テラーと呼ばれる軍事政権下の厳しい政治状況にあって一度撤退したエチオピアの JOCV が再開して間もなくで、調整員の稲葉泰さんの他には隊員は 6 名と小規模であった。ボレ・ロードのイスラエルガラージュにあった JOCV のオフィスを使う便宜を与えて下さったので、宿としていたラス・ホテルから毎日てくてく歩いて通った。政治的には息苦しい状況ではあったが、この頃はアジスでもまだのんびりした風景があった。合間には隊員の方々と一緒に食事や買い物に出かけ、小旅行に誘っていただく事もあった。

オロモ語、ティグリニア語の語彙や文法調査と並んで、この調査時の主な仕事として、エチオピア人の日常生活、文化についてのトピックを題材に、語りの形で材料を集めた。当初は対話の形で、書き言葉でない、日常語の姿を記録しようとしたが、上手くいかなかったので、隊員の自主的なアムハラ語勉強会の講師であったブルハヌさんに一応の原稿を作成してもらった上で、それをもとに語ってもらうこととした。しかし、実際には原稿の読み上げとそれへの補足説明という形で、言語資料としては均質でないものになってしまった。そのほかには子ども達の伝統的な遊び歌についての記録なども行った。ただ、これらの歌の歌詞については聞き取りする時間がなく後回しにしたため、結局この時の調査をもとにした AA 研の報告書に収載することはできなかった。

この報告書のアムハラ語は和文タイプを使い、1 文字ずつ活字を拾って打つもので、字間の調整も出来ないものであったが、これは後述の鈴木秀夫先生が日本字研社との協同で開発されたものである。また、この報告書を作成するにあたって、当時はまだ Kane の広汎な辞書が出版されていないため、Leslau や Ганкин の辞書、それに時代を遡るが Guidi や Baeteman の辞書に頼ることとなったが、この作業を通じて各辞書の特徴、たとえば Baeteman は諺を多く載せているので有名であるが、そのほかに衣食住関係の単語が充実していることが初めて分かり有益であった。アムハラ語 - アムハラ語辞書を使ったのもこの時が初めてであった。

アムハラ語の授業

1982 年に金沢大学に着任以降、言語学コースの「特殊語学」という科目の中で、エチオピアの言語を二三年に一回のペースで取り上げることとなった。アムハラ語中心であったが、ゲエズ語やオロモ語の年もあった。ただ、1 年間の授業なので、初級文法の三分の二程度を扱うのが精一杯で、アムハラ語の言語学的な説明は多くはせず、講義ではなく、語学の授業スタイルであった。同様の授業は幸い、富山大学、新潟大学、名古屋大学、東京大学、山口大学、筑波大学、京都大学などの他大学で実施させてもらえることができた。特に富山大学では 1 年間隔週の授業形態であったため金沢大学と同様の授業を数年間にわたって行うことができた。また、京都大学（大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）ではエチオピアをフィールドとする大学院生をはじめモチベーションの高い大学院生が受講者だったので、私にとっても大いに為になった。

放送大学講義「外国語への招待 アムハラ語」

1999 年春、放送大学の「外国語への招待」というシリーズの「アムハラ語」の講師としてビデオの収録を行った。エチオピア人講師としては当時東京大学の大学院生だったゲベヨ・アイエレさんがつとめてくれた。あまり打ち合わせを行うことができず、テキストはファックスで数回やりとりをし、最終稿は収録

の日に初めて見るといった具合で、収録もぶっつけ本番に近い形だった。それでもアムハラ語の紹介ビデオが出来たので、そののち大学での講義のイントロダクションに利用させてもらった。自分自身ではテレビでの放映は見ることもなく宣伝もしなかったもので、反響も伯母から「洋ちゃん TV 見たよ。」という一件があっただけだった。ただ、その後、以前他大学でアムハラ語の講義を受講してくれた方が、東京出張の際にホテルでたまたま見て懐かしかったと報告してくれたのはうれしかった。

『アムハラ語入門』

重田先生のご厚意で、京大のアジア・アフリカ地域研究研究科では 2001 年以来十余年にわたり、アムハラ語（当初は音声学とセット）の集中講義を受け持たせていただいた。自前のテキストを使うほどの時間はなかったので、例文をもとに説明は専ら口頭で行った。しかし、これでは十分に説明を理解してもらえないと感じたので、独習も出来るようなテキストを作り始めたが、作ってもさほど需要もないだろうと思い、最終的な形にはしないままでおいた。そのうち京大の西真如さんから『フィールドワーカーのためのアムハラ語入門』というとても良く出来た入門書をいただいた。これがきっかけとなり、あらためてやはり自分スタイルの入門書を出そうという気になり、科研費で『アムハラ語入門』を刊行した。大体週一回通年の授業ではシンタックスについては複文にまではなかなか行けないので、関係節に入ったところまでを区切りとした。このテキストについてもほとんど反響はなかった。その後、この冊子の改訂を含め、続編に取りかかっているが、今しばらく時間がかかりそうである。

鈴木秀夫先生のこと

日本語によるアムハラ語入門書の嚆矢は、鈴木秀夫著『エチオピア標準語入門』（1974 年）であろう。著者は 1960 年代にハイレセラシエ I 大学（現在のアジス・アベバ大学）で教鞭を執った著名な地理学者であり、『高地民族の国エチオピア』（1969 年）は日本語で書かれたエチオピアについての最も優れた概説書であると私は思っている。特にご自身がクリスチャンであり宗教に深い関心を持っておられたことから、エチオピア正教について多くのページが割かれているのが特徴である。著者の鈴木秀夫先生は私の指導教官柴田武先生と親しかった関係で、私の大学院での発表に際して出席して下さったこともあった。東大のご退官を前に、エチオピア関係の資料をいくらでも持って行って構わないと言ってくださったので、お言葉に甘えて段ボール数箱分の資料をいただいた。その中には現地で出版されたアムハラ語の識字教育用のテキストで、同じものが 2 部ずつあるものが数種類みられたが、その書き込みを見ると、奥様と一緒にアムハラ語を熱心に学習された様子がうかがわれる。その他、1960 年代にエチオピアで刊行された雑誌類などの今ではなかなか入手が困難な資料も多いことや、エチオピア正教関係の出版物が多く含まれているのに驚いた。これらは私自身の研究に直接関係するものではないが、散逸を恐れて私自身が一時預かりするつもりでいただいたものである。これらの資料をまとめた形で、それもアクセスが容易な形で受け入れてくれるところに渡すことができればと思っている。

オモ系言語 アリ語へ

セム系の言語の調査もほんの僅かな部分に手を付けただけであったが、エチオピア・セム諸語とエチオピア（およびその周辺）の他の言語との関わりを明らかにすることに興味移っていった。そこでクシ系の言語についてはいくつか見てきていたので、全く関わりを持ってこなかったオモ系言語を腰を据えて調べてみなければと思うようになった。エチオピアでのフィールドワークも 1980 年以降は機会が無く、やっと 10 年経って、1990 年再び AA 研の科研に加えていただき、それを実現することが可能となった。

アリ語（アəri語 Aari）を対象言語として選んだのは、北オモ諸語よりも南オモ諸語（アリ語、ハマル語、バンナ語、ディメ語）のほうが研究がなされていないことと、アジス・アベバ大学大学院でアリ語を研究していた A 氏と出会い、優れたインフォーマント、ベツレテ・ウレタさん（当時アジス・アベバ大学理学部の学生）を紹介してもらえ、アジスでしばらく調査が出来たことによる。ベツレテさんは言語的直感に優れ、人柄も申し分なかったが、ゴファ語の要素が諸処に混在していることに後に気がつき、結局データとしては注意して扱わなければならないこととなったのは残念である。ベツレテさんとは社会主義体制の崩壊後しばらく連絡が取れず心配したが、その後政府の役人となり、ついには国会議員になった。この科研による調査は 1991 年 3 月までの予定であったが、湾岸戦争の勃発に伴い、残念ながら 2 月半ばで切り上げて帰国せざるをえなかった。この時以来人類学の研究者の方々と知り合い、その後も多くの刺激と援助をいただくことになった。特に、福井勝義先生とは以前から面識があったが、研究会に加えていただいたり、JANES の創設に際してメンバーに加えていただいたりし、様々な形で便宜を図っていただいた。

その後、科研でも小規模な海外調査が可能になり、熊本大学の小脇光男、山口大学の乾秀行両氏とチームを組んで調査を進めることが出来た。幸い代表者の変更はあったもののテーマを変えながら、エチオピア人研究者とも積極的に交流しつつ、更にメンバーを増やして現在まで継続している。当初はエチオピアのクシ・オモ系言語のデータ収集とそのデータベース化に重点をおいたが、その後は社会言語学的な調査、文字化の問題等の動態面での研究や、ドキュメンテーションの一環として、語りのテキストの収集・分析などを主たるテーマとしている。こうした中で Cushitic-Omotc Studies というタイトルで報告書を刊行してきたが、2012 年から名称を新たに Studies in Ethiopian Languages としてオンライン化 (<http://ds22n.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~abesha/SEL/>) した。

こうした調査を通じて、専らアリ語の基礎的な語彙・文法データの収集と記述を行うとともに、アリ語の文字化に関わる問題も扱ってきた。しかし、前者については、特定の方言に特化して調査を進めることが出来なかったことが悔やまれるが、これから出来るだけ整理していきたいと考えている。また、上述のように私の研究は比較言語学的関心から出発したものであり、再びそこへ戻りたいとずっと願っていた。アリ語の記述さえ全く不十分なままではあるが、少しそこから離れて、比較言語学的観点からの考察に取り組んでみたいと思っている。

（つげ・よういち）

幸運に支えられたエチオピア言語研究

若狭 基道

東京でのアムハラ語調査

「一体全体、何故エチオピアの言葉を？」と何故だか屢々訊かれる。困った質問である。他人の遣らない言語を研究したいから、等と答えるのであるが、それなら何故パプアニューギニアや南米や日本の諸方言を選ばなかったのだ、と問い詰められると答に窮する。学部時代にアラビア語を齧ったり故中野暁雄先生

の聲咳に接したりしてアフロアジア諸語への関心を高めていたのは事実であるが、他の言語だって齧っていたし国語学専修課程に在学して訓点資料等にも接していたのだから矢張り答にはなっていない。相性と云うか運命なのであろう。幼い頃から何となくアフリカに惹かれていた気がする。

ともあれ本格的に研究を始めたのは修士課程に入ってからである。学内で探してみたら即座にアムハラ語ネイティブ話者の GA さんが見付かったのは倖いといしか言い様がない。調査への協力も即座に御快諾戴き、指導教官の故湯川恭敏先生に御報告すると「面白いこと出来るよ」との御言葉、洵に幸先の良いスタートであった。

最初はフィールド言語学の定石を踏んで調査票を用いての基礎語彙・基礎文法の調査を試みた。だが、白状すればどちらも中座した。音の聞き取りは正直困難を極めた。言語学の調査に対する資料を提供して欲しいとの此方の身勝手な意図も時として伝わらない。動詞の活用形と目的語接尾代名詞の組み合わせを網羅的に蜿蜒と訊いて行くと GA さんはその時間の掛かる作業に耐えられなくなったのか、「我々も知らない事を訊いてどうする？」との心からの、だが事実としては虚偽と言わざるを得ない悲鳴を上げる。だが、何よりもエチオピア文字を使った辞書や文法書と云う形で「正解」「模範解答」が既に存在しているのが辛かった。仮に基礎調査を成功裡に終えたとしてもそれだけではオリジナルな業績にならないのである。

結局修論は研究の手薄そうな分野を小さく攻める事にした。それなりに上手く行ったが、執筆中に藤本武さんから Leslau の浩瀚な文法書の上梓を教えて戴いた時には感謝すると同時に、先を越されたか、と焦ったものである。

ウォライタ語との出会い

博士課程進学後の 1997 年、愈々エチオピアでの現地調査を開始した。初回は主としてアジス・アベバに滞在して調査を行った。渡航時点では調査対象言語を決めておらず、調査の進んでいないアフロアジア系統の言語であれば何でも好かった。そして偶々ウォライタ語の話者とチャハ語の話者と知り合えたので、どちらも齧ってみることにした。これはひょっとしたら良くない態度だったのかも知れない。実際どちらの調査も中途半端に終わった。躊躇逡巡の末、ウォライタ語に当面集中すると決めたのは帰国後の事である。チャハ語のインフォーマントを務めて下さった方には申し訳なく、2 回目の渡航ではどの面を提げて行こうかと心苦しかった。「貴方の言語には興味を持てない」と言わなくてはならない。だが私の再訪前にその方は或る事情により渡米され、孰れにせよ調査は継続出来なくなってしまっていた。これは倖いだったのであろう。

この初めての現地調査は調査票の項目を早く埋めること許りを考えていた嫌いが有り、急いては事を仕損じて仕舞った。だから、2 回目、3 回目の調査は事実上、同じ項目の訊き直しであった。だが、ウォライタ語インフォーマントの AK さんの反応は上々である。瑣末に思える例外がポイントになるかも知れない、と妥協せずにとことん私が尋ねて行く過程で、AK さん自身も



写真 1 筆者が初めてウォライタを訪れた 1997 年時点での
ウォライタの様子

ウォライタ語の面白さを実感したのであろう、満足そうに「今回の調査は深みがある」。私も博論の骨格が日毎に固まって行くのが分かる。最初からこうすれば良かった、と猛省を促されたのだが、先に全体を粗く掴んでおいたからこそ細部に配慮の行き届いた徹底的な調査に熱中する事も可能だったのかも知れない。ともあれこうして私は、通り一遍の調査では言語研究の醍醐味は味わえない事を悟った。

尚、2回目以降の現地調査であるが、上記アジス・アベバでのAKさんとの調査に加え、順次ウォライタに滞在する比重を増やして行った。ウォライタでの楽しいホテル生活がどのようなものであるかは『フィールドプラス』第9号に禿筆を呵したので御笑覧戴きたいが、少し補足するとあれは少し恰好を付け過ぎた。実際にはもっと緩〜く懶惰な日々である。例えば毎夜折角の発電機による電燈を使って日本から持ち込んだ漫画雑誌を読んでいたりする。帰国に際しては「記念品」と称して友人に進呈して来るのだが、本当に後生大事に取ってある人が居ると後年分かると態々その古雑誌を借り出して懐かしい想いに浸りながら読み耽っていたりするのだから、何しに行っているのか、と云う感じである。

アジス・アベバでの濃密な共同ホテル生活

アジス・アベバではレストランも併設されていない安宿(とは言え麦酒位はあるし頼めば大抵の物は買ってきてくれる)に泊まっていたが、善良な従業員に恵まれ楽しい日々であった。特に2000年はウォライタに行く前後併せて3ヶ月間、住み込みで勤務する彼等と共同生活だったので忘れられない。彼等の作った食事をしょっちゅう一緒に食べさせて貰ったし、洗濯も無料でしてくれた。甘えっ放しでは悪いので私も支払いの度にお釣りはチップとして渡し、祭日には奮発して鶏を丸一匹贈った。ある時は私がパンを買いに行かせたと口裏を合わせて欲しいと言う。訳が分からない。訊くと、抜き打ちで支配人が来たのにある従業員が偶々サボって不在だったので激怒しているとのこと。咄嗟に「モトミチがパンを買って来いと言ったから」と言い訳したらしい。私も支配人を上手く言い包め、序でに彼等を絶賛し昇給を勧めておいた。尚、翌日、支配人がパンを山程差し入れてくれ、皆で食べたのは勿論である。

最近アジス・アベバに滞在する期間自体が短いので嘗ての様な濃密な共同生活は望むべくもない。従業員も交代したし世相も変わったらしい。私自身も加齢と共に詰まらない一宿泊客に墮したのだとしたら、何とも寂しい。

この宿を紹介してくれたのはこの宿の正面に住むマムフル・テスファイエである。マムフル(先生、師)と云う称号からも分かる様にエチオピア正教の指導者である。マムフルが毎早朝に行うタバル(聖水)の儀式こそ殆どサボっていたが、私は毎晩マムフル宅に御邪魔して夕食の御相伴に与っていた。頑固な処もあるので正直辟易した事もあったが、色々助言して戴いた。週末には車で彼方此方連れて行って貰った。私がウォライタに行く時は荷物を預かって貰ったし、緊急連絡先にもなって戴いた。私に対してだけではなく、人を持て成すのが大好きな人だった。俗世間の人間としては大金持ちで、困っている人を金の力で助けるのが大好きな人だった。私はマムフルから現世の人間として大切な事を多く学んだ。私が口を開く度に「金(カネ)が欲しい、何よりも金が欲しい」と言って憚らないのはマムフルの様に



写真2 筆者がアジス・アベバで泊まっているホテルの入り口が道の右側中央に見える。
右側手前は学校、左側はマムフル・テスファイエの家。

金を遣って他人に喜んで欲しいからである。

ウォライタ語の魅力

一体ウォライタ語の何処がそんなに面白いのか、具体例は枚挙に遑が無い。その詳細は、このようなエッセーでは一切割愛し、博論を初めとする拙稿に譲りたいのだが、編集長の奨めもあるので、以下で若干紹介することにする。尤もこの面白さを遍く共有して貰えると思うのは思い上がりであろう。実際、私の大学の授業評価アンケートでもウォライタ語を扱った授業のみ極端に評価が低く、自由記述欄も罵詈雑言の嵐である。本稿読者諸賢にも、本稿をエッセイとして愉しむ為には、以下、本節を是非ともすっ飛ばされたい。

まずは普通名詞の活用体系の研究がある。ウォライタ語は日本語と異なり、普通名詞も複雑な活用をする。取分け厄介なのが先行研究で「限定・非限定」と言われていた対立である。そんなヨーロッパ的な概念では説明出来ないものであり、具体的な指示物を想定する（し得る）か否かの対立であると説いた。名詞らしい使われ方をする時の形と形容詞らしい使われ方をする時の形がそれぞれある、と考えても、まあ良い。こう考えることで様々な謎も解けるのだが、呼び掛けに使う形にまで具体的な指示物を想定しない形がある、と言い張るのは少々無茶かも知れない、活用表を綺麗に揃えようとする事自体が間違っているのかも知れない、と最近では考えている。

次に、人名の調査がある。注意すべきは、歴史言語学的に、理論言語学的に興味深いから調査をしている、と云う点である。ウォライタでは邪視信仰に絡んで敢えて汚い名前を付けたりする、杯と話すときアフリカに全く興味のない人でも「へえ」と位は言ってくれるが、ウォライタ語人名研究の本当の面白さはそんな処にあるのではない。女性人名は活用もアクセントも1パターンしかないのに、男性人名は活用の型に応じてアクセントのパターンも変わる、だとか、人名が全体として普通名詞の具体的な指示物を想定しない形に似ている、だとか、そうした形態論に関する問題とその謎解きこそが面白いのである。

私は文字論に大いに関心があり、ウォライタ語を題材に研究して来たが、アフリカ諸語のフィールドワーカーとしては珍しい方かも知れない。これまた強調したい点は、正書法の制定だとか、況してローマ字による音素表記の普及に貢献する気は私には毛頭ない、ということである。純粹に彼等の文字使用を観察し、そこで何が起きているのか知りたいだけなのである。記述言語学者としては当たり前の態度だと思っているし、ウォライタの社会を考慮するとウォライタ語を書く必要性が果たしてあるのか、と云う根源的な問に辿り着くのだが、今時この様な考え方をしていると研究成果を現地に還元しない困った研究者と見做されても仕方ないのかも知れない。

ひょんな事からウォライタポップスを紹介する機会にも恵まれた。音楽の専門家でなく、言語学徒の端くれとしてはその歌詞に見られる詩的機能、簡単に言うとウォライタ語だからこそ出来る、他の言語に翻訳出来ない側面に着目したのだが、煎じ詰めれば「ウォライタ語を知らなければ愉しめない」と云う結論なのだから、ウォライタポップスをブームにすることは叶わなかった。勿論、翻訳可能なウォライタポップスも多く、今後はそうした歌が増えるのかも知れないが、そうなったら少なくとも私にとっては皮肉にも研究対象としての面白さは減じる気がする。因みに詩的機能を追い求めると文学に行き着くのは当然である。私が最近、ウォライタの謎々の蒐集に嵌っているのも宜なる哉、である。

文の構造に関しては、ウォライタ語は引用が滅法面白い。大抵の場合に直接話法と間接話法が混じるのである。例えば「君とは、私は働かない」と言われた人が悄気て帰って来て他人に報告する場合、「彼は、私とは、私は働かない、と言った」と言えるのである。又、どの言語でも引用部は文の他の構成要素とは異質な要素であるからには通常の節を構成しない可能性があり、事実ウォライタ語の場合、代名詞の使い

分けがその傍証となるのだが、推敲に推敲を重ねた整った文のみを相手にする伝統文法から大きく掛け離れたこの結論は到る処で拒絶反応に遭っているのが現実である。これだけ反対があるからには、私の方が莫迦だったのであろう。

こうして見ると、色々研究して来たものだ。その成果の大半は鼻眞目に見ても陽の目を見ておらず、その点では私の研究は不幸なのかも知れない。だがそれはレベルの低い研究総てに通じる事であろう。1つ1つ丹念にデータを集め、縄を解して行く作業の過程で私は慥かに満足を感じていた。なのに文句を言っではなるまい。

博士論文の完成とその後

扱、通り一遍では駄目だ、徹底的に調べなければ駄目だ、との立場で私は研究して来たのだが、そうした研究態度で良かったのかどうかは実は分からない。実際、博論提出は、私が少なからぬ時間アルコールに依存していた事とも相俟って遅れに遅れた。ウォライタ語の全体を扱っている上に、掛けた時間相応の分量はあるのでコピー代や製本代が嵩んだが、相応の儲けは無かった。だが研究を志す若い人達に、薄っぺらいもので構わないから早く書け、とは言いたくない気もする。私に指導を仰いでいる学生がいないのはこれまた倖いとしか言い様がない。

博論の完成は私の研究生活にとって大きな一区切りであったが、その後も現在に至るまで、ウォライタ語の調査を継続している。だが博論完成後、アジス・アベバのAK氏も、ウォライタの町でインフォーマントを務めて下さったAG氏も忙しくなってしまう、今迄の様に多くの時間を私と過ごす事が難しくなった。別のウォライタ語話者を探す手もあるが、何となくそんな気になれなかった。そこでウォライタの町にも色々な言語の話者がいることを利用し、並行的に他の言語の、具体的にはカンバタ語の調査を始めた。これがまたウォライタ語の研究にも役立つ、更に言えば必要であるとの予測の下にでもある。

ただ、恥ずかしながらどちらの調査も目下停滞している。言い訳には事欠かないが、何と行っても現地調査に行っていないのが大きい。非常勤の授業の関係で長期の休みは取れない。どうせ行くならもっと調査票を充実させてから、等と正論をほざいている内にずるずると行かなくなってしまう。個人の科研費は勿論、2015年度からは科研に応募する資格すら失った（その後、再び資格は復活した）。そうこうしている内にマムフルの訃報も届いた。

だが、健康面で自信のなくなった現時点で調査費が潤沢にあたりしたら却って困る。3年以上に亘るこの日本引き籠り期間に死蔵されていたデータを聊かなりとも活用して成果を公にする事も出来た。そして何よりもフィールドに行きたい気持ちを改めて確認出来た。こう考えると、例えば博論提出前ではなくこのタイミングで調査に行けなくなった私は全く以て運が良いと言わざるを得ない。

私は嘗てアフロアジア言語学に革命を起こす覚悟で研究を始めた。己が菲才が明らかとなり、生活に追われている現在、悲しい哉、そんな妄言は吐かなくなった。私も少しは賢くなったのだろう。だが、せめてオモ言語学革命なら、ウォライタ語学革命なら可能かも知れない。そう、それこそがアフロアジア言語学革命の第一歩である、と矢張り大きな事を言いつつ、緻密な現地調査を今後共続けて行く意志を表明して筆を擱きたい。

(わかさ・もとみち／明星大学非常勤講師、跡見学園女子大学兼任講師、白鷗大学非常勤講師)

私の言語研究～エチオピアでの出会いと別れ～

乾 秀行

オロモ語との出会い

私が最初にエチオピアに行ったのは、1992年の夏でした。

言語音の中には通常の肺からの呼気を使って発音する音以外に、喉頭を使って発音する音があります。音声学では放出音と呼ばれる音で、教科書にはコルクの栓を抜く時の音と説明されています。身近な言語にはそのような言語音はなく、類型論的に世界言語の音の体系を調べている時にこの音にとっても興味を覚え、実際に耳にしたくなったことがエチオピアでのフィールドワークの始まりでした。

その時は社会主義政権崩壊直後で政情がきわめて不安定な時で、首都アジス・アベバでも衝突があつて多くの逮捕者が出て緊迫していたため、車で地方に行くことなどできず、アジス・アベバのホテルで2週間過ごしました。その時ホテルのレストランでオロモ人が話しかけてきたのが最初の対象言語としてのオロモ語との出会いです。彼は日本で二年間生活したことがあり、その時の経験を片言の日本語を交えながら話してくれました。次の日から彼の友人であるオロモ人が次々にホテルにやってきて、最終的には5人ぐらいの集団で食事をしながら語彙調査をしました。オロモ語には喉頭を使う音が放出音以外にもう一つあり、入破音と呼ばれている音で「飲む」という単語に出てきます。ドリンクを飲みながら発音の仕方を教えてくれるのですが、なかなか合格点をもらえませんでした。その時その中のひとりが親族名称の語彙の話になったときに、突然「祖母」という単語が入った悲しい旋律の歌を悦に入って歌い出したことが今も鮮明に記憶に残っています。彼らはアジス・アベバ大学の学生だったのですが、その学生は大学構内での衝突で逮捕された経験があるとこっそり教えてくれました。次にエチオピアを訪れたときには彼らにはもう会えず、最初に話しかけてきた学生はフィリピン、歌を歌っていた学生はアメリカに渡ったと聞いています。その後もこういった一期一会の出会いがエチオピアではとても多く、次に会える保証はありませんでした。今は携帯電話が普及し、メールアドレスの交換も可能となり、そういうことは少なくなりました。

音声学的な興味からスタートしたフィールドワークでしたが、単語や挨拶のことば、簡単な文を聞き取っていくうちに、フィールドワークの世界にはまりました。オロモ語は動詞の複合時制が複雑で、たとえば動詞の不定形に英語のbe動詞に当たるjiraという形をつけると、ちょうど日本語の「テイル」をつけるのと同じような機能を果たします。前に来る動詞の種類によって、jiraが付けられたり付けられなかったりするのですが、アサツラという町に2ヶ月ぐらい滞在したときは、一日中その形ばかりをしつこく聞き出そうとするので、インフォーマントになってくれたジャーナリストの男性に、「またjiraの話か」と呆れられました。90年代はオロモ人の民



写真1 アサツラで出会ったオロモ人ジャーナリスト

族活動が制限されていた頃で、民族高揚の過激な記事を書いたオロモ語の新聞が突然発刊停止になったりしたため、人目を気にしながらの調査でした。彼の取材にも同行させていただきました。農協のような所に行き、たとえば作物の出来具合について取材するわけです。その記事が新聞に載ると得意げに「面白いだろ」と自慢してみせてくれるのですが、他愛もない地方ニュースが面白いわけがないので、正直に「どこが面白い？」と質問すると、彼も自覚しているようで、悲しそうな顔をしていました。彼はアジス・アベバ大学の社会学の修士を出た人で、大学に戻って博士を取る計画を立てていました。その時は一緒に少数言語の村に行き調査しようと話をしていましたが、残念ながら、その数年後に病気で急逝してしまいました。とてもいい男でした。

少数言語調査～バスケット語～

2000 年頃から、柘植先生が中心で始まった南西部で話されている少数言語の調査に参加しました。調査地としてアルバ・ミンチを拠点に活動を始めました。最初はとにかく少数言語話者を探すということで、街中を聞き回るのがですが、金目当ての怪しい輩に付きまとわれたり、4 言語を自由に操ると称する男に騙されて無駄に時間を潰したり、なかなかお目当ての少数言語話者は見つかりません。アルバ・ミンチの近くにガンダという少数言語があると教えられ、「キルブノ（近いよ）」と言われて案内者に連れられて歩き出したら、とんでもない距離で、炎天下を 3 時間ぐらい歩かされた時にはもうくたくたで調査どころではありませんでした。アルバ・ミンチまでの帰り道はもう歩けず、道端にへたり込んでいると、横を大きな荷物を背中に背負った女の子の集団がおいしそうにサトウキビをかじりながら追い越していきました。ひ弱なファランジ（外国人）の姿は逞しい彼女たちには滑稽だったらしく、思いっきり笑われました。たまたま通りかかったトラックの荷台に飛び乗り、無事ホテルにたどり着いた時は服が泥だらけで、清掃のおばさんにこれまた大笑いされました。

その時苦勞して最後に出会ったのが、現在主に研究しているバスケット語のインフォーマントのフィクレです。その後 10 年以上彼との付き合いが続いているのですが、毎年 1 ヶ月程度アルバ・ミンチと彼の生まれ故郷であるバスケットの村に行くことが恒例行事となりました。バスケットに行くには、ソッドからサウラまで車で 3 時間走って、それから山道に入ります。途中谷底に落ちるのではないかという断崖絶壁の横を通り過ぎるときには、高所恐怖症の私はいつも手が汗で滲みます。村にはホテルがないのでテント生活なのですが、そこで問題なのが、蚤・ダニからの攻撃です。油断して腰掛けていると、あっという間に身体中刺されてしまい、かゆくて調査どころではなくなります。日本から持ってきたペット用の防虫剤を身体中にスプレーし、全身タイツで肌を守り、慎重に調査をすることになります。虫に刺されるか刺されないかは体質によるようですが、私は全く駄目なタイプで、毎回虫対策がフィールドワークの要となります。

少数言語は文字がないので、もちろん辞書も教科書也没有ありません。しかしバスケットの小学校ではバスケット語の授業が始まりました。赴任してきた先生たちはどう教えたらいいか、みな苦勞しています。SIL（夏期言語研究所）が 2008 年にバスケットの高校の先生と共同で試験的に教科書を作ったのですが、文字がアムハラ文字表記になっています。バスケット語を表記するために、長母音記号や重子音記号が新たに考案され、アムハラ文字にはない入破音や h の有声



写真 2 左がバスケット語インフォーマントのフィクレ氏

音には、アムハラ文字を改変した文字が作られていました。しかしそのような正書法はアムハラ語学習中の小学生を無駄に混乱させる元になるので、決して教育用にすぐれた教科書ではありません。そこで2011年から母語話者のための教科書作りに着手し、小学校の先生に相談し、インフォーマントのフィクレと試行錯誤を繰り返しながらローマ字表記による正書法を考えました。2014年に絵付きの教科書が完成し、バスケットにある小学校に配布してきました。今後も改良していくつもりですが、実際に使ってくれるか楽しみです。研究成果を彼らに還元できることが言語学者としての大切な仕事の一つであると思っています。

さらに南へ

バスケット語は系統的にはオモ系に属しているのですが、現在数万人の話し手を持ち、すぐさま消滅の危機にある言語ではありません。しかしエチオピアにはバスケット語よりももっと話し手の数が少ない言語がたくさんあり、それらはまだ十分な研究がされていません。最近もガンベラ近郊で新たな言語が見つかったそうです。そのような言語の記述はできるだけ早く行わないと、近隣の有力言語に言語交替をする可能性があります。つまり少数言語が次世代に引き継がれなくなってしまいます。2、3年前からニャンガトム近郊のナイル・サハラ系やクシ系の少数言語の記述調査を始めました。こちらは極暑地域なので、今までの言語調査とはまた違った困難さを伴います。また交通手段がさらに限られ、エチオピア人運転手でもどこが道なのかわからないような道を走り、ワニが生息する川は木をくり抜いたローカルボートで恐る恐る渡り、野生動物が棲むジャングルの中を急ぎ足で移動することになります。しかしその先には村があり、少数言語が生き生きと話されています。古い生活形態が奇跡的に残っています。

現在は、アジス・アベバ大学の先生たちと共同で、そういった少数言語のドキュメントを作る研究をしています。この調査ではビデオカメラで生の話しことばを録音することが基本で、それを文字化して文法解釈するという作業です。通常の記述調査では言語データを収集する際にこちらの意図した文を言うので、最初から聞き取った文の意味は自明です。ところが、会話の場合、一つ一つの文が何を言っているのか文字にして理解することから始まります。何度も何度も聞き直すことになります。他動詞文であれば通常主語と目的語がありますが、日本語と同じように、会話の中では言わなくてもわかっている要素（言語学的には背景化されたトピック）はどんどん省略される方が自然です。逆に、会話を成立させるための様々な文法要素が加わります。日本語で言えば、「だよね」や「じゃん」みたいなニュアンスに当たることばがたくさん出てきます。こういった話し手の文に対する判断に関わる要素のことを言語学ではモダリティと呼びますが、どの言語も同じでしょうが、非常にたくさんの形態があり、それぞれの機能を明確に説明することが難しい場合も多々あります。しかしそれらは会話を成立させる上で最も重要でかつ人間的な部分であり、その解明が言語研究にとって実は一番面白いのかもしれない。

言語学は極端な話、言語データさえあれば成り立つ学問です。しかし、言語は話し手がいてこそ生命を宿します。現地の人と関わりながら、時には大喧嘩をし、時には危険な目に遭いながら、言語データを集めるこの研究スタイルが私には合っているようです。

ボートでしか渡れなかったニャンガトムのオモ川に、最近ついに鉄製の立派な橋がかかったそうです。サトウキビのプランテーションのためだそうですが、彼らの生活環境も大きく変わるでしょうし、言語交替が一気に進む可能性もあります。変わってしまう前に言語調査を急がなければなりません。

(いぬい・ひでゆき／山口大学)

フィールドワークを体験して

小脇 光男

エチオピアと出会うまで

学部、大学院では中東の言語やメソポタミアの古代語を少しずつ齧った。留学先のイスラエルでは、言語学系の学生は、東、西、南のセム語から少なくとも一つずつ学ぶべしという指導教員の方針のもと、いくつかクラスを巡り歩いてみた。その中にゲエズ語（古典のエチオピア語）があり、週2回、2年間学んだ。もっとも最初の年はヘブライ語での授業についていけず、2年目は再履修であったが。紙の上とはいえ、これがエチオピアとの最初の出会いと言えば出会いであった。1970年代の後半、エルサレムではエチオピア人の集団をよく見かけたけれども、なぜ彼らがここにいるのか、エチオピアとはどんな国なのか、といった歴史や現実にはほとんど興味も関心ももっていなかったし、後にエチオピアに関わることになるとは夢にも思っていなかった。

フィールドワークの切っ掛け

もう随分前のことになるが、金沢で柘植先生と一杯やりながらエチオピアのお話を伺っているうちに、何か共同研究を、ということになった。私自身そのような話題はもう忘れてしまっていたところに後日、エチオピアの少数民族の言語調査というテーマで科研を申請するので、参加するようにという連絡をいただいた。フィールドワークの経験も研究の蓄積もなく、記述言語学の実地訓練すらも正式に受けたことがない者が、このような学術的な調査、研究に参加してもよいものかと躊躇した。一度ちょっと行ってみるという気持ちで参加すればよいからというお誘いに乗って、とりあえず名前を加えていただいた。

2001年度にこの科研は採択され、以降も柘植先生、乾先生のご尽力により、若い研究者のメンバーも加わって、このプロジェクトは今日まで継続している。私はといえば、途中下車するわけにもいなくなり、ほぼ毎年、乾季の時期にエチオピアを訪問することが年中行事の一つとなって、とうとうズルズルと今日に至っている。

初めてのエチオピア行きとコンソ語との出会い

第1回目（2001年）は、初めてのエチオピアということもあって、柘植先生とご一緒させていただき、アジス・アベバ大学エチオピア学研究所（IES）での手続きの方法やエチオピアの言語状況をはじめ、エチオピアの諸事情などを教えていただいた。余談だが、出発の数日前に持病の尿路結石が発症し、痛みと血尿に苦しみながらの出発、幸い機上で石が排出されたことが思い出される。

エチオピアの言語調査の現状についてはまったく予備知識はなく、こんな中でどんな言語を選んで調査すべきなのか見当もつかなかった。IESや言語学科の先生方にもアドバイスをいただいた。しかし、たいていは現地に行きつくまでに時間も体力も消耗してしまうであろうところで使われている言語だった。いきなり遠方に出かけるのは無理だと感じ、とりあえずアジス・アベバ市内でなんとかインフォーマントを見つけて調査し、後日現地に出かけてみるという省エネ方法はないものかと思案した。そこで翌2002年は、言語地図などの資料を片手に大学のキャンパスに居座り、そこいらを歩いている学生に声をかけて情報収

集すること数日、インフォーマントとして英文科で学ぶコンソ（Konso）出身の青年、A 氏を紹介してもらうことができた。初めから調査対象としていた言語ではなかったが、これがコンソ語を調査する偶然の切っ掛けであった。

A 氏にコンソという地域やコンソ語の諸事情を尋ねながら、取り敢えず基礎語彙と音声の調査に取り組んだ。この時の記録は mini disk 12 枚に残っているが、なんとも未熟な調査内容で赤面してしまう。A 氏は以前にもインフォーマントの経験があり、また英語の専攻であったこともあって語感の鋭く、こちらの尋ねること以外には余分な情報は語らず、優れたインフォーマントだった。しかし、残念ながら、彼はオランダ留学を控えており、これが彼をインフォーマントとする最初で最後の調査となった。代わりのインフォーマントとして、コンソ族は南部地域を中心にあちこちにコミュニティーを作っているのので、出かけてみるようにとのアドバイスをもらった。

コンソ語とは？

ところで、この時はコンソ語がエチオピアの諸言語の中で、言語学上どのように位置づけられているかなど、詳細はほとんど知らないままだった。帰国後に調べてみたところ、言語学の百科全書と言われる『言語学大辞典』（三省堂）には独立の見出し語として「コンソ語」の記載はなかった。この言語に関する報告、論文の類も漁ってみたが、概略を知ることのできるような記述文法は見当たらなかった。逆に言えば、予備知識に惑わされないですんでいるのかもしれない。

なお、コンソはアジス・アベバからやや南西寄りに約 600km 下ったところにあり、中心部はカラティ（Karati）と呼ばれている。コンソ族の集落はカラティ周辺の山の上にあり、いくつかの村落に分散している。コンソ語（カラティ語とも）はアフロ・アジア語族中のクシ諸語（Lowland East Cushitic）に属し、オロモ語などと近い関係にある。母語話者人口は 20 万～30 万と、資料により相当に幅がある。コンソ族は商売に従事する人が多く、その言語はコンソの地域を越えて、特に南部では通商語として使われているようである。コンソ地域内外には方言がいくつかある。アルバ・ミンチ（Arba Minch）、ジンカ（Jinka）など南部の町には、コンソ族のコミュニティーが散見されることを確認している（一説によれば当局による強制移住とも）。

コンソでの調査、そしてインフォーマントについての悩み

A 氏の後は良いインフォーマントに出会うことができず、調査にはしばらく目立った進展はなかった。この間の事情は省略するが、インフォーマントが母語としてのコンソ語を使いこなせない、A 氏とは出身地域が異なっているなどの事情が重なり、初回に収集したデータはほとんど役に立たなかった。

2005 年と 2006 年の比較的まとまった期間、コンソで調査する機会を得た。現地では教会関係の若い K 氏がインフォーマントになってくれた。新約聖書のコンソ語訳（2003 版）、コンソ語で書かれた初等教育用の算数、民話、地理、保健などの教材を紹介してもらった。たいていはアムハラ文字で表記されており、ごく一部がラテン文字で表記されていた。コンソ語のあらましを掴むのには有用な資料と思い、部



写真 1 コンソの村で織物をする老人（2005/3/5）

分的に音読、録音してもらおうとともに、一語一語説明してもらった。アムハラ文字で記されたコンソ語を自分で音読しながら文法分析を試みるのは、正書法も特に定まっていらないようなので、かなりの苦勞であった。

ところで、この K 氏も基礎語彙や動詞の活用を尋ねる段になるとかなり怪しく、自分でもそれと認識したのか、自分よりもコンソ語をよく知っているという友人を一人連れてきた。二人の意見はしばしば食い違い、調査ノートは読み取り不能となってしまうのだが、基礎語彙、動詞の基礎的な活用などを、今後の訂正、修正の可能性を多分に含みつつも、とにもかくにもまとめることはできた。



写真 2 チャガを飲んでみる (2006/3/2)

ついでながら調査の合間に、学校教育でのコンソ語使用について High School (生徒の年齢から初等～中等教育レベルと思われる) の教員に聞き取りを行った。校内に入ると、ここにも英語教育の波が押し寄せており、「英会話力向上のため週に一回、教員も生徒も英語を話す日」「金曜日は英語を使う日」などのポスターが貼ってあった。参観を許可された英語クラスは、100 人位の生徒が教室を埋め尽くしていた。教科書はなく、生徒は教師の板書をひたすらノートに書き写していた。教員は国内の各地から赴任してくるためか、授業はアムハラ語で行われていた。校長に学校教育におけるコンソ語の使用やコンソ語の文字化の可能性について尋ねてみたが、あまり関心をもっていないようであった。

新しいインフォーマント

2007 年、最初のインフォーマントであった A 氏がオランダ留学を経て、アルバ・ミンチ大学の教員になっていることを知り、同地で再会することができた。その折、同地の High School 教員の中にインフォーマントとして適任者がいるからということで、カラティ出身の社会科教師、G 氏 (当時 45 歳) を紹介された。彼はインフォーマントの経験はなかったけれども、常に的確に答えてくれ、なによりも熱心に、辛抱強く調査に付き合ってくれた。G 氏の協力を得た 5 回にわたる調査は最も安定したデータが得られた時期であり、これまでのデータを点検、修正することもできた。また、調査の合間に、多方面にわたる彼の博学な知識に耳を傾けることも楽しい一時であった。

別の言語に挑戦してみたが…

その後、突然 G 氏と連絡がとれなくなったのを機に、コンソ語の調査には、まだ満足できる結果を得たわけではなかったのだが、一応の区切りをつけ、エチオピア・セム語にも触れてみたいと思った。アジス・アベバに近い地域ならブタジラ (Butajira、いわゆるグラゲ・ゾーン Gurage Zone に位置する) で話されているドビ語 (Dobi, Dubi) がよいとのアドバイスがあったので、早速インフォーマントの青年を紹介してもらった。しかし、ここでまたインフォーマントの問題に悩まされることになった。肝心のドビ語については、しばしば忘れていたり知らなかったりという有様であり、調査の最中に携帯で頻繁に親兄弟に確認するため、時間をかけた割に有益と言えるようなデータは集まらなかった。この調査の途中、同じインフォーマントから、ドビ語はともかく、この言語を調べてみないかとの提案があった。それはムエツト (Muett) と呼ばれる言語で、ドビの女性の間で、しかも特別な祭りの時だけ口にされる言語だという。その

真偽のほどはわからないが、アジス・アベバ大学に関心を持っている研究者がいるようである。また、この祭りについて自分の姉が卒論を書いているということで、そのコピーを見せてくれた。いくつかの単語が記されていたので、一応メモさせてもらったものの、それきりになっている。

おわりに

振り返ってみると、良いインフォーマントとの出会いが調査の進捗にいかに重要なことかを実感する。2000 語程度の基礎語彙とそれらの用法を収集するだけでも多大な時間を費やしてしまった。

2013 年春に退職してからはフィールドに赴く機会も逸しているし、体力的にももうその機会はないかもしれない。記録ノートや収集した資料は、前任校の研究室を去る時、段ボール箱に無秩序に詰め込んだままになっている。今後の展望は漠としたものであるが、少し落ち着いたら未整理のデータをまとめたいと思っている。

(こわき・みつお／熊本大学名誉教授、京都産業大学)

現代エチオピアと古代エジプトを繋ぐロマン

吉野 宏志

はじめに

現在はエチオピアでの現地調査を基に大学院で言語学の研究を行っているが、元々私が志望していたのはエジプト学者だった。古代エジプト文明の様々な側面を対象とする研究者をエジプト学者と呼ぶことができるだろう。私は特に古代エジプトの文字や言葉に魅了されていたが、語学や文献学で問題となる「言葉の意味や使われ方」よりも、「構造や体系」の方に大きな関心があった。高校卒業後にリヴァプール大学（イギリス）のエジプト学科へ入学し、著名な古代エジプト語研究者の一人である Mark A. Collier 上級講師（現教授）に師事した後、広くアフロアジア語族を対象とする言語学の道へ進むため、セム語学の伝統を有する筑波大学大学院の一般言語学研究室へ進学した。執筆時現在、池田潤教授の下でアッレ語（‘Ale）の動詞形態統語論を中心とした調査研究を進めている。本稿では、アッレ語研究の現在、ガウワダ村でのフィールドワーク、そして古代エジプト語研究への回帰について述べる。

アッレ語研究の現在

私が調査対象としているアッレ語は、アフロアジア語族クシ語派東クシ語群に属するデュライ諸言語の一つだ。話者の分布する主な地域は南部諸民族州アッレ自治区で、中心地はコンソのバスターミナルからジンカの方角へ約 40km 進んだところに位置するガウワダ村（/gáwwáda/）と呼ばれている。アッレ自治区自体の歴史は浅く、元々はコンソ特別自治区とデラシェ特別自治区の境界に暮らしていたアッレ族の居住地が 2011 年 1 月頃に独立した自治区（woreda）として承認されたばかりの新しい行政地区だ。それまでは民族名が定まっておらず、村の名前で呼ばれることが常だった。伝承によると彼らは現在のアッレ自治区

北部の高地地方に最初の集落であるアウガーロ村 (/ʔawkáro/) を形成したらしく、彼らの言葉で「高地」を意味するアッレ (/ʕále/) を民族名として採用したという。現在アッレ自治区にはアウガーロとガウワダを含めて 17 の村があるが、これに加えて、エチオピア暦 2008 年（西暦 2015 年頃）中の完成を目標に、ウォランゴ村 (/wollánko/) という新たな中心地となる村の建設が進んでいる。現地にいるアッレ族の友人の情報によると、西暦 2015 年 8 月中に全ての行政事務所がウォランゴ村への移転を完了し、ウォランゴ村は既にアッレ自治区の正式な行政的中心地として機能しているようだ。

執筆時現在、私はまだ 5 回しかエチオピアを訪問していない「初心者」ではあるが、初回からガウワダ村で調査を行っている。調査協力者のほとんどが低地地方のガウワダ村出身だが、低地地方と高地地方の違いを見るため、高地地方にあたるラリチョ村 (/laliʕo/) の出身者にも協力を依頼している。現在、アジス・アベバ大学の大学院生 Getachew Gebru 氏と情報交換を行いながら、アッレ語文法の調査研究を進めている。特に Getachew 氏はアッレ語の名詞形態論を対象に研究を進めており、私が調査している動詞形態統語論と合わせて、語や文の構造に関する研究は着々と進んでいる。私は特に移動事象の類型論研究や、複数の動詞や節から構成される複雑な文について研究を進めており、第 13 回国際認知言語学会（ニューカッスル、イギリス）、第 22 回国際歴史言語学会（ナポリ、イタリア）、第 11 回言語類型論学会（ニューメキシコ、アメリカ）、第 8 回世界アフリカ言語学会議（京都）で研究成果の発表を行った。

アッレ語¹の先行研究で最も全体的な記述は Amborn et al. (1980) だが、主な言語データは高地地方の村々で収集されており、低地方言の情報が欠けている部分もある。Tosco (2006, 2007, 2008, 2010a, b) はガウワダ方言の調査研究をしており、動詞形や情報構造など様々な側面の記述および分析を進めている。最近の研究論文としては Yoshino (2013a, 2013b, 2014, forthcoming) があり、アッレ語ガウワダ方言の動詞形態統語論について記述分析が進められている。

ガウワダ村でのフィールドワーク

そもそも私がアッレ語を対象に選んだのは偶然であった。大学院入学後最初の夏、人生初のエチオピア訪問から遡ること半年前の 2011 年夏に、筑波大学で国際研究会を開催するにあたりアジス・アベバ大学から 2 名の研究者が招聘された。入学後に指導教員の池田教授からエチオピアでの調査に誘われ、二つ返事で快諾していたことから、その 2 名の研究者の東京都内でのアテンドを手伝った。その内の一人であった Wondwosen Tesfaye 教授が、これから私がエチオピアでの言語調査を始めるにあたって言語学的記述に乏しい言語のリストを提示してくださったのだ。それぞれの言語について簡単にだが文献調査をしたところで、前述の Tosco (2006) による「ガウワダ語」の記述を見つけ、先行研究ゼロから調査を始める難しさや地理的にアクセスが困難であるというようなリスクを避ける意味でもガウワダ村で「ガウワダ語」を調査することに決定したのだ。また 2011 年夏には東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所でアムハラ語の言語研修（主任講師：若狭基道氏）を受講した。これもまたこの年に開講されたのは偶然で、前回の研修は 1995 年、さらにその前は 1970 年だったようだ。

2012 年 2 月に初めてエチオピアを訪れ、最初の数日は高山病に悩まされながらアジス・アベバ大学で客員研究員登録の手続きやガウワダ村やアッレ語に関する情報収集を行った。幸いにもガウワダ村出身の大学生が卒業したばかりだったので、ガウワダ村で役人をしているという卒業生の Geniso Gesato 氏を紹介してもらうことができた。Geniso 氏は私と同年代だが、当時はアッレ自治区の観光・文化担当事務所の所長

¹ Amborn et al. や Tosco の調査および出版時には、まだアッレ自治区が存在していなかったため、デュライ語 (Dullay) やガウワダ語 (Gawwada) のように呼称されている。

をしていた。アポイントメントを取ろうと電話をして研究について説明をすると、快く引き受けていただけになった。一先ずコンソのバスターミナルで合流してからガウワダ村へ案内してもらうことを約束して、翌朝アルバ・ミンチ行き長距離バスのチケットを購入し、翌々日にはアルバ・ミンチへ到着した。道路舗装工事の影響か、アジス・アベバからアルバ・ミンチまで16時間近くかかってしまい、さらにアルバ・ミンチ全体が停電していたため、予定していたホテルを探すこともできず、バスターミナル付近の安宿で夜を明かした。朝が来るとすぐに宿を出て、コンソ行きのミニバスに乗り込み、満員になるまで1時間乗客待ち、そして4時間の旅程を経



写真1 Geniso 氏（中央）、Niguse 氏（右）、吉野（左）および当時の職員4名（後）のミーティング

て、昼過ぎにコンソのバスターミナルへ到着した。Geniso 氏と待ち合わせ場所の St. Mary Hotel で合流したが、その日は伝統的に牛や山羊などを屠殺する習慣のある土曜日で肉料理がメニューにあったので、シャクラ・ティブスを二人で頂いた。シャクラとは下部に燃料が置かれた小鍋状の調理器具で、揚げ焼きされた状態（ティブス）で提供された肉の塊をナイフで切り分けて香草入りのチリソースをつけて食べるのだ。当時はガウワダ村へのミニバスが平日の早朝と夕方にしかなかったもので、土日は村のことやアッレ語について情報を聞き出そうと Geniso 氏を質問攻めにしてしまった。その時に初めて、ガウワダ村を中心とする地域に暮らす民族の居住地としてアッレ自治区が独立していたことを聞き、また正式に「アッレ」という名前を民族・自治区・言語に使用することになったことをこの時に初めて知った。

ガウワダ村での生活は、最初こそ習慣の違いには戸惑いを感じたが、アジス・アベバやアルバ・ミンチのように人混みや忙しい様子もなく、蒸し暑かったり水不足になったりするコンソとも異なり、とても過ごし易かった。ただ初回は毎日コンソとの往復をしていたので、日中しか村に滞在できず、また週末や客が少ない日にはミニバスが出ないので困ったりもした。その後の調査では、Geniso 氏と同じくガウワダ村出身でアジス・アベバ大学を卒業した Niguse Gusse 氏という別の公務員の自宅に寝泊まりさせてもらえるようになり、あまり時間に追われず調査をすることができるようになった。村での一日はだいたい決まっていて、7時半に山羊とニワトリの鳴き声で起床する。8時には「カフェ」で朝食のサモサや揚げパンを紅茶で頂き、9時過ぎ頃にアポイントメントのある方へ電話して所在を確認してから訪問して調査を開始。12時には村の友人や協力者に「レストラン」で昼食を奢りつつ親交を深め、午後にも協力してもらえる場合は14時過ぎに調査を再開。しかし街灯や屋内照明はほとんど無いので日が暮れる前に調査を終え、調査協力者がいない時間帯は収集データの整理をしたり他の協力者との約束を取り付けたりしている。

村での調査において、個人的に一番難しいと感じているのは、技術的なことではなく、謝礼の支払いだ。外国人はもとより研究者もあまりやって来ないこともあり、村人たちは良くも悪くも「研究協力」に慣れていなかった。そのため当初は謝礼を受け取ってもらえず、困惑してしまったことが多々あった。今でも積極的に現金で受け取ろうとしてくれないので、最近は代わりに祭で分け合う牛肉のための共同出資を申し出たり、日本やアジス・アベバから大量のお土産（お菓子など）を持ち込んだりすることで相当分を渡している。

今までのフィールドワークで一番の失敗だったのは、2014年9月の調査だろう。アジス・アベバの定宿にしている Baro Pension で出会った日本人旅行者3名がたまたまこれから南部を見て回るといふことで、ガ

ウワダ村にも遊びに来ることになった。ちょうどエチオピア暦の新年だったので、遙か遠くの先進国でトヨタの国「ジャパン」からやって来た客人3名のために村の友人たちが盛大な宴会を開いてくれた。(どうやら私は客ではなかったらしい。) 私自身もエチオピア新年は初めてだったので浮かれ過ぎてしまった。新年3日目に体調を崩し、4日目にはインフルエンザのような高熱と痛みに襲われる始末。ベッドから起き上がることもままならず、何とか村の診療所にバイクで送ってもらった。診療所に着くなり、マラリアの疑いがあるということで簡易検査を受けた。その結果、何と陽性反応が確認されたのだ。幸いにも持参していた治療薬マラロ

ン (Malarone) の服用を直ぐさま始めたおかげで大事には至らなかった。帰路で寄ったアルバ・ミンチ病院とアジス・アベバの韓国系病院で受けた血液検査はどちらも陰性反応になっていた。ほとんど調査できずに貴重な研究費を浪費してしまったことは反省しなくてはならない。エチオピアで調査をしている言語学者の知り合いでマラリアに罹患した方がいなかったため過剰に反応してしまったようにも思うが、無事に帰国できたのはガウワダ村の友人たちの献身のお陰でもある。いくら感謝しても彼らの好意に報いることはできないが、言語調査を通じてアッレ族への貢献をこれからも続けていきたい。また、リスク管理について深く考えさせられる経験でもあった。



写真2 新年の宴を主催してくださったレストラン経営者の Kusse Wechefo 氏 (右) と、友人の Ephrem Teshome 氏 (左)

古代エジプト語研究への回帰

古代エジプト語とアッレ語に直接的な繋がりとは認められないが、究極的には祖語を共有すると考えられる言語として対比することは重要だろう。アッレ語の動詞非完結形の活用は、エチオピア周辺地域で話されている他のアフロアジア語族の言語とは異なり二人称や女性の動詞接尾辞に /t/ が含まれておらず、アッレ語の形容動詞 (adjective verb) の活用と類似している。アッレ語の研究を進める上で他のアフロアジア諸言語の文献調査も並行して行っているが、その中で特に東クシ諸言語の副動詞や形容動詞が他の動詞形・動詞クラスとは異なる振る舞いをするのが多々あると分かった。その異なる振る舞いの一つに属格主語という現象をあげることができる。古代エジプト語の (共時的に) 基本的な動詞活用は所有格代名詞と同じ形態素によって人称活用しており、属格主語の一例であると考えられるのだ。Banti (2001: 17-18) も東クシ諸言語に見られる形容動詞活用が、所有格代名詞を起源とする形態素を用いているという分析をしている。古代エジプト語の基本的な動詞活用の起源は形容動詞の活用を本来の正しい解釈とは異なる解釈によって動詞の活用として誤用され続けた結果である可能性がある。また、副詞的および名詞的な動詞の用法が存在することも形容動詞からの品詞転換であると考えられる余地がある。それだけでなく、この古代エジプト語の動詞活用は一方では共時的に状況節の述語になりうるため副動詞との機能的類似があり、また他方では通時的には分詞が動詞語基であるという仮説が一世の間ずっと完全に否定されることなく残っている。今後のアッレ語研究では、私の研究の原点である古代エジプト語を振り返りつつ、他の語派の言語における様相との比較・対照も行っていくつもりだ。

おわりに

古代エジプトと現代エチオピアは数千年の時間と数千キロメートルの距離で隔たれているものの、歴史を振り返ればエチオピア正教は古代エジプト神話と融合したキリスト教コプト教会の流れを汲んでおり、文化的には強い繋がりが存在する。その繋がりが言語と直接的に関係しているとは考えられないが、研究対象が古代エジプトから現代エチオピアへと辿り着いたのが単なる偶然の連続ではなく、私の運命であったと考える方が好奇心とロマンを掻き立てられる。

参考文献

- Amborn, Hermann, Gunter Minker & Hans-Jürgen Sasse (1980) *Das Dullay: Materialien zu einer ostkuschitischen Sprachgruppe*. Berlin: Dietrich Reimer.
- Banti, Giorgio (2001) New perspectives on the Cushitic verbal system. *Proceedings of Berkeley Linguistics Society* 27S: 1-48.
- Tosco, Mauro (2006) The Ideophones in Gawwada. In: Siegbert Uhlig (ed.) *Proceedings of the XVth international conference of Ethiopian studies*, 885-892. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Tosco, Mauro (2007) Gawwada morphology. In: Alan S. Kaye (ed.) *Morphologies of Asia and Africa*, volume 1, 505-528. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.
- Tosco, Mauro (2008) Between coordination and subordination in Gawwada. In: Zygmunt Frajzyngier and Erin Shay (eds.) *Interaction of Morphology and Syntax: Case studies in Afroasiatic*, 207-226. Amsterdam: John Benjamins.
- Tosco, Mauro (2010a) Semelfactive verbs, plurative nouns: on number in Gawwada (Cushitic). In: Frederick Mario Fales and Giulia Francesca Grassi (eds.) *Proceedings of the 13th Italian Meeting of Afro-Asiatic Linguistics*, 385-399. Padova: S.A.R.G.O.N. Editrice e Libreria.
- Tosco, Mauro (2010b) Why contrast matters: information structure in Gawwada (East Cushitic). In: Ines Fiedler and Anne Schwarz (eds.) *The Expression of Information Structure*, 315-347. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Yoshino, Hiroshi (2013a) Preliminary survey on ‘Alle verbal system. *Studies in Ethiopian Languages* 2: 82-95. Yamaguchi: The Japan Association for Ethiopian Linguistics.
- Yoshino, Hiroshi (2013b) An observation on the connection of Alle verbal clauses. *Tsukuba Working Papers in Linguistics* 32: 69-79. Ibaraki: University of Tsukuba.
- Yoshino, Hiroshi (2014) Event integration patterns in ‘Alle. *Studies in Ethiopian Languages* 3: 96-121. Yamaguchi: Japan Association for Ethiopian Linguistics.
- Yoshino, Hiroshi (forthcoming) Event integration and the consecutive construction in ‘Ale. *Asian and African Languages and Linguistics* 10. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

(よしの・ひろし／筑波大学大学院人文社会科学研究科)

言語類型論の研究の魅力と英語教育における有用性 ～私の研究の経験から～

河内 一博

私の研究の中心は、類型的な観点からエチオピア中南部で話されているシダーマ (Sidaama) 語 (ハイランド・イースト・クシ語派) とウガンダ北部で話されているクプサビニィ (Kupsapiny) 語 (南ナイル語

派)の文法構造の記述をし、これらの言語のデータを使って理論的問題(特に、形態統語論と意味論・語用論の言語類型論的な問題)に取り組むことである。研究はより多くの研究者の目に留まるものであるべきだと思うので、発表には多くの場合英語を使っている。教育に関しては、本務校の防衛大学校で教えているのは主に英語と言語学・英語学の初歩だが、これまで非常勤で東京外国語大学と東京大学大学院で言語学(特に類型論)を教えている。防衛大のすべての授業と非常勤の一部の授業で、英語のみを使っている。以下では、初めにシダーマ語の例を挙げて言語類型論の魅力について紹介し(クプサビニ語については別の機会にしたい)、次いで言語類型論の研究が英語教育に有益であるということを論じ、最後にこれらの発見と考えに至った私のこれまでの研究の経緯、近年の研究、今後の展望について述べる。

言語類型論の研究の面白さとシダーマ語(と周辺言語)に関する発見

言語類型論は、言語は文法的な特徴によってどのようなタイプに分類できるか、どの言語にも見られる普遍的な特徴、あるいは多くの言語に見られる特徴は何か、違った文法的な特徴の間に関係はあるかといった問題を扱う。今までに記述されたすべての言語のデータをもとにしているので、既に文献にあるデータが前提となる。言語類型的な観点から研究が過去にあまりなされていない言語を調べていて面白いのは、今までに当然と考えられていた言語に関しての前提(例えば、以下で述べる「名詞句の主要部は名詞か限定詞である」という前提)を覆すような現象や、先行研究で提示されている仮説(例:例えば、以下で述べる「FEELを表す語彙は世界のどの言語にも存在する」という仮説)の反証になるような現象が見つかることがあるということである。例えば、シダーマ語(と周辺言語)に関して以下のような例がある。

- FEELを表す語彙は世界のどの言語にも存在するという仮説がある。これは、意味的最小単位である概念は語彙としてすべての言語に存在し、より複雑な概念はそれらの基本的な語彙の組み合わせによって説明できるという理論(Wierzbicka 1972, 1999, Goddard & Wierzbicka 2002 など)の基盤になっている。しかし、感情や感覚を表すのに状態変化動詞(英語の例:*sicken*)を使うシダーマ語にはFEELを表すどんな品詞の語彙も存在しない(Kawachi 2007)。
- アフリカの言語の類似性を地理的特徴によるものとみなし、ある数以上の文法的特徴と語彙的特徴の存在によってアフリカという言語地域を提案する仮説(Heine & Leyew 2008)がある。しかし、シダーマ語(およびいくつかのエチオピアの言語)にはその特徴の多くが欠如している(Kawachi 2011a)。
- 名詞句(英語の例:*the spicy food*)の主要部は名詞(*the spicy food*の場合、*food*)(Chomsky 1970)あるいは限定詞(*the spicy food*の場合、*the*)である(Hudson 1984)ということを前提にしている理論があるが、この問題は議論の対象になっている(例:Muysken 1982, Zwicky 1985, Hudson 1987)。名詞を使わずに名詞句を形成するのに使われるシダーマ語の接語(*clitic*)(音韻的には他の語に依存しているが、統語的には独立している形態素)の用法を見てみると、名詞句に主要部という概念は必要ではないという仮説(Dryer 2004)が最も良く支持できる(Kawachi 2011b)。
- 修飾というのは通常統語的な概念である(Stowell 1981, Rubin 1994)が、シダーマ語での名詞句における修飾という概念は、多くの場合、普通名詞に連体修飾句・節(形容詞句、数詞句、指示詞句、属格の名詞句、関係節)が伴うという統語的な概念だけでなく所有人称接尾辞が付くという形態的な概念も含まれる。普通名詞が統語的または形態的に修飾されているかどうかによって、格の接尾辞の異形態の違いなどの8つの文法的区別が成されている。(Kawachi & Tekleselassie 2012)
- シダーマ語には所有物の名詞句の外部で所有者が表される所有構文が二つあり、これらの構文の使用は、従来の研究(例:Chappell & McGregor 1996, Payne & Barshi 1999)でこのタイプの構文に関して言われているように所有物の譲渡不可能性(*inalienability*)というよりも、二つの名詞句の指示物の所有関係の

予測可能性によって決まってくる (Kawachi 2012)。

- ・所有物の名詞句の外部で所有者が与格で表される構文はヨーロッパの地域にしか存在せず、標準的ヨーロッパ諸語 (Standard Average European languages) の地域的特徴であると言われている (König & Haspelmath 1998, Haspelmath 1999)。しかし、その構文はシダーマ語にも存在する (Kawachi 2013)。
- ・より自然な移動のイベントは形態統語的によりタイトな結合を示す構文で表されるという仮説 (Croft et al. 2010) がある。しかし、シダーマ語の話者が様々なタイプの移動のビデオのシーンを描写したデータでは、走っているシーンやスキップしているシーンの方が歩いているシーンよりも、結合がよりタイトな構文が結合がよりルースな構文に比べて頻繁に使われた (Kawachi 2015)。
- ・シダーマ語を含む北東アフリカの多くの言語 (特に、東クシ、西オモ、東ナイル、南ナイル) は、地域的特徴として、目的語が無標で主語が形態的に有標である有標主格言語 (Dixon 1994, König 2006) であると記述されている (Tucker 1966, Hudson 1976)。しかし、シダーマ語には当てはまらない。この言語は対格型言語であり、超分節接辞 (最後の母音のセグメントに起こる高いピッチ・アクセント) により対格・斜格を標示しているため対格・斜格は有標だが、この点が見落とされて記述されている (Kawachi in press)。

このように、研究が進んでいない言語を調査していると今までに記述されている言語に基づいた理論や仮説の反証となるような現象が見つかることがある。他方で、系統的・地理的に遠い言語に類似した現象が見つかることがあるということも、研究があまりなされていない言語の言語類型論的研究の魅力である。シダーマ語を研究していて特に面白いと思ったのは、日本語といくつかのアジアの言語に特有と言われる現象のいくつかは、シダーマ語にも存在するという点である (他のエチオピアの言語にも見られる特徴であるかもしれない)。例えば、日本語には不明瞭な表現 (例:「卵を 10 個くらいください」)、省略表現 (例: 願望の意味で「彼女が来たら」)、スル型というよりもナル型表現 (例:「合計は 300 円 / ブルになります」) が特徴的に存在すると言われるが、シダーマ語にも存在する (河内 2012a, 2013a, b)。さらに、前半部はそれだけで完結した文として成立するような節なのだが、後半部は名詞と述部の標識から成っている人魚構文 (例:「... が ... する予定だ」) は、アジアの地域の言語だけに見られる特徴であると言われていた (角田 1996) のだが、明らかな例は二つのタイプだけとはいえ、この構文はシダーマ語にも存在する (河内 2012b, 2013c)。「... が ... する様子だ / ようだ」に相当する構文であり、名詞 *gara*「様子、方法」または接語 *=gede*「よう (に)」を使い、最後に述部の標識が来る。シダーマ語の人魚構文はアジアの地域の言語とは違った歴史的発展をしてきたようであるが、他の言語の人魚構文のように、人魚構文が表す意味は「証拠性 (evidentiality)」「話し手がどのように発話内容についての情報を得たか」に関するものであることが多いという点と、人魚構文の述部の名詞が文法的な標識に発展するという文法化の過程を示しているという点は、シダーマ語にも当てはまる。

日本では日英対照研究が盛んだが、日本語 (と東洋の言語) と英語 (と西洋の言語) を両極に置くことを前提に比較すると、どうしても言語学の理論や仮説の構築のもとになっている後者から前者を見てしまい、前者は普通ではないもの、あるいは不可解あるいは神秘的なものとしてとらえられがちである。他の地域の言語を考慮に入れることにより、もっと客観的言語を分析することができる。

言語類型論の研究の英語教育への貢献

大学レベルの英語教育においては様々な学問的背景の研究者が教職について効果を上げている。言語学、英語学、英語教育、英米文学だけでなく、英語に関わる地域の歴史学や社会学等の専門家がそれぞれの得

意な点を活かしながら、英語教育をより効果的なものに行っていると思う。現在のところ言語学の中でも言語類型論の研究者が英語教育に携わっていることは多くないのだが、この学問分野の観点を英語教育に導入することによって、これまではなかった効果が見られる可能性があるということを以下で指摘したい。

実際私も職場で言われるが、英語の教員が英語以外の言語の研究をしていると、他の専門分野の人や研究者ではない人に「英語の教員なのに何でそんな言語を研究しているの？」と言われるかもしれない。「…語学」をやっている、語法研究のために専らデータを収集していると誤解される場合もある。しかし、英語以外の言語に取り組んでいる言語類型論の研究者は、世界の言語の文法構造を比較し、どのような違ったパターンを示すか、共通点は何か、そしてその相違点と共通点をもたらす要因は何かを知りたいため、研究がなされていない言語のデータが必要なのである。当然英語も興味の関心であり、暗黙のうちに研究対象の一部になっている。そのような研究者は、英語の教員として少なくとも以下の点で英語教育に貢献でき、これらの長所を活かして効果的な英語教育を実践することができると思う。

第一に、言語の類型的比較対照は2つだけの言語を知っているのではできないのであり、より多くの言語の構造を知っていなければならない。日本人学習者が英語のある現象を難しいと感じるのは、英語が構造的に日本語と違うからというのが原因であることがあるかもしれないが、通言語的に見て普通でない現象であるというのが原因であることもある。これを見いだすのには類型的な視点が必要である。特に英語をもとにした言語理論は英語偏重になる恐れがあり、そのような理論に基づいた英語教育は危険である。例えば英語のWH疑問文の形成のし方は通言語的にまれであり、多くの言語で疑問詞は疑問の対象になっている構成素が平叙文において現れる位置に起こる (Van Valin 1998) のだから、英語をもとにして考え出したWHの移動の規則 (Chomsky 1977) は一般原則ではないし、これをもとにして英語のWH疑問文の統語構造を教えるべきではない。

第二に、言語の普遍性を前提にして英語と少数の言語を中心に構築された言語理論では抽象的な専門用語を使って研究が行われるのに対し、個別言語の特殊性を考慮に入れた言語類型論では伝統的な文法で使われるような用語を使って研究が行われるので、言語類型論の研究は英語教育における実用性がある。大学レベルでの英語教育には文法構造の説明が伴うが、日本語との対照、あるいは世界の言語との対照によって学習者の好奇心を引き出し、さらに帰納的、より客観的、かつ正確に英語の文法現象をとらえることができ、そのような分析に基づいて説明をすることができるのは、どの分野の専門家よりも言語類型論の専門家であると思う。

さらには、特に研究が進んでいない言語のデータを使った言語類型論の研究者は、研究に関するコミュニケーションに (論文発表、学会発表、専門分野の議論に、場合によってはフィールドでのデータ収集に、フィールドでの生活で生き残るため) 多くの場合英語を使っている。これは特に、言語類型論の成果を公表するにあたり聴衆・読者は、日本語の話者に限られることはなく、世界中の様々な言語背景を持ち英語に熟達している人々であるからである。このような状況は、現代における地球規模的な英語使用の典型例の一つであり、それを日常的に経験している英語の教員は、学習者に極めて重要な英語観を提供することができるし、特に英語のみを使った英語の授業が求められている今日の英語教育に大きな貢献をすることができる。

また、フィールドワークによる研究をしている言語類型論の研究者は、授業において、フィールドで自ら実際に経験したことに基づいて具体的な面白い話をするすることができる。自分の研究内容に関する言語間の比較等のみならず、社会文化的な話題まで、学生が興味を持つような広い範囲の話題をカバーできるので、専門課程においてだけでなく一般教養としての語学においても、研究内容およびフィールドでの経験を授業に直結させることができる。これは、専門課程で専門的な話題そのものを扱うのでない限り、背景

となる知識のない学生には高度過ぎて理解が難しい他の分野とは大きく異なる。

したがって、少なくともこれらの点において、言語類型論の研究者は、英語の教員として大いに実力を発揮できる。言語類型論はすべての言語が対象なので、対象の一つとして英語について知っているのは当然である。

私のこれまでの研究の経緯、近年の研究、今後の展望

慶應義塾高等学校を卒業後、慶應義塾大学の文学部に進みたかったが、祖父の代から商売を営んでいた父に反対され、商学部に進んだ。慶應義塾が最も重視する「実学」である商学部での学問の多くは、直感的で科学的でない分野に思えたため、関心を持つことができなかったが、高校と大学1, 2年で一生分遊んでしまったので、大学3年で英語の教諭になるために勉強することに決め、英語の教職課程に加わり、自由科目で取った文学部の英語関係の科目、特に言語学に夢中になった。3年時に商学部の履修科目の半分以上の成績が不合格であったため、4年時に時間割が全て埋まってしまう、バブルの時代に就職活動を行うことができなかった。何とか商学部を卒業し教職免許を取得することができたが、言語学をもっと深く勉強したいと思い、文学部に学士入学し、唐須教光先生から人類学的言語学の指導を受けた。

2つ目の学士を取得後、英語の教諭として慶應の附属高校の一つに就職した。5年半勤務した後、サバティカルをもらい1997年夏に妻とアメリカに渡り、ニューヨーク州立大学バッファロー校の言語学科に大学院生として入学した。この学校を選んだのは、反生成文法の問題と、研究が進んでいない言語のデータ重視の理論研究の伝統があるためである。特に、言語だけでなく言語と他の認知システムとの関係を解明しようとする Leonard Talmy 先生の様々な言語の文法構造のデータを基にした認知意味論と、語順を初めとしていくつもの言語現象に関して世界で最も多くの言語のデータを持っている Matthew Dryer 先生の定説を覆すような類型論に魅力を感じた。1年半くらいの計画で修士を取って帰国したいと思っていたが、それは不可能で、言語学に夢中になってしまっていた私は、理想的な職場での、職業としても申し分のない高校教諭の仕事を辞めてバッファローで研究を続けることにした。

バッファローの大学院では、修士論文、博士課程進学資格論文、博士論文は違った分野のトピックについて書かなければならず、さらには最初の2つはジャーナルに出版できる質のものでなければならなかった。何よりも、英語で言語学の論文を書く方法を身に付けるのに苦労した。起承転結のスタイルが身に付いていた私は、言語学は理論的でなければならず、論文において、まず結論を述べ、先行研究で話題になっている理論的問題を扱い、その問題に関して提示された仮説を、自分が持っているデータを示して検証し、その検証結果の説明をするというパターンを取らなければならないということを理解し、自ら実践できるようになるのに最も時間がかかった。初めのうちは、興味深い言語現象について指導教授に話をしに行っても、どのような方向で論文を書いて行けば良いかについて余り助言はもらえなかったが、ある程度理論的問題を自分で発見できるようになってから、学会のアブストラクトを書いたものを指導教授のところに持って行って、一緒に長時間座って議論の進め方について一字一句書き方を手取り足取り教えてもらった。これが一番勉強になったと思っている。

論文のトピックの選定には相当時間がかかってしまった。修士論文は、Robert Van Valin 先生の Role and Reference Grammar の研究グループにいたので、この理論的枠組みで日本語について書こうと思っていた。しかし、特定の理論的枠組みで論文を書くとその枠組みをテストして多少の修正をするというスタイルを取ることに陥り易く、これは避けたかった。そこで、迷った挙げ句、まったく別の分野である心理言語学を選び、練習の有無による日本語の言い間違いのパターンの違いについて Jeri Jaeger 先生に指導を受けて書いた。結局修士を終えるのに入学から4年かかった。博士課程への進学資格論文では、話者の文法性の

判断の違いが現れ易いと言われる韓国語の配置動詞の意味について、母語話者からデータを採って、書いた（これらの論文はそれぞれ後に、*Journal of Psycholinguistic Research* と *Lingua* に出版した）。

バッファローでは色々な言語の話者を見つけることができるので、博士論文では、Talmy 先生の指導のもと、できるだけ多くの言語の空間移動の経路の表し方の比較をすることを考えていた。実際、日本語、韓国語、アムハラ語、シダーマ語、フランス語、スペイン語、ルーマニア語、英語、ロシア語、ハンガリー語、シェルパ語、ティグリニア語のデータを母語話者から採った（最後の3言語は、フィールド・メソッドの授業を履修し、授業外にもデータを採った）。忙しい Talmy 先生から少しでも助言を受けるために、アシスタントをし、彼の自宅と大学の間の車で送り迎えもよくした（大雪が降っていても高速を運転しながらノートを取る技術が身に付いた）。しかし、一言語の文法構造を理解するのにすらかなりの時間を要し、思うようには進まなかった。正に泥沼にはまってしまっていた 2005 年 1 月 21 日に Talmy 先生から突然その学期末に定年退職することを告げられ、博士論文のトピックは大きく変更せざるを得なくなった。（結局 Talmy 先生は Co-advisor になってくれたが、）Matthew Dryer 先生の指導で、言語学科と同じ建物にいた教育学の大学院生だったシダーマ語の母語話者 Abebayehu Aemero Tekleselassie 氏（現在 George Washington University の associate professor）からそれまで 3 年余りの間（空間移動の経路の研究のためだけでなく、Ph.D. 取得後の研究のために）こつこつとためていたシダーマ語のデータをさらに集め、この言語の文法を書くことにした。バッファローでは他の多くのアメリカの言語学の大学院と同様、ほとんど 20 年生というような人もいたのだが、その頃突然制度が変わり、「大学院に在籍できるのは 7 年まで、それを越える場合は毎年嘆願書を書いて認められた場合のみ更新して最長でも 10 年」という規則ができてしまい、無我夢中で博士論文に取り組んだ。

結局 2007 年 6 月に Ph.D. を取って、妻とバッファローで生まれた二人の子供とともに 10 年ぶりに帰国した。ほぼ 30 歳代すべてをアメリカで過ごしたことになる。アメリカの Ph.D. があれば簡単に就職できると思っていたのだが、帰国後仕事があったくなく、アカデミアにいるのをあきらめかけて言語学への最後の投資のつもりで 2008 年 2 月にアメリカの学会に、3 月にエチオピアにフィールドワークに行った。しかし運良くその年 4 月に明治学院大学の非常勤講師、7 月に AA 研の非常勤研究員、10 月に防衛大学の教官の仕事を得た。

帰国後すぐは国内の言語学の研究者で余り知っている人がいなかったが、学会等を通して知り合いが増えた。2008 年から国内外の共同研究プロジェクトへの参加の誘いを受け、これまでに以下の方々のプロジェクトに関わっている：梶茂樹、角田太作、稗田乃、松本曜、渡辺己、Jürgen Bohnemeyer, Tom Güldemann, Prashant Pardeshi。2012 ～ 2014 年度には AA 研のプロジェクト「アフリカ諸語のイベントの統合のパターンに関する研究」の主査を務めた。このプロジェクトでは、アフリカのすべての大語族を網羅し、個々の言語が、空間移動、状態変化、アスペクト（相：言語で表される時間の内部構造）などのイベントにおいて、これらのイベントの要素を統合して形態統語的に表す方法を研究した。言語がより略図的なイベントの意味要素（例：空間移動の場合、経路）とそうでないイベントの意味要素（例：空間移動の場合、様態や原因）を統合して、どのように形態統語的に表すかに基づいた Talmy (1991, 2000) の類型論によると、最も略図的なイベントの要素を表すのが主動詞か動詞付随要素（接辞や不変化詞）かによって言語は大きく 2 つのタイプに分かれ、この違いは空間移動と他の 4 つの意味領域で見られるという。アフリカの多くの言語は主動詞で表すタイプに分けられると言われていたが、このプロジェクトを通して、全てのイベントの領域において一貫して同じパターンを示す言語は一つもなく、動詞の連続を使うが動詞付随要素で表す言語、分類が困難な言語、経路のタイプ等の要因により違った構文を使う言語があることがわかった。さらに、扱ったアフリカの言語はすべて、構文のタイプの違いはあるものの、イベントの概念要素を

起こった時間の順に並べる構文を、イベント要素に原因を含むイベントを基本的なものとして、様々な意味領域に適用しているということを発見した。これを根拠に、イベントの概念要素の統合をとらえるにあたり、ヨーロッパの言語のようにどのタイプの概念要素がどのような種類の文法範疇により表現されるかという次元に加えて、特定のタイプの概念要素がどのような順序で表現されるかという次元も考慮に入れる必要があるということをも主張した。このプロジェクトの成果は、2つの国際学会での共同発表（Kawachi et al. 2015a, 2015b）、別の国際学会（8th World Congress of African Linguistics）での7発表から成るワークショップ Event Integration Patterns in African Languages の企画、AA 研の『アジア・アフリカの言語と言語学』の特集号としての英語の論文集の出版（2016 年春に予定）という形で公開している。最近気がついたことだが、このプロジェクトは、当初 Talmy 先生のもとで博士論文としてやろうと思っていたトピックを空間移動以外の意味領域にも拡大して、アフリカの言語に焦点を当てたものであり、共同研究であるからこそできたことである。まだデータがある言語の数が少ないので、プロジェクトの期間は終わってしまったが、インパクトの度合いの大きいジャーナルに共同発表できるようにデータを提供できる人にさらに声をかけて、非公式に共同研究を続けている。

フィールドワークに関しては、2008 年 3 月の後は 2008 年度の AA 研の研究補助金によりエチオピアに行った。2009 年度以降は科研によってエチオピアとウガンダで毎年合計 3 ヶ月程度調査を行っている。2009～2013 年度のクプサビニ語の調査はナイロティックの研究を勧めてくださった稗田乃先生の科研によるもので、それ以外は自分の科研による。

シダーマ語のコンサルタントは、Abebayehu 氏の従兄に紹介してもらったシダーマ・ゾーン東部 Bansa の Gudura 家の兄弟（特に Legesse, Iyasu, Hailu）である。クプサビニ語に関しては、稗田先生に紹介していただいたマケレレ大学の Merit Ronald Kabugo 氏に前もって私が興味のあるいくつかのナイロティックの言語の一つのコンサルタントを探して欲しいと伝えたところ、私が初めてカンパラに着いた夜にたまたまカンパラに来ていたクプサビニ語の話者 Twoyem Kenneth 氏を連れて来てくれて、意気投合し、翌日クプサビニ語が話されているセベイに連れて行ってもらった。滞在中コンサルタントとして色々な人を紹介してもらったが、私が最も適任と判断した Chebet Francis 氏に、現在までメインのコンサルタントをしてもらっている。

私のコンサルタントたちは、長時間座って調査に協力ができるので、フィールドでは一日に 8～10 時間はデータを採る。研究以外にすることがないので、研究に専念できるのだが、とにかく時間がない。フィールドに行けなくなったらデータを使った研究が困難になるので、勤務先でフィールドに行く許可がもらえるように、そして科研等のグラントをもらい続けることができるよう、危機感を持って取り組んでいる。

これまで言語学の研究で一貫して心がけているのは、流行の理論や枠組みに流されることなく、時代を超えてより多くの研究者に参照してもらおうような研究をするということである。言語学者はもちろん個別言語の専門家として深い知識を持っている必要はあるとはいえ、言語学の研究は「... 語学」とは違う。言語学の論文執筆が一番難しいことであるが、扱うべき理論



写真 1 2009 年 3 月エチオピアのシダーマ・ゾーン東部のバンサにて：シダーマ語の民話のデータを提供した Bune と子供たちと

的問題と仮説は何なのかを明らかにして、体系的にデータを提示しないと、個別言語について書いたものを読んでもらえるということはあまりないと思う。研究に使う言語は主に英語ということになる。

最後になるが、私の調査に長時間付き合ってくれるコンサルタントたち、フィールドワークを可能にしてくれる科研等の研究補助金、そして私の研究に理解を示してくれている職場と家族には、感謝の気持ちを持っている。どんなに時間を使っても次から次へと挑むべき問題が生じてくる言語学という分野はやりがいがあると思う。今後も主にこれら2つの言語のデータを使って類型論的な言語学の研究に取り組んでいきたいと思う。



写真2 2011年8月ウガンダ東部のエルゴン山麓のカプチョーフにて：クプサビニ語の民話のデータを提供した Cheeliimo たちと

参考文献

- Chappell, Hilary, and William McGregor (eds.) (1996) *The Grammar of Inalienability*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam (1970) Remarks on nominalization. In Jacobs, Roderick A., and Peter S. Rosenbaum (eds.) *Reading in English Transformational Grammar*, 184-221. Waltham, MA: Ginn.
- Chomsky, Noam (1977) On wh-movement. In Culicover, Peter W., Thomas Wasow, and Adrian Akmajian (eds.) *Formal Syntax*, 71-132. New York: Academic Press.
- Croft, William, Jóhanna Barðdal, Willem B. Hollmann, Violeta Sotirova, and Chiaki Taoka (2010) Revising Talmy's typological classification of complex event constructions. In Boas, Hans C. (eds.) *Contrastive Studies in Construction Grammar*, 201-235. John Benjamins, Amsterdam.
- Dixon, Robert M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge University Press.
- Dryer, Matthew S. (2004) Noun phrases without nouns. *Functions of Language* 11: 43-76.
- Goddard, Cliff, and Anna Wierzbicka (2002) *Meaning and Universal Grammar (2 volumes)*. Amsterdam: John Benjamins.
- Haspelmath, Martin (1999) External possession in a European areal perspective. In Payne, Doris L., and Immanuel Barshi (eds.) *External Possession*, 109-135. Philadelphia: John Benjamins.
- Heine, Bernd and Zelealem Leyew (2008) Is Africa a linguistic area? In Heine, Bernd, and Derek Nurse. (eds.) *A Linguistic Geography of Africa*, 15-35. Cambridge University Press.
- Hudson, Grover (1976) Highland East Cushitic. In Bender, Lionel M. (ed.) *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*, 232-277. East Lansing, MI: African Studies Center, Michigan State University.
- Hudson, Richard (1984) *Word Grammar*. Oxford: Basil Blackwell.
- Hudson, Richard (1987) Zwicky on heads. *Journal of Linguistics* 23: 109-32.
- Kawachi, Kazuhiro (2007) Feelings in Sidaama. *LACUS Forum* 33 (2006), 307-316.
- Kawachi, Kazuhiro (2011a) Can Ethiopian languages be considered languages in the African linguistic area? The case of Highland East Cushitic, particularly Sidaama and Kambaata. In Hieda, Osamu, Christa König, and Hiroshi Nakagawa (eds.) *Geographical Typology and Linguistic Areas – with Special Reference to Africa*, 91-107. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Kawachi, Kazuhiro (2011b) Noun phrases without nouns in Sidaama (Sidamo). In Sutcliffe, Patricia (ed.) *LACUS Forum* 36 (2009), 25-35.

- Kawachi, Kazuhiro (2012) External possessor constructions in Sidaama. *Proceedings of the 45th Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society (2009[2006])*, Volume 1: The Main Session, 319-333.
- Kawachi, Kazuhiro (2013) Dative external possessor constructions in Sidaama. *Proceedings of the 33rd Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society (2007)*, General Session, 258-269.
- Kawachi, Kazuhiro (2015) Do speakers select constructions depending on the naturalness of described complex motion events? Presented at the 13th International Cognitive Linguistics Conference at Northumbria University, Newcastle, England, on July 24, 2015.
- Kawachi, Kazuhiro (in press) Is Sidaama (Sidamo) a marked-nominative language? *LACUS Forum* 37 (2010).
- 河内一博 (2012a) 「日本語と Sidaama 語 (エチオピア) の共通点 [1]: 不明瞭な表現」『TEACHING ENGLISH NOW, Vol. 23, Around the World』表紙裏. 三省堂. http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/pdf/ten023/TEN_vol23_00.pdf
- 河内一博 (2012b) 「日本語に特有と言われる現象はアフリカにもある: シダーマ語 (エチオピア) の場合」国立国語研究所 第5回 NINJAL フォーラム『日本語新発見 — 世界から見た日本語 —』於一橋記念講堂 (2012年3月24日) (講演の報告書 pp. 37-45. 国立国語研究所 2013年) <http://www.ninjal.ac.jp/publication/ninjal-f/pdf/ninjalF005.pdf>
- 河内一博 (2013a) 「日本語と Sidaama 語 (エチオピア) の共通点 [2]: 省略表現」『TEACHING ENGLISH NOW, Vol. 24, Around the World』表紙裏. 三省堂. http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/pdf/ten024/TEN_vol24_00.pdf
- 河内一博 (2013b) 「日本語と Sidaama 語 (エチオピア) の共通点 [3]: 「ナル型」言語の表現」『TEACHING ENGLISH NOW, Vol. 25, Around the World』表紙裏. 三省堂. http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/pdf/ten025/TEN_vol25_00.pdf
- 河内一博 (2013c) 「日本語と Sidaama 語 (エチオピア) の共通点 [4]: 人魚構文」『TEACHING ENGLISH NOW, Vol. 26, Around the World』表紙裏. 三省堂. http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/pdf/ten026/TEN_vol26_00.pdf
- Kawachi, Kazuhiro, Yuko Abe, Osamu Hieda, Kyoko Koga, Junko Komori, Nobuko Yoneda, and Hiroshi Yoshino (2015a) Motion expression patterns in African languages. *NINJAL International Symposium: Typology and Cognition in Motion Event Descriptions*. 於国立国語研究所 (2015年2月25日)
- Kawachi, Kazuhiro, Yuko Abe, Osamu Hieda, Kyoko Koga, Junko Komori, Nobuko Yoneda, and Hiroshi Yoshino (2015b) How African languages fit in Talmy's typology of event integration. *13th International Cognitive Linguistics Conference* at Northumbria University, Newcastle, England. (2015年7月24日)
- Kawachi, Kazuhiro, and Abebayehu Aemero Tekleselassie (2012) Modification within a noun phrase in Sidaama (Sidamo). *Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society (2008)*, General Session, 187-198.
- König, Christa (2006) Marked nominative in Africa. *Studies in Language* 30(4): 655-732.
- König, Ekkehard, and Martin Haspelmath (1998) Les constructions à possesseur externe dans les langues d'Europe. In Feuillet, Jack (ed.) *Actance et Valence dans les langues de l'Europe*, 525-606. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Muysken, Pieter (1982) Parametrizing the notion 'head'. *Journal of Linguistic Research* 2: 57-75.
- Payne, Doris L., and Immanuel Barshi (eds.) (1999) *External Possession*. Philadelphia: John Benjamins.
- Rubin, Edward J. (1994) Modification: a Syntactic Analysis and its Consequences. Ph.D. dissertation. Cornell University.
- Stowell, Timothy Angus (1981) Origins of Phrase Structure. Ph.D. dissertation. Massachusetts Institute of Technology.
- Talmy, Leonard (1991) Path to realization: a typology of event conflation. *Proceedings of the 17th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 480-519.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics, Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」 鈴木泰・角田太作 編『日本語文法の諸問題: 高橋太郎先生古稀記念論文集』pp. 139-161. ひつじ書房.
- Tucker, Archibald Norman (1966) The Cushitic languages. In Tucker, Archibald Norman and Margaret Arminel Bryan (eds.) *Linguistic Analysis: the Non-Bantu Languages of North-Eastern Africa*, 495-555. Oxford University Press.
- Van Valin Jr., Robert D. (1998) The acquisition of WH-questions and the mechanisms of language acquisition. In Tomasello, Michael (ed.) *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, 221-249. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Wierzbicka, Anna (1972) *Semantic Primitives*. Frankfurt: Athenäum.
- Wierzbicka, Anna (1999) *Emotions across Languages and Cultures: Diversity and Universals*. New York: Cambridge University Press.

Zwicky, Arnold M. (1985) Heads. *Journal of Linguistics*, 21: 1–29.

(かわち・かずひろ／防衛大学校)

北東アフリカで話されるナイル・サハラ言語ファイラムに 属する言語

稗田 乃

アフリカ大陸 4 言語ファイラムの 1 つ～系統研究の「ごみ箱」～

親縁関係をもつ（1 つの祖語から由来する）と考えられる諸言語が、ナイル川源流域から西アフリカにかけて話されている。この言語グループは、ナイル・サハラ言語ファイラムと呼ばれている。言語ファイラムという名称は、語族（たとえばインド・ヨーロッパ語族）より大きな集団で、しかも親縁関係が語族ほど明確に証明されない諸言語の集まりに用いられる。

ナイル・サハラ言語ファイラムは、アフリカ大陸で話される言語のうち、アフレイジアン言語ファイラム（アフレイジアン言語ファイラムの親縁関係は、近年、証明されつつあり、言語ファイラムから語族と呼んでもよい研究状況になっている）、ニジェール・コンゴ言語ファイラム、コイサン言語ファイラム（コイサン言語ファイラムは、最新の研究でその親縁関係が否定され、コイサン言語ファイラムの諸言語は、緊密な言語接触による共通性をもつ言語地域を形成していると考えられている）に所属する言語を差し引いた言語で構成されたという歴史をもっている。このことから分かるように、ナイル・サハラ言語ファイラムは、分類しがたい言語を集めた「ごみ箱」とも言え、その親縁関係の証明が困難な作業になるのは当然である。

ナイル・エチオピア学会の会員が関心のある北東アフリカ（暫定的にエジプト、旧スーダン、エチオピア、エリトリア、ソマリア、ジブチの地域とする）に、比較的多くのナイル・サハラ言語ファイラムの言語が話されている（ただし、ソマリアとジブチを除く）。ナイル・サハラ言語ファイラムの言語を現地調査し、研究した日本人は、おそらく筆者が最初であろう。ナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語の研究に携わっている他の日本人研究者は、この特集記事の書き手に加わっているのだから、日本におけるナイル・サハラ言語ファイラムの研究史は、この特集記事以前にさかのぼる必要はない。他の研究者がどのような研究をおこなっているかは、かれらの記事にまかせるとして、筆者は、自分の研究を紹介することにしよう。しかし、その前に与えられた宿題をすませておく。

故福井勝義教授によるメエン語（スルマ言語群）を話す人々の認知科学研究

与えられた宿題は、言語学からみた故福井勝義教授の業績を紹介することである。その業績には、色彩の認識人類学的研究に関する多くの論文があるが、1 冊にまとめたものが東京大学出版会から公刊された認知科学選書 21『認識と文化、色と模様の民族誌』である。これは、故福井教授によるエチオピア西南部に住むメエン語を話す人々（民族名はボディ）の民族誌である。故福井教授が同様のテーマで南スーダ

ンのナーリム語を話す人々の調査をしたときに、筆者がかたわらで調査のありさまを観察したことがある。そのような理由でこの宿題が与えられたのであろう。筆者の感想は、「幼い子供たちに数百の微妙に異なる色彩カードを見せて、その分類を試みさせるのは無謀なこと」であったが、その印象はあとで覆ることになる。

今度、上記の書籍を読み直して学んだことをいくつか書いておこう。人類学では *cognition* を「認識」と翻訳しているが、*cognition* は、この書籍が認知科学選書におさめられているように、「認知」と翻訳されるのが認知科学においては一般的である。言語学は、*cognitive linguistics* を「認知言語学」と翻訳しているので、言語学（認知言語学）は、認知科学のなかの 1 つの学問領域をなしていると考えられる。

1950 年代と 1960 年代にかけての人類学者による研究によって、色彩用語というものは言語によって大きな相違があることが分かった。これは、言語相対論的な見方を支持するものと考えられた。ブレント・バーリンとポール・ケイはこの相対主義の仮説にチャレンジする試みとして色彩のカテゴリー化は、焦点色が手掛かりとされていると主張した。焦点色は、異なる言語間でも高度の一致が見られることから、色彩のカテゴリー化は、言語の相違をこえた普遍的なものであると、かれらは結論づけた。福井教授によれば、ボディの焦点色は、いちがいには 1 つの焦点に収束するものではなく、複数の焦点に分散する。これは、「普遍性はいかならずしも相対性と対立するものではなく」と慎重に結論をさけているが、バーリンとケイの普遍論にたいする反例である。言葉をかえれば、ボディの焦点色が他の民族の場合とちがって、収束点をもたないのは、焦点色が教育（社会化）の産物であることを示しているのである。書籍の後半で記述されるボディの色彩にまつわる文化（たとえば、牛の毛色の分類と管理）は、焦点色が社会化の産物であることを雄弁に語ることになる。バーリンとケイによる普遍性を探求する試みそのものは正しかったけれども、焦点色を探求の手段として取り上げたのは必ずしも正しくなかったことを、データは示していると考えられる。最後になったけれど、メエン語とナーリム語は、ともにナイル・サハラ言語ファイラムのなかの下位言語群を構成しているスルマ言語群に所属する言語である。

スルマ言語群の言語特徴～死語の脅威にさらされている言語～

さて、北東アフリカ、エジプトにはヌビア語の方言以外はナイル・サハラ言語ファイラムの言語は話されていない。エリトリアで話されている言語でナイル・サハラ言語ファイラムに所属するのはクナマ語とナラ語だけである。したがって、北東アフリカでナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語が主に話されている地域は、エチオピアと旧スーダンである。

筆者がエチオピアで調査したナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語は、西南部で話されているコエグ語とオモ・ムルレ語である。これらの言語は、ナイル・サハラ言語ファイラムのなかの下位言語群であるスルマ言語群に所属している。コエグ語は、おおよそ 300 人の第 1 言語（人が最初に習得する言語を言う。普通、人の言語能力は、第 1 言語がいちばん高い。）話者をもつ。オモ・ムルレ語は、調査時、すでに「死語の脅威」にさらされており、8 人の話し手が存在すると言われたが、筆者は、そのうちの 3 人を確認した。話し手は、現在、さらに減少していると考えられる。コエグ語の話し手は、さとうきび農場の計画のため、筆者が調査した地域から立ち退きさせられた。政府の統計では民族としてのコエグは、移り住んだ地域で増加している。しかし、コエグ語を話すことのできる者が現在どれほど存在するかは明らかではない。コエグ語の将来は、けっして明るいとは言えない。

コエグ語は、他のスルマ言語群の言語とは構造がかなり異なっている。おそらく、近隣で話されている言語、ニャンガトム語（ナイル諸語）、ムルシ語（スルマ言語群）、カロ語（アフレイジアン言語ファイラム）との頻繁な言語接触により言語変化を起こしていると考えられる。しかも、複雑な民族間関係は、コ

エグ語の語彙体系を複雑なものにしている。たとえば、ある時期はカロ語を話す人々と同盟し、ある時期はカロ語を話す人々との同盟を解消しムルシ語を話す人々と、また別の時期はニャンガトム語を話す人々と同盟する。このような複雑な民族間関係から、コエグ語の語彙体系は、農業に関する多くの語彙が農業を主要な生業とするカロの人々が話すカロ語からの借用語で構成されており、牧畜に関する語彙が牧畜を生業の中心と考えるニャンガトムの人々の話すニャンガトム語からの借用語で構成されている。

高度に発達した多言語状況は、語彙体系の豊かさをもたらしたが、その一方で形態論に単純化をもたらした。たとえば、他のスルマ言語群の言語は、名詞の複数形をつくる様々な形式をもっているのにたいして、コエグ語は、名詞の複数形をつくるやり方は、わずかな不規則名詞を除いて、ただ1つの規則的なつくり方（現代英語の複数形 -s/ -es のような）に変えてしまった。ただし、形容詞や指示詞の複数形は、いまだに比較的豊かな形態論をしめしている。コエグ語は、指示詞や形容詞が名詞を修飾する場合（日常会話において名詞が単独で用いられる頻度は多くない。日常では、「この本は面白い」とか、「よい本を読みなさい」というように、名詞は、たいてい、指示詞「これ」とか形容詞「よい」などを伴うだろう。）、修飾語を含む名詞句のどこかに複数性を表示するだけでよい。普通、指示詞か形容詞を複数形にして、名詞そのものは単数形を用いる。だから、指示詞や形容詞が豊かな形態論を保持し、名詞の複数のつくり方は単純なものになったと考えてよい。残念ながら、コエグ語の統語論は、十分に調査されていない。簡単な文法記述があるだけである。現在、オックスフォード大学出版からエチオピアの言語を紹介する書籍（1976年にオックスフォード大学出版からベンダー、ボウエン、クーパー、ファーガソンによる編集の“Language in Ethiopia”が出版された。その改訂版にあたる）の編集が進められている。その中の1つの章がコエグ語の記述になる予定である。

オモ・ムルレ語については若干の語彙だけが知られている。それによると南スーダンで話されているムルレ語とよく似た言語であると考えられる。それ以外のことはこれからの調査をまたなければならない。ただ、オモ・ムルレ語に関しては興味あることが分かっている。オモ・ムルレ語の話し手が語るかれらの歴史から、かれらは、もともと南スーダンの現在ムルレ語が話されている地域に住んでいた。そこから移動を開始し、エチオピアとケニア国境近くでオモ川を渡って現在のエチオピア西南部に到った。南スーダに残ったムルレ語の話し手とのあいだで紛争が生じたために、オモ・ムルレ語の話し手は民族移動を行ったことが知られている。現在、オモ・ムルレ語の話し手は、ニャンガトム語を話す人々の中で1つのまとまった地域集団を形成している。オモ・ムルレ語の話し手のほとんどがニャンガトム語を第1言語として話す。それどころか、たいていの話し手は、オモ・ムルレ語を話す能力を失っている。死語になる日も遠くないと思われる。

コエグ語とオモ・ムルレ語のほかに、メエン語やマジジャン語など多くのスルマ言語群の言語がエチオピアで話されている。これらスルマ言語群の言語のほかに、エチオピアには、様々のナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語が話されている。南スーダンでも話されているヌエル語やアヌア語は、ナイル語西方言に所属する。ニャンガトム語は、おそらくこれとよく似た言語であるトゥルカナ語とともにナイル語東方言に所属する。また、グムズ語、ベルタ語、コモ語などが話されている。ウドゥク語も忘れてはならないだろう。

ナイル諸語の言語特徴～通言語的に興味ある言語現象～

ナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語が多く話されているのは、旧スーダンにおいてである。アチョリ語（筆者は、スーダンではなくウガンダで調査を行った）は、南スーダンにおいても話されるナイル語西方言に所属する言語である。アチョリ語を含む西ナイル方言のいくつかの言語は、ダブルダウンス

テップ声調と呼ぶ世界的に見ても珍しい声調をもっている。ダブルステップ声調は、実際の聞こえが低声調とおなじくらい、あるいは、それ以上に低く聞こえるのだけれど、構造的には高声調と同じ働きをする。ダブルステップ声調は、今はまだ世界の少数の言語にだけ見つかっているが、研究が進めば多くの言語でその存在が証明されるかもしれない。また、アチョリ語は、一見すると関係節の前後に関係詞をもつかと思える文をもっている。しかし、関係節の最後の位置にくる標識は、じつは指示詞「この」であり、関係節標識ではない。たとえば、日本語では「この昨日に買った本」とも、「昨日に買ったこの本」とも言えるように、指示詞が修飾する名詞のすぐそばの位置におかれることも、修飾する名詞から分離して関係節の先頭に置かれることも可能である。アチョリ語の場合は、指示詞を修飾する名詞のすぐそばの位置に置くことが許されない。つねに、関係節の最後の位置に置かれるのである。一方、関係節標識は、関係節の最初の位置に必ず置かれる。このために、関係節がその前と後の両方に標識によってはさまれるかのように見えるのである。

人が情報を他人に伝えるとき、その情報源が話し手自身か、あるいは、第3者かを表現する言語手段がどんな言語にも存在する。この言語手段をエヴィデンシャリティと呼んでいる。たとえば、日本語で、「昨日犬が吠えたのを聞いた」は、犬の吠えたのを聞いたのは話し手本人である。一方、「昨日犬が吠えた」と聞いた」は、犬が吠えたのを聞いたのは第3者であろう。話し手は、第3者から伝え聞いた事実を述べたのだらう。アチョリ語では、情報源が話し手本人であることを表現するには、補文標識（たとえば、英語の *I said that* における *that* に相当する）を用いない文を使用し、情報源が第3者であることを表現するには、補文標識を用いる文を使用する。「見る」という動詞は、話し手本人が知覚する以外はありえないので、補文標識を用いない文だけが許容される。「聞く」という動詞は、上記の日本語の例のように、話し手本人が知覚することも、第3者から「伝え聞く」こともありえるので、補文標識をもたない文と、補文標識をもつ文の両方が許容される。アチョリ語の「直接話法」は、補文標識をもたず、「間接話法」は補文標識をもつ。エヴィデンシャリティの区別による補文標識の有り無しから、「直接話法」と「間接話法」が生まれたのである。英語では、直接話法が補文標識のない文、たとえば、*I said, ...*、また、間接話法が補文標識のある文、たとえば、*I said that ...* という。英語の話法とアチョリ語の話法は、類似している。従来の研究では、アチョリ語を含むナイル語西方言に、「直接話法」と「間接話法」の区別がないとされてきたが、それはいままで補文標識の有り無しの区別を観察できなかったためと思われる。

また南スーダンには、アチョリ語のほか、ディンカ語、シルク語など多くのナイル語西方言に所属する言語が話されている。また、様々な方言からなるロトゥホ語とバリ語は、ナイル語東方言に所属する。また、ナーリム語のほかにもテネット語やスリ語など多くのスルマ言語群の言語が話されている。方言からなるヌビア語、ザガワ語などのサハラ言語群に所属する言語、モル語・マディ語が所属する中央スーダン言語群の言語、ダジュ言語群の言語、コマ言語群の言語、フル語、マバ言語群に所属する言語、ニマン語など多くのナイル・サハラ言語ファミラムに所属する言語が旧スーダンで話されている。もし、ナイル・サハラ言語ファミラムに所属する言語が親縁関係をもつ1つの言語群であるなら、その故地は、旧スーダンのどこかにもとめられるだろう。筆者に与えられた紙面はもうすでに尽きている。ナイル・サハラ言語ファミラムに所属する言語の日本における研究の歴史が浅いことは、残念なことである。将来の研究に期待したい。

(ひえだ・おさむ／東京外国語大学)

「民族」になった「難民」とアラビア語クレオールのかし方

仲尾 周一郎

2005 年の包括的和平合意から今年で 10 年が経ったが、この僅かな期間に独立、急激な人口移動、そして新たな内戦の開始を経験した、南スーダンの激動の時代は終わりを見せない。南スーダンに関わる研究者の間でも、紛争後社会に関する研究は頓挫し、先の内戦時代と同様に難民研究が再び主要な研究テーマとなりつつある。

筆者自身も、2009 年から 2013 年の間、南スーダンで話されるアラビア語クレオール、ジュバ・アラビア語の記述言語学的研究を行っていたが、現在は何らかの形で国外に移住した南スーダン人（ある種の難民を含む）を調査対象にしたり、歴史的研究に方向転換したりして対処を試みている。

そんな筆者のフィールドではあるが、ところで、難民は難民でも最初の南スーダン人難民は誰だったのか、ということはあまり話題にならない。スーダンでは約 60 年前の 1955 年に第一次南北内戦が生じたのでそれが最初かということ、そういうわけでもない。さらに 60 年以上前、19 世紀末の世界では、エジプトからタンザニアまで北東アフリカ各地に散っていった「スーダン難民」（当時実際こう表現された）とその処遇について議論が行われていた。

19 世紀の南スーダン難民

時は 1880 年代、南スーダンのナイル川流域をムハンマド・アリー朝エジプト最南端の州（エクアトリア州）として統治していたのは、ドイツ系のエミン・パシャ（総督）であった。「エジプト軍」（*jihādiyya*）として徴用されていた彼の部下の多くは、バリ、ディンカ、マディ、マカラカ等の南スーダンの諸民族出身であったが、彼らはイスラーム化し、自民族語に加えてスーダン訛りのブローケンなアラビア語エジプト方言を軍隊共通語として話していたようである。当時、スーダンにおけるエジプト支配に対して反乱を展開していたマフディー勢力は徐々にエクアトリア州へも拡大し、エミンとその部下らは 1885 年にウガンダ方面への避難を始めた。エミンはその後、H・M・スタンリーら「救出隊」によって「救出」されることになるが、彼の部下らは結果的にアルバート湖畔（ウガンダ・コンゴ国境地域）に取り残され、数年の知られざる難民生活をそこで過ごすこととなった。

その後のエミンの元部下らは、マフディー側勢力と交戦したり、避難先で奴隷狩りをしたりしていた



図1 難民化するエミンと部下たち
(The Graphic, 30 April 1890)

ようだが、1891年に一つの転機が訪れる。ウガンダの保護領化にあたってイギリス人軍政官F・ルガード卿が、火器の使用に習熟した傭兵として、彼ら「スーダン難民」を植民地軍（*Uganda Rifles*、後に *King's African Rifles* へと再編）へと編入することを決めたのであった。同時期に、エミンの元部下の一部はコンゴ自由国軍（*Force Publique*）やドイツ領東アフリカ植民地軍（*Schutztruppe*）にも起用されていたように、19世紀末の「スーダン難民」は傭兵として人気があった。

東アフリカの「ヌビ人」と「ヌビ語」の創出

イギリス領東アフリカ植民地軍への編入後、「スーダン難民」は「スーダン人兵士」と呼ばれるようになったが、非公式には「ヌビ人」とも綽名されていた（恐らく前近代までのスワヒリ語で「スーダン人」を指した *Mnubi* に由来）。1910年代頃までヌビ人は第一次世界大戦での兵役や植民地化にあたって牧畜民等の平定などを担当していたが、1920年代に入るとヌビ人第一世代は退役しはじめ、植民地軍のリクルート元もヌビ人以外の東アフリカ領の土着の諸民族へと切り替わっていった。時を同じくして1920年代後半には、植民地文書に「（ウガンダ）土着のコミュニティ」や植民地軍兵士の出身「部族」としての「ヌビ人」カテゴリーが現れはじめる（ただし、植民地行政官らはヌビ人が徐々に近隣の民族に同化することを期待していたので、暫定的なカテゴリーだったのだろう）。

ヌビ人という名称は百年以上経った現在でも使われている。ナイロビ郊外のキベラやカンパラの北の陸軍駐屯地ボンボを含むケニア・ウガンダの諸都市には、合計5万人以上のヌビ人が住むと言われる。残念ながら、ケニアでは土着の民族としては認められておらず、2009年のケニア国勢調査でも「その他のアフリカ人」と分類され、今なお国民IDの取得が困難な状況が続いている。なお、キベラはケニア独立以降急激な人口流入により世界最大規模のスラムと化しているが、かつてはヌビ人退役軍人と家族が住む閑静な「森」であったらしい（ヌビ語で *kibira* 「森」、元はニョロ語やガンダ語からの借用）。

世紀の変わり目に話を戻すと、当時のイギリス人軍人や医師らが残した言語記録などから、遅くとも1890年代後半には、「ヌビ人」らは単に「ブローケンなアラビア語」ではなく、確立した独自の言語体系を発展させていたことがわかる。言語学上の慣習として、こういった「不完全な片言の言語（ピジン）」から発展したような言語は「クレオール」と呼ばれるので、ヌビ語は「アラビア語クレオール」と呼ぶことができる。

ヌビ語は現在でもヌビ人らによって話されているが、近年、特にケニアでは20代以下のヌビ人はスワヒリ語を母語としつつある。消滅の危機に瀕した少数民族の言語に関する研究は昨今の言語学にとって重要なテーマだが、ヌビ人は少数民族であるだけでなく、元々が「クレオール」という奇妙な背景を持ち、ホームランドも持たない古くからの都市民であって、そういう彼らの「民族語」がスワヒリ語などの大言語に抗って生き残るのはさらに困難なことだろう。筆者はタンザニア・ダルエスサラームでもヌビ人家族に話を伺う機会があったが、70代の方でもヌビ語は話すことができず、スーダン料理の名前などがわずかに記憶されているのみであった。

ではヌビ語は言語死に瀕しているかというと、話はそう単純でもない。ヌビ語は一定数の非ヌビ人に



写真1 現存するキベラ最古の建物とヌビ人
(2014年8月)

よっても第二言語として話され、発展してきた歴史も持つのである。20 世紀初頭以降の東アフリカ内陸部（特に西ケニアや西ナイル／ウガンダ北西部）において、ヌビ人は、植民地軍内での接触や退役後の地域コミュニティでの社会的役割などを通じて、イスラームの伝道を行った主要なアクターであった。ヌビ人の語るところによると、米 44 代大統領バラック・オバマ氏の父方親族の一部をイスラームに入信させたのは彼らの祖先のヌビ人であり、「オバマ大統領のルオ人親族にヌビ語を話す人が何人も居る」というのが少々自慢らしい。

逆に黒歴史化しているのはウガンダ第 3 代大統領イディ・アミンの頃の記憶である。彼や、西ナイル地域出身の彼の側近らは、1970 年代の政治学者・人類学者らによる議論の中で「ヌビ人」と同一視されることが多かった。しかし、昨今のヌビ人論者は、「彼らはヌビ人の間で生活することでヌビ語を習得し、イスラームを受け入れたが、かの「スーダン難民」の子孫にあたるわけではない」ことを強調する節がある。現在も西ナイルのムスリム・コミュニティではヌビ語が共通語として機能しているようであるが、その実態は今後の調査が必要である。

南スーダンの「ジュバ・アラビア語」

最後に、先に触れた南スーダンで話されるジュバ・アラビア語に話を戻したい。ジュバ・アラビア語は、「南スーダンで非ムスリムによって広域共通語として話されるアラビア語ピジン／クレオール」という説明がなされることが多く、ムスリムにより狭い範囲で話されるヌビ語とは随分印象が異なる。第一、ジュバ・アラビア語は、都市部やディアスポラ・コミュニティ内でモノリンガルが継続的に増加傾向にあり、若者の間ではスラングやことば遊びが発達しているなど、ヌビ語とは活きが段違いである。

ところで、筆者は約 5 年に亘って調査する中で、ある程度ジュバ・アラビア語に習熟していたが、2014 年に初めて 3 週間ほどヌビ語を調査したのちラジオ・ウガンダのヌビ語番組に出演した際、視聴者から「ヌビ語のイントネーションが完璧で、日本人だとは信じ難い。一度顔を見せに来い！」という好評を得た。つまり、ヌビ語とジュバ・アラビア語はせいぜい短期間で矯正できる程度の違いしかないのである。これほど両言語が類似しているのは、もちろん歴史的背景による。

20 世紀初頭に話を戻すと、現在のジュバのすぐ北東の町、ゴンドコロにはヌビ人で構成されたウガンダ植民地軍最北端の駐屯地があった。1914 年のスーダン・ウガンダ国境線調整後も、退役後のヌビ人はスーダン領内にそのまま留まったが、1920 年代末に新州都としてジュバの建設が始まると彼らは労働力として雇用され、新都に定住することを公式に許可された。こうした元ヌビ人の末裔は、今もジュバなどの都市のマラキアと呼ばれる地区に住んでおり、ヌビ文化を継承している。

植民地期にはジュバへの人口流入は抑制されていたが、2 度のスーダン内戦期には避難民の流入とともにその人口は激増し、ジュバは小さいながら南スーダンが誇る国際都市へと変貌を遂げていった。現在、新来の都市民には、マラキアというと「自民族の言語も文化も失った根無し草の住処」くらいに見る人も少なからず居るが。しかし、ジュバの古地図を紐解くと、マラキアが下町の核となりそれを取り巻くように徐々に町が拡大したことが見て取れる。町の歴史的記憶は、今や忘却の危機にある。

筆者は、脱植民地化の過程でジュバなどの南スーダン都市において生じた人口移動の活発化（都市人口の増加と流動化）は、ジュバ・アラビア語が（ヌビ語と差別化される形で）「広域共通語」としての独自の性格を獲得するに至った言語史と深く関わったであろうと想像している。いつの日かジュバを再訪して、このような忘れ去られた都市史と言語史をリンクさせるようなフィールド調査をすることを夢見つつ、今暫くは周辺からこのトピックを掘り下げていきたい。

（なかお・しゅういちろう／日本学術振興会、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

衝撃的なフィールドワーカー ～中野暁雄先生の御研究と思い出～

若狭 基道

中野暁雄先生に初めてお会いしたのは、私が大学4年生の時であった。大学の先生とは思えない風貌の人が教室の中に悠然と入って来たのだから衝撃的であった。これは同意見多数なので決して私の偏見ではあるまい。

先生はアフロアジア諸語が一通りお出来になり、この点でも衝撃的であった。チャド諸語には疎いと謙遜されていたが、先生の勤務先であった東京外国語大学 AA 研でハウサ語の研修が行われた際には受講生として一夏参加されていたというのだから、その熱心さには頭が下がる。

先生は、私が所属していた大学では非常勤講師としてアフロアジア諸語の比較文法の授業を担当されたが、東京外国語大学では古代エジプト語、コプト語、アッカド語、アラビア語諸方言、等々、多くの言語の授業をなさっていたし、私も随分参加させて戴いた。御退職後は Brockelman や Bergsträsser の古典的名著を講読する私的な勉強会に参加させて戴いた。該博な知識と片時も煙草を手放さない授業（晩年は禁煙されていたが）は衝撃的であった。

こうして見ると、先生は古い言語、文献に書かれた言語に通じていらっしゃる印象を持たれるかも知れない。それも事実であるが、先生は研究者としては寧ろフィールドワーカーとして本領を発揮されていた。アフロアジア系の言語が話されている場所の彼方此方で現地調査をなさっており、全部列挙するとこれまた衝撃的なことになるのであるが、以下では本学会に関係がある地域のみに簡単に触れたい。

まず、比較的初期の御著作に 1976 年のソマリ語の語彙集、そして 1982 年のソマリ語の民話テキスト集がある。今や行くのが困難となってしまったソマリアで長期の調査をなされたのは羨ましい。尤も、エチオピアにもソマリ語話者は沢山いるのだから、彼等と接触しない私が怠慢なのだが。

同じく 1982 年にはティグレ語の語彙集を出版されているが、序文によると 1976 年から 1977 年にかけてのポートスーダンでの調査の成果である。

これまた同じ 1982 年には東京外国語大学 AA 研でアラビア語エジプト方言の言語研修を担当されているし、下エジプトの民話テキスト集を出版されているから、この前後の時期にはエジプトに集中されたのだと思われる。

筆者の手許に「アフロ・アジア語におけるオモ語（ゴファ語を中心に）」と題された手書きのハンドアウトがある。これは 1991 年に行われた研究会での先生の御発表に際してのものであるから、これ以前にエチオピアで現地調査をなさっていたことが分かるが、恐らく柘植洋一先生と一緒に行かれた時のものではないだろうか。この当時、私は未だ教養課程の学生だったので、このハンドアウトは後日私が同系統のウォライタ語の研究を始めた後に個人的に戴いたものである。先生の研究室は衝撃的な位に書籍が多く、御邪魔する度に本の雪崩を起こしては御迷惑をお掛けしていたが、先生御自身は何処に何があるかきちんと把握されていたに違いない、このハンドアウトを始め何時でも私の所望する文献や資料を即座に貸して下さった。

そして 1995 年には同じく AA 研でアムハラ語の研修を担当され、優れた教材を準備された。私が先生と

親しくさせて戴くようになったのはこの頃からである。既に自力でアムハラ語の勉強を進めていたこともあり、テキスト用に録音された音声資料とエチオピア文字による文字資料をパソコン上で合体させるようなアルバイトの仕事を下さった。これがどの様に活用されるのかは分からないままだったのだが、テキスト本文自体は非常に高度な内容であり、自分のアムハラ語能力の低さを反省すると同時に、AA 研の一室に籠っての作業であったため、何だか研究者になったかのような錯覚を覚えてもいた。時として飲みに関連して行って下さった事は言うまでもない。

その10年後位に先生は再びエチオピアで現地調査をされるようになる。私も参加させて戴いていた柘植洋一先生、乾秀行先生を中心とする科研の研究協力者としてであった。その成果として、2006年にはティグリニヤ語の対話テキスト資料を、2008年には中央クシ系のアウンギ語の対話テキスト資料を部分的に公刊された。

悲しいことだが、これが中野先生の最後のフィールドワークであった。2009年には上記アウンギ語対話テキスト資料の続篇が未完の遺作として公刊された。

私もこの時期、頻繁にエチオピアに行っていたが、エチオピアで先生にお会いしたことは実はない（噂は色々伝わって来たが）。私は現地調査の場では日本人と積極的には関わって来なかったのだが、斯学のフィールドワーカーの草分けでいらっしゃった先生がどんな調査をなさっていたのか、拝見させて戴けば良かったと思わないでもない。ともあれ、先生が最後に調査なさった言語はアウンギ語であり、挙ってエチオピアの南部を目指すこの潮流の中、敢えて北方エチオピアのクシ系言語の研究の重要性に注目された先生は流石であり、アフロアジア諸言語に通じればこその他の追従を許さない眼力なのであるう。

以上の他、ジブチ及びその周辺のアファル・サホ語、エチオピアのオロモ（ガッラ）語も三省堂の『言語学大辞典』に寄稿された項目の内容から判断して一次資料を持っていたと思われる。私が見落としているものも多いであろう。

そしてこれら北東部アフリカ以外にもイスラエル、モロッコ、マルタ、ザンジバル、ジンバブエ、アラビア半島諸国、等々、本当に彼方此方に行かれたのだから衝撃的であると言わざるを得ない。

私は中野先生には日本でしかお会いしていない。そして頻繁にお会いして、酒席に御一緒させて戴いた印象がある。だが実際には、先生は日本にいらっしゃらないこともしょっちゅうだった。先生は教育熱心で、授業も沢山なさっていたが、調査という理由で長期間休講することも珍しくはなかった。海外に行くから、なぞと云う「くだらない」理由では休講しない＝日本に引き籠っていて調査に行かない先生と、中野先生の様な先生との、どちらに教わるべきであろうか。私自身は中野先生に学べて倖せだったと断言出来る。これは私自身が研究者として成果を出せていないのとは全く別問題である。

だが、先生の様な研究者・教育者は、今後は現れないであろう。今の大学を取り巻く風潮が続く限り、先生の様な遣り方は許される筈もない。そう考えると何とも中野先生が羨ましい。

（わかさ・もとみち）

国際学会報告



第 19 回国際エチオピア学会学術大会報告

有井晴香

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

第 19 回国際エチオピア学会学術大会が、2015 年 8 月 24 日から 28 日にかけてポーランドの首都ワルシャワで開催された。第 16 回ノルウェー大会以来のヨーロッパでの開催となり、24 ヶ国から 300 人以上が参加した。個人発表をおこなった日本からの参加者は、石原美奈子（南山大学）、乾秀行（山口大学）、大場千景（大阪府立大学）、金子守恵（京都大学）、重田眞義（京都大学）、清水信宏（慶応義塾大学）、田川玄（広島市立大学）、Tadessa Daba（京都大学）、西崎伸子（福島大学）、藤本武（富山大学）、眞城百華（上智大学）、吉田早悠里（名古屋大学）、および筆者の計 13 名（五十音順・敬称略）であった。運営委員会の発表によると、日本人の参加者は、エチオピア（70 人）、ドイツ（54 人）、ポーランド（19 人）、アメリカ（14 人）、イギリス（13 人）に次ぐ人数であったという。

大会初日は 8 時 30 分からワルシャワ大学・旧図書館棟（Old Library Building）のメインホールで参加受付がおこなわれた。12 時からオープニングセッションが開かれ、13 時 30 分からはオープニングレクチャーとしてワルシャワ大学の Adam Lukaszewicz 氏がポーランドにおけるエチオピア研究の歴史について講演をおこなった。ポーランドにおいてエチオピア研究がはじまったのは 1950 年代のことであり、1968 年に学会の開催が予定されたものの、実現せず、今回の開催は長年の念願がかなったと語られた。

大会 2 日目から個人発表が始まり、9 時から 10 時 30 分、11 時から 12 時 30 分、13 時 30 分から 15 時、15 時 30 分から 17 時の間におこなわれた。各セッションの間には休憩と昼食の時間が十分にもうけられていた。個人発表は旧図書館棟（9 部屋）と隣接する東洋研究学部棟（3 部屋）に加え、ワルシャワ大学から徒歩 10 分ほどの距離にある国立博物館において 4 日間おこなわれた。国立博物館においては、大会 2 日目に *Beti and Amare* と *Crumbs* の 2 本のエチオピア映画が上映された。

大会 2 日目と 4 日目の 13 時 30 分から 15 時の間は、基調講演がおこなわれた。2 日目は、Baye Yimam 氏がエチオピアにおける言語分布と言語



写真 1 ワルシャワ大学正門

学における潮流について、4 日目は、Yaqob Arsano 氏がナイル川をめぐるエチオピア政府の外交政策について講演をおこなった。

本大会の全体テーマは、Diversity and Interconnections through Space and Time と題され、実に多様なテーマ・分野に関して研究発表がおこなわれた。考古学、文学、言語学、歴史、国際関係、法律・政治・社会、生態・環境、若者・開発、エチオピア研究史、音楽・映画の 10 分野から公募された合計 38 の特別パネルに加えて、個別の発表論文を分類した 18 の一般パネルが設けられた。1 人あたりの発表時間はパネルごとに異なり、筆者が参加したパネルでは発表 20 分、質疑応答 10 分の合計 30 分であった。やむを得ず大会会場まで来られなかった参加者は Skype を用いて発表をおこなっていた。発表会場によっては、遮光が不十分でスクリーンの画面が見えにくくなってしまっていたり、声が反響して聞き取りにくかったりすることがあった。筆者自身、発表会場に貼りだされたプログラムのなかに名前が記載されていないというアクシデントがあったが、運営委員会の方々の迅速な対応により、予定通り無事に発表をおこなうことができた。多少の問題はあったものの、特に深刻な事態には至らず、大会はほぼ予定通り滞りなく全日程を終えた。

教育に関するパネルは、筆者が参加発表した New Challenges Facing Educators and Education in Ethiopia を含め 2 つ組まれていた。開発目標をいかに達成するかという観点からの研究発表が大半を占めるなかで、開発に直接結びつかない歴史教育が軽視されている現状と多民族国家ゆえに共通の歴史認識を醸成することが困難であることをソマリ地域の事例から指摘したムハンマド・ジェマル氏による発表は示唆に富むものであった。

最も多くのパネル・発表が集まったのは政治・社会分野であり、8 つのパネルが組まれた。このうち、ひとつのパネルは発表者の不在により残念ながらキャンセルとなった。

辺境地域の土地問題について扱ったパネルでは、半数の発表者が西南部オモ川周辺地域における近年の国家主導の大規模開発と土地収奪の問題について批判的に取り上げていた。このテーマをとりあげた発表は政治・社会分野の他のパネルだけでなく、歴史学のパネルでもみられ、国内外の研究者から大きな関心を集めていることがうかがえた。

また、人類学に関するパネルは 3 つ組まれており、いずれも発表者の数が多く、まる一日をかけて組織されていた。ドイツの Ivo Strecker 氏がチェアを務めた文化とレトリックを扱ったパネルでは、日常的な会話や、交渉の場において駆使されるレトリックの解釈について多様な事例が提示されていた。



写真 2 国立博物館でおこなわれた懇親会

大会期間中は、1 日だけ強い風雨にみまわれたものの、概ね好天にめぐまれ、過ごしやすい気候であった。大会初日から最終日の翌日にかけて、連日エクスカッションが開かれた。延べ約 180 人がワルシャワ大のスタッフに引率され、第二次大戦後に再建され世界遺産にも登録されているワルシャワ旧市街などを訪れた。8 月 24 日は国立博物館において、特別展示の観覧も兼ねて夕食会が開かれた。また、懇親会が 2 回開催され、26 日はワルシャワ大学・歴史学部棟において、最終日の 28 日は民族学博物館においてエチオピア料理がふるまわれ、参加者

は親睦を深めていた。

筆者にとっては、国際学会にはじめて参加・発表する機会でもあり、期間中は大変な緊張と戸惑いの連続であったが、振り返ると、非常に有意義な時間を過ごすことができたと感じている。国際学会ならではの大会期間の長さも手伝って、多くの研究者と接して人脈を広げる機会を得ることができた。普段は接する機会が限られている日本国内の研究者とも、落ち着いた雰囲気の中で交流の場をもつことができ、新たな知見と更なる研究へのモチベーションを得ることができた。



写真3 閉会式

本大会は、久々のヨーロッパ開催ということで、アジス・アベバ大学からの参加希望者は非常に多かったようだが、経済的事情からか、ディレダワで開催された前回大会とくらべてエチオピアからの参加者総数は減少した。その一方で、エチオピアの地方大学からの研究者・学生の参加が目立ち、10以上の大学から参加者が集まった。エチオピア人の大会参加会費を無料とする配慮がなされた。また、アジス・アベバ大学に所属する研究者が12人、ワルシャワ大学から招聘された。その他の研究者は、地方大学の独自予算および、フランス、ドイツなどヨーロッパの大学からの直接参加であった。

なお、本大会全体のプロシーディングズ刊行は予定されておらず、それぞれのパネルオーガナイザーや参加者が発表成果を公刊することが運営委員会から推奨されている。

最後に、限られた時間と予算のなかで、今回の大会を滞りなく運営されたワルシャワ大学の方々をはじめ、大会の開催に尽力いただいた多くの方々に感謝の意を表したい。第20回の学術大会は3年後の2018年にエチオピア・メケレ大学で開催される予定である。

(筆者の本大会参加は、京都大学教育研究振興財団による国際研究集会発表助成・若手によって可能になった。記して感謝の意を表する。)

(ありい はるか)



グンダ・グンド修道院旧聖堂修復に向けた外構修復の報告と、 地域の伝統建築技術

清水 信宏、エフレム・テレレ、青島 啓太、三宅 理一

(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科、北海道大学大学院工学院、

芝浦工業大学工学部、藤女子大学人間生活学部)

背景

エチオピア・ティグライ州北東部に位置するグンダ・グンド修道院で現在、旧聖堂デブレ・ガルゼンの修復・保全を目指すプロジェクトが進行している。急峻な崖に取り囲まれた本修道院へは車で直接アクセスすることができず、エダガハムス近郊のゲブレ・タビアから約 1,400m の高低差のある約 16km の道のりを、約 6 時間かけて徒歩でアクセスしなければならない (図 1)。より詳しい立地に関しては青島 (2015) を参照されたい。

14 世紀創建のデブレ・ガルゼンは、15 世紀から 20 世紀中葉までの間に 3 つの段階を経てその建設がなされた。地元の石材を利用し、また在来の技術をよく踏襲した建築であるが、一方でティグライ地方の伝統的な構法とは異なるドーム構法も同時に利用するなど、対象地域の歴史的建造物として大きな意味・価値を持つものである (三宅, 2009)。しかしながら現在、1960 年代に起きた地震、墓の付置に伴う地面の掘削、老朽化を主たる原因として、壁面の崩落が懸念され、特にその西側壁面は深刻な状況にある (写真 1)。

これまで三宅理一を中心とする日本人チームは、現地諸機関¹と協力関係を築き、2003 年以来、調査・修復計画を行ってきた。

今回、2014 年 11 月から 2015 年 2 月にかけて、最終的な目標である旧聖堂の修復に先駆けて、準備段階として、旧聖堂を囲む外構壁面の積み直し作業 (以下、外構修復プロジェクト) が、実施された (実質 45 日

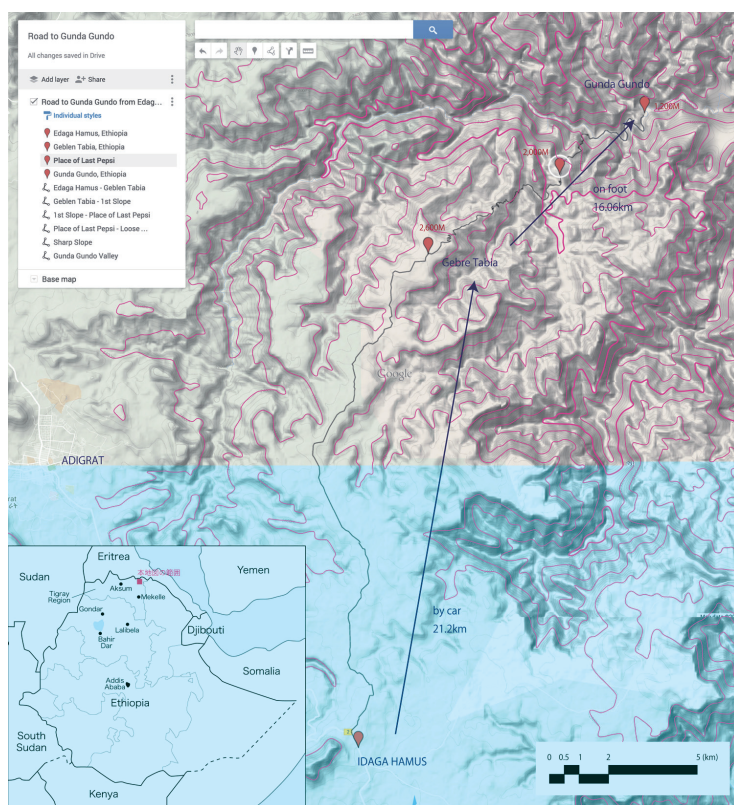


図 1 グンダ・グンド修道院の立地。google map をもとに作成。

¹ ティグライ文化協会・メケレ大学・ティグライ州文化観光局の三者が共同で本プロジェクトに取り組んでいる。

間)。実施期間にメケレ大学遺産保護学科に常勤講師として在籍していた発表者（清水、エフレム）は、本プロジェクトの現場監督に加わり、その過程で、対象地域の職人のもつ、建築および建設に関する技術の把握を試みた。対象敷地の立地特性上、敷地外部から運び込むことのできる資材や機材は限定されている。そのため、現地に存在する技術や資材を知ること、修復の戦略を考える上で重要な示唆を与える。



写真1 ゲンダ・グンド修道院旧聖堂、デブレ・ガルゼンの全景（西側壁面は右側）。手前は今回実施された外構壁面の修復の様子。筆者撮影。

本発表の主旨

本発表は、外構修復プロジェクトに際して映像で記録された「石材を切り出し、運び、成形し、積む」「現地に運び込まれた木材にほぞと穴を作り、開口部を作る」という一連のプロセスを示すことを第一義とした。その上で、現地での観察や職人へのインタビューを通じて得られた知見をもとに、石造壁面に関する技術や、利用される工具についての説明を加えた。本誌面では映像を示すことができないので、映像をキャプチャした画像をもとに説明を行っていく。

石造壁面および木材開口の建設プロセス

図2に示される画像をもとに、建設プロセスの一連の流れを、①石材の採掘と切断、②基礎の構築、③壁面の構築、④木材の加工と開口部の制作、に分けて、以下に説明を加えていく。

①石材の掘削と切断

壁面の建設に利用される石材には、修道院周りの崖から比較的容易に採掘される粘板岩が利用され、そのごく薄い材が積層して築かれる建築は、地域の景観を特徴付ける。石材の切り出しにはマラキーノ（棒状の鉄器）が用いられる（図2：①左、中央）。それをマルテッロ（金槌。メドーシャとも呼ばれる）を用いて持ち運び可能な大きさに切断し（図2：①右）、現場へ運んでいく。なお、基礎部分の石材にはより大きな石材が利用されるが、これは修道院前面を流れる川などから採取される。

②③基礎と壁面の構築

現場へ運ばれた石材は、マルテッロで適切な大きさに加工され、所定の位置に置かれる（図2：②③左、中央）。基礎部分には大きな石を用いることで構造を安定させ（図2：②）、壁面部分には薄い粘板岩を利用する（図2：③）。一度石材を設置しうまく納まらない場合には、石材の細部を再度削り直すというように、調整作業が繰り返された。目地材には、周辺から取れる土に水を混ぜたものが利用される（図2：②右）。

壁面の構築に際しては、両側面の石材を相互に噛み合うように並べることによって、十分な壁面の強度を出すことを意図して配置される（図2：③右、図3：左）。こうした石材の配置が各層に適用されるのが

①石材の掘削と切断（左、中央：石材の掘削、右：石材を持ち運べる大きさに切断）



②基礎の構築（左：石材を適合するサイズに削る、中央：石材を所定の位置にはめる、左：目地は土と水から作られる）



③壁面の構築：（左、中央：基礎には大きな石材が使われるのに対し（②）、壁面には小さな石材が使われる、右：両側面の石材が噛み合うように並べられる）



④木材の加工と開口部の制作（左：木材にほぞを作る、中央：ほぞに合う穴を開ける、右：ほぞと穴を併せて開口部を作る）



図2 外構修復プロジェクトの記録映像のキャプチャ。筆者撮影。

強度的には望ましいが、時間と材料の制約も存在するため、壁面の両側面沿いに石材を並べその間を小石や土で充填する層も少なからず存在する（図3：右）。また強度のある壁面をなすためには、石材を水平に積んでいくことが要求されるが、これに道具を用いる習慣は持ち合わせておらず、職人たちは目測で水平を測って壁面を構築していた。このため、水平が徐々にずれていく傾向が見受けられた。修復作業に際しては水系や水平器を利用するよう指導していく必要があると考えられる。

両側面の石材が比較的良好に噛み合っている例



両側面の石材の間が小石と土で充填された例



図3 石材の並べ方の例。筆者作成。

④木材の加工と開口部の制作

木材は往復で約5日をかけて周辺から運ばれてくる硬い材料が利用される。開口の木材を組み合わせるために、片方の木材にはムサル（斧）を利用してほぞを作り（図2：④左）、また、もう片方の木材にはエスカルベロ（鑿）を利用して穴が開けられる（図2：④中央）。このほぞと穴を1対1に対応させる形で調整をし、所定の位置に仮設置し、周りを石材で囲みながら積み上げることで固定される（図2：④右）。

工具について

発表者はこれまでに、グンダ・グンドおよびティグライ州都メケレにおいて、伝統建築の職人へのインタビューを含む、伝統建築技術に関する調査を行ってきた。これらの職人はもともと伝統的な石造建築の建設に携わる石工であったが、現在では鉄筋コンクリート造などの近代建築の建設にも携わっている。彼らによれば、新しい工具の利用に関してイタリアの影響は無視できないもので、事実、マルテッロやエスカルベロという言葉には、イタリア語の影響を認めることができる。上述の4つの工具のうち、外来の影響の入る以前から利用されていたのは、ムサルだけであったと伝え聞いている職人もいる。イタリア式の工具が使われ始めるまで、石材・木材の切り出し・加工には、メンダルと呼ばれる他の工具が利用されていたようであるが、現在は利用されていない。また石材の加工にはかつて、より硬い石材が利用されていたと複数の職人は証言している。

結論・今後の展開

対象地域において、グンダ・グンド修道院旧聖堂修復に必要な伝統建築材料は、時代による変化を伴いながら現在にも伝わっていることが確認された。現地の職人と連携しながら、これらの伝統技術を積極的に活用し、プロジェクトを実施することが望まれる。また今回の外構修復プロジェクトを通じ、現地の現場管理能力が修復活動において不十分であることが露呈した。今後、適切な設計監理が行われる必要があると言える。特に注意を払う必要があるのは、①壁面の目地²が垂直に連続することにより、壁面が脆弱になるのを防ぐ、②一列毎に水平性を保って正確に石材を積んでいく、③完成後は外から見えなくなる壁面内部についても、石材が相互に噛み合うように積む（図3左）、という点である。

本プロジェクトには、メケレ大学に遺産保護学科が2007年に設立されて以来、エチオピアにおける建築修復のノウハウ蓄積を行っていくパイロットプロジェクトとしての役割も付与されている。今後、現地の立地特性や気候を見極め、具体的な修復計画を立て、物理的な建築修復の完遂のみならず、伝統技術と修復技術の模索を行っていくことが必要である。また、未だ研究蓄積の不足している伝統建築技術そのものに関する学術的知見を増やし、今後の地域の文化遺産保護の一助となすことも期待される。

参考文献

青島啓太「グンダグンドーエチオピア・ティグライ州秘境の修道院」JANES ニュースレター No. 22、2015

三宅理一「ティグレイ州グンダ・グンド修道院の成立事情と建築的特質」第16回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会、2009

Shitara, Tomohiro “Restoration Project of Gunda Gundo Monastery”, International Conference on Science, Cultural Heritage, Natural Heritage and Eco-Tourism, 2005

（しみず のぶひろ、えふれむ・てれれ、あおしま けいた、みやけ りいち）

² 石材と石材の継ぎ目部分。



ウガンダ都市部における燃料ブリケットの生産と 人びとの食事および調理方法への適応性

浅田 静香

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

はじめに

熱帯地域における森林保全は国際的な重要課題のひとつであり、国際機関や NGO などが過去 30 年以上にわたって解決に向けてさまざまなアプローチを採用してきた。その取り組みのひとつとして、アフリカをはじめとする発展途上国では、調理用燃料としての森林資源の消費を抑えるため、植物残渣などの有機ごみから作られた固形燃料材であるバイオマス・ブリケットを、薪や木炭の代替物として導入する動きがある。ブリケットは 1980 年代から導入が試みられてきたが、アフリカではその多くが定着しなかったことが指摘されている [Eriksson and Prior 1990]。

しかし 2000 年以降、人口過密が進むウガンダの首都カンパラでは (図 1)、家庭などの調理場から排出された有機ごみからブリケットが生産されるようになった

[Ferguson 2012]。1980 年代に定着しなかったブリケットが、なぜカンパラで 2000 年以降、生産されるようになったのだろうか。この問いに答えるためには、ウガンダ国内における森林資源の枯渇だけにとどまらず、地域独自の社会的背景や文化的価値観もふくめて、この地域を理解する必要があると考えられる。本発表は、ウガンダ都市部で生産されるブリケットの特性について、廃棄物処理などの社会的背景や木材燃料との代替性、現地における独特な調理方法との適合性の観点から議論することを目的とする。



図 1 調査地の地図

ブリケットを作る人びと

ウガンダにおけるブリケットのおもな材料は、調理場から排出される植物残渣や木炭くずである。これらに加えて、キャッサバの粉やシロアリ塚の土、粘土をつなぎとして使用する。作り方のおおまかな流れは、①植物残渣の乾燥、②植物残渣の炭化、③つなぎの作成、④炭化した植物残渣、つなぎ、木炭くずの調合、⑤成型、⑥乾燥である (図 2)。ブリケットの価格は、kg あたり 500 ～ 1,000 ウガンダ・シリング



図2 ブリケットの作成手順（Dさんの例）

（約 20 ～ 40 円）となっている。これはカンパラで流通している木炭とほぼ同等の価格である¹。

本報告では、ブリケットの生産について2つの事例を具体的に紹介する。

大規模にブリケットを作る企業の例：NBMT（Nakulabye Briquettes Making Technology）²

NBMT では、2010 年にブリケットの生産を開始した。その主目的は、自分たちが居住するコミュニティの衛生向上であった。有機ごみから燃料を作るという発想は、乾燥させたバナナの皮から作られる燃料からきている。この燃料は、ガンダ語でオブワンダ（*obwanda*）と呼ばれる。65 歳になる社長は、幼少期に祖父母がオブワンダを作っていたと記憶している。オブワンダに改良を重ねて現在のブリケットの形が整った。その背後には、炭化用のドラム缶やつなぎを用いるといった、国際環境保護 NGO からの助言や機材の提供があった。NBMT では、小ぶりの球形ブリケットを 1 日 1,500 個生産するのに加えて、専用の改良かまどとセットで使用される蜂の巣形ブリケットを 1 日 20 ～ 30 個ほど生産している。これらの材料は、近隣の世帯や商業施設で排出された台所ごみであり、近隣住民が NBMT へ処理費用を払って回収してもらっているものである³。NBMT ではブリケットの作り方講習会を積極的に開催し、ブリケット作りに興味のある人びとに作り方を伝授している。

家庭で作るブリケットの例：D さん

D さん（既婚女性、40 代）は 2007 年ごろより家庭でブリケットを生産している。D さんは転職を機に、空き時間を有効活用し、現金収入を得るためにブリケットの生産に着手した。1 日に 25 ～ 50 個のブリケットを生産し、居住地区内の露店などに販売している。D さんは残渣の炭化のときも棒でかき混ぜながら火

1 実際には、木炭やブリケットは、買い手が持ち込んだ取っ手つきのポリ袋単位で売られていることが大半である。1 袋に入るだけの木炭やブリケットは 1,000 シリング（約 40 円）前後で売られていることが多い。

2 調査対象者本人の希望にそって実名を使用する。

3 カンパラにおいて「公式に」ごみを処理するには、カンパラ市か、私企業に処理費を払って回収してもらう必要がある。比較的安価に回収してくれるカンパラ市が回収に来る場所は依然として一部の地域に限られており、現状では多くの人が処理費を払える経済力がなく、不法投棄や低温焼却をしている。このような地域に住む人びとにとって、D さんや NBMT のように無料もしくは安価にごみを回収してくれるような人びとは頼もしい存在となっている。

を入れ、成型もすべて手でおこなっている。ブリケットを作るための特別な機材は使用せず、材料となる台所ごみも近隣世帯から無料で回収しているため、生産コストはほとんどかからない。2013年6月の計7日間にわたって、Dさんの近隣世帯の台所ごみの提供頻度と量を記録したところ、16世帯より、計204kgの植物残渣が提供されていた。ブリケットの開発や改良には、カンパラ市や国際NGOの支援を受けた。Dさんも近所の人へブリケットの作り方を教えることもある。

カンパラにおけるブリケットの適応性—廃棄物処理、食文化と調理方法から

ブリケットの材料となる植物残渣

カンパラの人びとのひとり1日あたりごみ排出量は0.5～1.2kgと言われている。これは他の発展途上国の都市と比較しても多い[Ekere 2009]。Nabembezi [2011]の報告によると、カンパラ市のある居住地区で回収されたごみの76%が有機ごみである（重量ベース）。カンパラでは主食用バナナやキャッサバなどのイモ類の消費が多く、これらは厚く皮がむかれる。とくに文化的価値の高い「マトケ（amatooke）」と呼ばれる主食用バナナは、可食部が5割しかない[佐藤 2011]。人口の過密化が進むカンパラでは、市や私企業による回収のほか、畑への堆肥利用、家畜飼料として処理できる量よりも多い有機ごみが排出されている。ブリケットの材料となる植物残渣は、ありあまるほど存在している。

食文化と調理方法

カンパラでは8割の世帯が、木炭を主要な調理用燃料として使用している[UBOS 2014]。その理由として、居住スペースが限られており、薪で調理できないこと、薪を採集できる森林が近くにないこと、ガスや電気は高価であることが聞き取り調査で得られた。さらに、経済的に余裕があり、家庭内に複数の調理用エネルギー源をもつ世帯でも、食事の調理には木炭を積極的に使用している。ある高所得世帯に勤務するメイドに依頼し、10日分の調理内容と調理用燃料を記録する調査を実施した。その結果、軽食の調理や湯沸しにはガスや電気を使用し、食事の調理には木炭を使用するといったように、明確に調理用燃料を使い分けていることが明らかになった。このように需要の高い木炭だが、その価格は2011年を境に高騰し、カンパラ市民の家計を圧迫している。ではなぜ、カンパラでは調理用燃料が木炭からガスや電気置きかわることなく、食事の調理には現在も木炭が使い続けられているのだろうか。

木炭を用いて、カンパラの一般家庭で何を調理しているのか見るため、主婦SNさんの16日分の調理品

目と加熱調理にかけた時間を記録した。主食はマトケ（プランテンバナナ）やトウモロコシ粉、コメなど、副食はインゲンマメ、ラッカセイ、肉、魚、葉物野菜などと、バリエーションが豊かであった。調理には、一度の調理につき平均で2時間58分間の長時間にわたって加熱し、平均1.2kgの木炭を消費していた。

カンパラを含めたウガンダ中部地方では、マトケが多く消費されるだけでなく、文化的価値の高い主食となっている[佐藤 2011]。マトケの調理方法もまた、この地域に独特である。その調理手順は以下のとおりである。①皮をむいたバナナをバナナの葉で包み、中火から強火で蒸す。②鍋からバナナの包みを取り出してつぶす。③再度鍋に



写真1 木炭で調理されたマトケ

戻し、ごく弱火で長時間にわたってじっくり蒸す。バナナを包んだ葉の色が緑から茶色に変わったら完成である。③の手順はガンダ語でオクボーベザ (*oku-boobeza*) と呼ばれ、この時の火のコントロールが、マトケのおいしさの決め手となる。木炭でマトケを調理した時は、きれいな黄色で、バナナの葉の香りがする、なめらかな食感のほくほくとしたおいしいマトケが調理できた。

同様の①～③の手順でガスを用いて調理したところ、くすんだ黄色の堅いマトケができた。バナナの葉の香りが食材に移らず、蒸しあがりの目安となるバナナの葉の色の変化も見られなかった。調理者 SN さんを含め、現地の人に試食してもらったところ、食感が悪く、硬くてまずいという感想が得られた。

木炭、ブリケット、ガスについて、現地で一般的に使用されるかまどやコンロを用いて燃焼実験をしたところ、ブリケットは木炭よりも着火に時間がかかるが、木炭と同様、あるいは形状によってはそれ以上の 2～5 時間にわたって燃えつづけ、熱量もほぼ同等であった。しかし、ガスは弱火でも熱量が木炭やブリケットの 2 倍以上もあり、人びとが調理に必要とする弱火へのコントロールがガスではできなかった。つまり、この地域で文化的価値の高いマトケを蒸して調理する際には、火力のコントロールの点でガスは木炭やブリケットに劣るため、完全に置き換わることはできないと考えられる。

まとめ

ブリケットに関する先行研究では、ブリケットが木材燃料の完全な代替となり、森林を保全するには、ブリケットの大量生産が必要だと主張されてきた [Ferguson 2012 など]。しかし、1980 年代にアフリカへ導入されたブリケットは、技術的に大量生産が困難であり、かつ安価な木炭との価格競争に勝てなかったため、定着しなかったと考えられている [Eriksson and Prior 1990]。

カンパラにおけるブリケット生産の場合、材料である植物残渣の調達に苦労せず、行政や国際 NGO による技術面、資金面の援助が得られるため、ブリケットの生産を支える社会的条件が整っている。また、それぞれのブリケット生産者は、家庭で個人的に生産したり、企業で大規模に生産したりと、各自のペースで生産している。その背景には、この地域で少なくとも 50 年以上前から作られていた固形燃料オブワンダの存在がある。さらに、ブリケットはカンパラに独自の食生活や調理法にうまく適合していると考えられる。

カンパラにおけるブリケットは、材料や生産ペースなど、住民の生活スタイルに合うかたちで生産、開発されている。大量生産されない限り、森林保全や公衆衛生の改善に大きな影響を与えないとされ、社会的価値が認められてこなかったブリケット生産だが、カンパラの食文化や調理方法に合っており、今後さらに普及していく可能性を秘めている。

参考文献

- Ekere, W. (2009), *Economic of Waste Utilization in the Urban and Peri-Urban Zones of Lake Victoria Crescent Region, Uganda*. Kampala: Ph.D. Thesis, Faculty of Agriculture, Makerere University, Uganda.
- Eriksson, S. and M. Prior. (1990), *The Briquetting of Agricultural Wastes for Fuel*. Rome: Food and Agriculture Organization of the United Nations.
- Ferguson, H. (2012), *Briquette Business in Uganda: The Potential for Briquette Enterprises to Address the Sustainability of the Ugandan Biomass Fuel Market*. London: GVEP International.
- Nabembezi, D. (2011), *Solid Waste Management: Study in Bwaise II Parish, Kawempe Division*. Kampala: WarterAid.
- 佐藤靖明. (2011), 『ウガンダ・バナナの民の民族誌——エスノサイエンスの視座から』松香堂.
- UBOS (Uganda Bureau of Statistics). (2014), *Uganda National Household Survey 2012/2013: Report on the Socio-Economic Survey*. Kampala: UBOS.

(あさだ しずか)

フィールド通信

ウガンダの HIV/AIDS 対策と性をめぐる 「公序良俗」のゆくえ

中澤 芽衣

幹線道路で目にする看板

2013 年 9 月、私は長距離バスに乗って旅をしていた。このときが初めてのフィールドワークであり、2 ヶ月間の滞在期間で今後の調査地を探ることが主な目的であった。ウガンダに渡航して約 1 ヶ月が経過し、ウガンダの北部や東部、南部を訪問した私は、各地の町の雰囲気や人びとの様子、気候の変化について、少しずつ自分の肌で感じることができるようになった。

乗り合いバスや長距離バスに乗車していると



写真 1 幹線道路沿いでよく目にする家族計画に関する看板

き、私は気になっていたものがある。それは幹線道路沿いでよく目にする「避妊用具（主に男性用コンドーム）の使用や家族計画を啓発する看板」であった（写真 1）。この看板は避妊用具の販売促進のために作成されたものではなく、米国国際開発庁（USAID）やアメリカ疾病予防管理センター（CDC）、国際 NGO の支援をうけて作成されていた。

日本では高速道路や幹線道路沿いに企業の広告や商品の宣伝を目的とした看板を目にすることはあったが、避妊用具や家族計画といった性に関する看板を目にすることは一度もなかったため、私はとまどいを隠せなかった。その後も、ウガンダの地方都市や首都カンパラで、避妊用具の使用や家族計画を啓発するための看板やポスターがバーのトイレや大学の構内、ショッピングモールなどあらゆる場所に貼られているのを目にした（写真 2）。

ウガンダにはびこる HIV 感染と国家の動向

ウガンダでこのように避妊用具の使用や家族計画を啓発することがさかんな理由のひとつに、HIV/AIDS の問題が存在する。現在、HIV 感染は世界的に問題視され、国連合同エイズ計画（UNAIDS）や世界保健機関（WHO）を筆頭に、国際機関や国際 NGO が問題解決に向けて、次々と政策を打ち立てている。2013 年時点では、世界における HIV 陽性者は約 3500 万人と報告され、そのうちの約 70%を占めるおよそ 2500 万人がサハラ以南アフリカに居住している（WHO 2013）。HIV/AIDS はサハラ以南アフリカにおいて未だに根強



写真2 バーでみられたコンドームの使用を促すポスター

い問題である。

ウガンダにおける HIV 感染率¹は、2014 年時点では 7.3% を示し、世界平均の 0.8% と比べると、ウガンダはいまだに高い感染率を示している。それでも、1992 年におけるウガンダ国内の HIV 感染率は 18.5% と非常に高く、その当時に比べれば、感染率は半分以上に低下している。

ウガンダでは、1970 年代から 1980 年代前半にかけて体がだんだんやせ細っていき、最後は死に至る「スリム病 (slim disease)」が猛威をふるっていた。1982 年、このスリム病の正体は AIDS であることが明らかになり、国民は大きなショックを受けた (吉田 2005)。そして、1980 年代以降、HIV/AIDS はウガンダ国内において大きな爪痕を残した。

1962 年の独立以降、ウガンダではクーデターが繰り返され、国内政治が混乱していたが、1986 年にヨウェリ・ムセベニ (Yoweri Museveni) が大統領に就任し、政治的混乱が終結する。ムセベニは大統領に就任すると、すぐに HIV/AIDS 問題を国家の緊急課題として掲げ、HIV 感染の拡大を抑制するための政策を次々と打ち立てた。しかし、1986 年以降も、HIV 感染の拡大は止まらず、1992 年には、ウガンダの首都や地方都市の一部における妊産婦の HIV 感染率は 30% を超えたと推測されている (UNAIDS 2010)。

1993 年以降、政策が功を奏し、HIV 新規感染者の報告数は減少する傾向をみせはじめ、2006 年には HIV 感染率は 6.4% となり、ピーク時に比べると著しく低下した。2014 年の HIV 感染率は 7.3% (UNAIDS 2014) と、再び HIV 感染率が上昇している。

現在、ウガンダはサハラ以南アフリカにおいて HIV 感染の拡大を抑制することに成功した国として知られている。国家の緊急課題として感染拡大を抑制する政策から、HIV 感染予防に重点をおいた政策に移行した現在、ABC アプローチと呼ばれる政策が中心となっている。ABC の意味は、A は「Abstinence (性行為を慎む)」、B は「Be faithful (貞節を守る)」、C は「use Condom (コンドームの使用)」であり、頭文字をつなげ合わせて ABC と名付けられている。ABC 政策では、HIV 感染予防に有効なコンドームの使用を主に推奨している。国内の経済や社会が HIV/AIDS により過去に大きなダメージを受けた経験から、ウガンダでは国家をあげて、HIV 感染を予防するための活動に引き続き、取り組んでいる。

町なかでみられる HIV 感染の予防対策

町なかでみられる HIV 感染の予防対策

2013 年以降、私はウガンダ南西部のルウェンゴ県の農村で調査している。調査村には電気が通っておらず、パソコンやカメラ、充電式電池といった電気機器を充電するために、1 ヶ月に数回、私は町へ出かけた。調査村と町との距離は 5km ほどである。私が町でいつも利用するゲスト・ハウスは、夜になると大音量で音楽を流しながらアルコール飲料を提供するバーを併設している。正面入り口からではバーにしかみえないのだが、バーを横切

1 妊産婦の HIV 感染率などと特定しないかぎり、ここでは、HIV 感染率は 19 ～ 45 歳の成人に占める HIV 陽性の人口割合を表している。

ると宿泊用の部屋が 20 室ほど横一列に並んでいる。驚くことに、バーからゲスト・ハウスへの入口にはコンドームの入った透明の容器が壁に設置されており、誰もが簡単に無料で入手できるようになっている。

コンドームを入れている容器には、英語とイラストでコンドームの使用方法が丁寧に書かれ、使用者は扱い方を容易に理解できる。使用方法についての文章とイラストの上には、“The correct way to protect yourself from HIV using a condom(コンドームの使用による HIV 感染を防ぐ正しい方法)”と書かれており、性行為におけるコンドームの使用は HIV 感染のリスクを軽減することを強調されている。幹線道路で目にした看板と同様に、エイズヘルスケア基金(AIDS Healthcare Foundation)やウガンダケア(Uganda Cares)といった保健省や国際 NPO からの支援を受けて、このコンドームの無料配布は実施されている。

ウガンダに滞在していると、HIV/AIDS が人びとの日常生活において深刻な問題であることを肌で感じるとともに、国際機関や保健省、国際 NGO、NPO が HIV 感染の予防に力を入れていることを垣間見ることができる。

農村でみられる HIV 感染の予防対策

調査村には医療施設はなく、緊急を要するときも、人びとは自分の足で町の医療施設に行かなければならない。村から町までさほど離れていないが、農作業や家事、育児に追われて町に行く時間を確保できない女性は多く存在する。そのような女性たちの子供の予防接種もれを防ぐために、町の看護師が 3～4 ヶ月に 1 回のペースで村に訪れ、予防接種を実施している。

2014 年 7 月 6 日、調査村内でポリオの予防接種を実施することが決まった。その前日、村長はバイクに乗りながら村内をまわり、ポリオの予防接種や実施の場所、時間について拡声器を使ってアナウンスしていた。

予防接種の当日、午前 9 時に村長と私はバイクに乗って、実施場所に向かった。私たちが到着し

た場所は、小学校の校庭のへりで、教会のそばの木陰であった。村長と私は学校から机 1 台と椅子を何脚か運び、簡易ではあるが小さな診療所をつくった。机を運びだしているときに、実施場所を学校の校庭にした理由を尋ねたところ、早朝から村の人びとは礼拝のために教会へ来るので、礼拝後に予防接種を受けることができるのだと村長は答えた。

1 時間が経ったころ、2 人の女性看護師がポリオの生ワクチンをいれた容器を抱えながら、小さな診療所に現れた。予防接種の準備は整ったが、礼拝が終了するまで私たちはこの小さな診療所で待つことになった。照りつける日差しのもと、看護師 2 人と村長、そして、私の 4 人は 30～40 分ほど話し込んだ。

そのなかで看護師の 1 人がポリオの生ワクチンだけでなく、HIV 抗体検査のキットも持ってきたと話した。私はポリオの予防接種だけかと思っていたため、HIV 抗体検査を実施することに驚いた。しかし、村長は動じることなく、そのまま看護師の話を聞いていた。看護師は、驚いている私に「日本もおなじようなキットを使って、HIV 抗体の検査をしているの？」や「妊娠した女性は HIV 抗体検査を定期的に受けているのか？」²、「あなたは今までに何回、検査したのか？」という質問を、矢継ぎ早に投げかけた。私はこれらの質問にうまく答えることができず、少し困惑した表情を彼女にしめした。そのような私をみて、質問をした彼女の顔も次第に困惑した表情となった。彼女の想像する日本のイメージは、医療施設が数多く存在し、国民に対して HIV 抗体検査もしっかりと行き届いている国であったのだ。そのため、HIV 抗体検査が日本で普及していないことが彼女には理解しがたいようだった。

やがて礼拝が終わり、教会から人びとがぞろぞろと出てきた。この小さな診療所は礼拝帰りの人びとの目にとまる場所につくったにもかかわらず、

2 妊婦は妊娠期間中に 3 回（主に 9 週目、18 週目、27 週目）、HIV 抗体検査を受けることを推奨されていると、看護師は説明していた。



写真3 小学校の校庭につくった小さな診療所に子供を連れてきた母親たち

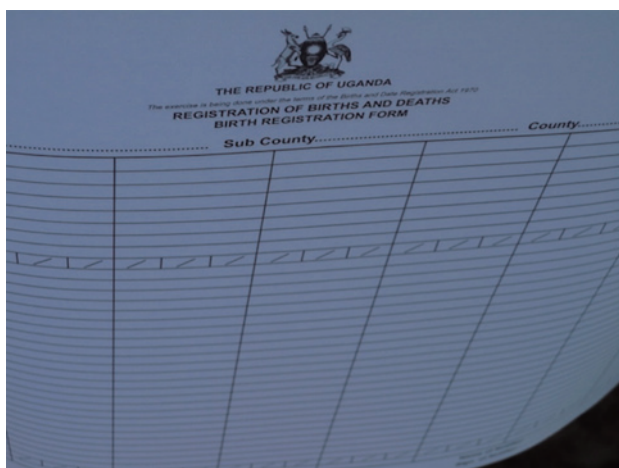


写真4 村長が書きとめた村の人びとの出生記録

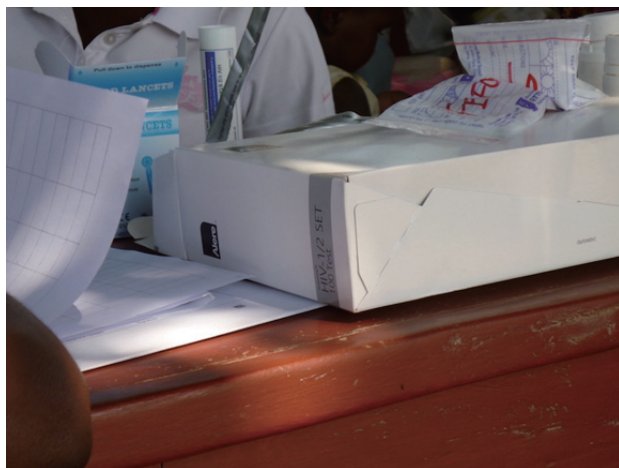


写真5 町の看護師が持ってきた HIV 抗体検査のキット

礼拝者の多くは何も興味を示さずに通りすぎた。10～15分が経った頃から、子どもを連れた母親たちが診療所に集まり始めた(写真3)。村長みずからポリオの予防接種を受ける子どもとその母親の名前を聞きとった。村長の手元にある出生記録と照合し、ポリオの予防接種を受けるのに適正な年齢であるかを確認した(写真4)。年齢を確認したのち、看護師2人のうち1人がポリオの生ワクチンを子供の口内に入れた。予防接種を終えたのち、看護師はつぎに母親を椅子に座らせ、HIV抗体検査の実施について説明を

した。ポリオの予防接種のために子供を連れてきた母親は検査を受けるべきだと、村長は意見を述べた。

母親に HIV 抗体検査を実施する理由について、看護師に尋ねたところ、「子供を育てる役割を母親がおもに担っているため、健康でいなければならない。そのため、こまめに検査をうけて、自分の健康をチェックする必要がある」と説明した。その後、看護師は HIV 抗体検査キットを取り出し、母親の中指の先に消毒された針をさし、採血をした(写真5)。

ポリオの予防接種を受けたのちも、泣き続ける子供の声を聞きつけたのか、小さな診療所には見物客がだんだんと集まってきた。看護師は、見物客のなかにいた14～15才ぐらいの女の子を呼び、HIV 抗体検査を受けることを勧めていた。ウガンダでは、近年、若年層の HIV 感染が深刻な問題となっており、HIV 感染の早期発見のために10歳以上の女性には検査を勧めていると看護師は説明した。

この日、村長と2人の看護師は小学校の校庭につくられた診療所で談笑を交えながら、午前11時から午後3時すぎまでの計4時間、ポリオの予防接種と HIV 抗体検査を実施した。最終的に HIV 抗

体検査を受けた人数は合計 17 人で、男性と女性の内訳をみると、男性が 2 人、女性が 15 人と圧倒的に女性のほうが HIV 抗体検査を積極的に受けていた。男性は見物客として集まっていることが多く、HIV 抗体検査を勧められるとそそくさとその場を立ち去る男性もいた。HIV 抗体検査を受けた男女比が異なっていたことについて、女性看護師は「たとえ自分が HIV に感染していたとしても、男性は知りたがらない。自分が感染していることはないと思込んでいる」と不満を口にした。村の男性のなかには、HIV 感染を他人事のように考えており、検査を受ける必要がないと思っているようであった。その後、机と椅子を学校の教室に戻し、看護師 2 人はバイクに乗って、町へ帰っていった。

ウガンダにおける性をめぐる政策の動き

ウガンダでは避妊用具の使用や家族計画の啓発、HIV 抗体検査を積極的に実施し、HIV 感染の予防について国家をあげて取り組む一方で、近年、HIV 感染の主な感染経路となる性行為に対して厳しく取り締まる動きもみられる。

現在、女性のミニスカート着用は性的興奮を促すとして違法とされている。2015 年には女性が下着姿で歌っている音楽のプロモーション・ビデオが「反ポルノ法 (Anti-Pornography Act)」³ に違反しているとして、この女性歌手が逮捕された。このことは表現の自由を妨げているとして、ウガンダ国内の若者や国際 NGO が抗議運動を繰り広げた。

2014 年 2 月 24 日には、ムセベニ大統領が「反同性愛法案 (Anti-Homosexuality Act)」に署名し、この法律が成立した。この法律は、同性愛者同士の恋愛を禁止し、最高刑には死刑を科す厳しいものであった。反同性愛法案が成立してから、ウガンダは国際社会や国内の人権活動家から多くの非

難をうけ、この法案は 2014 年 8 月にひとまず無効となった。

アメリカ合衆国では、2015 年 6 月 26 日、アメリカの連邦最高裁判所がすべての州で同性婚を合法化することを定め、性に対して多様かつ柔軟な対応をみせている。今までは排除の対象とされてきた同性愛者に対して、アメリカをはじめ、世界各国が彼らを容認する姿勢をみせはじめている。しかし、ウガンダでは、性に関する表現や同性愛者を厳しく取り締まるなど、世界の趨勢とは逆の方向に舵をきっている。

このような性を強調したり、性行為を助長する表現に対する国家の厳しい取り締まりは、HIV 感染の拡大と蔓延が大きな爪跡を残しており、今もなお法律や政策の立案に多大な影響を与えていることをうかがわせる。今後、ウガンダにおける国家の HIV/AIDS 対策と性にまつわる動きに注目していきたい。

引用文献

Joint United Nations Program on HIV/AIDS. 2010. The HIV/AIDS Epidemiological Surveillance Report 2010.

[<http://www.unaids.org/sites/default/files/en/media/unaids/contentassets/documents/data-and-analysis/tools/spectrum/Uganda2011report.pdf>] (2015 年 9 月 7 日閲覧)

——— 2014. HIV and AIDS estimates (2014).

[<http://www.unaids.org/en/regionscountries/countries/uganda>] (2015 年 9 月 7 日閲覧)

World Health Organization. 2013. Number of People (all ages) living with HIV. [http://www.who.int/gho/hiv/epidemic_status/cases_all/en/] (2015 年 9 月 7 日閲覧)

吉田栄一 2005. 「第 2 章 ウガンダ——エイズ対策「成功」国における政策と予防・啓発の果たした役割——」 牧野久美子・稲場雅紀編『エイズ政策の転換とアフリカ諸国の現状——包括的アプローチに向けて——』アジア経済研究所 52:41-65

(なかざわ めい／京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科)

3 ポルノの制作、売買、公開を取り締まる法案であり、2014 年 2 月に施行された。最長 10 年の禁固刑と最大 1000 万シリング（約 37 万円）の罰金を科せられるが、児童ポルノの場合、禁固刑は最長 15 年、罰金は最大 1500 万シリング（約 55 万円）にまで引き上げられる。

フリードリッヒ・ユリウス・ビーバーの生涯と、彼の遺した資料群

吉田 早悠里

フリードリッヒ・ユリウスとカファ地方

2011年3月、エチオピア南部諸民族州カファ地方の行政都市ボンガにて、盛大な式典が開催された。これは、カファ地方で自然環境保全を目的とした活動を実施しているドイツのNGOであるNABU (Nature and Biodiversity Union) が、2010年6月にカファ地方の一部の地域がユネスコ生物圏保護区 (UNESCO Kafa Biosphere Reserve) に指定されたことを記念する祝典として企画・実施したものである。この式典の開催にあたり、NABUはオーストリアから一人の男性を招待した。その人物とは、20世紀初頭にエチオピアを訪れたフリードリッヒ・ユリウス・ビーバー (Friedrich Julius Bieber、以下フリードリッヒ・ユリウス) の孫クラウス・ビーバー (Klaus Bieber) である (写真1)。

フリードリッヒ・ユリウス・ビーバーは、カファに関する民族学的研究の第一人者である。20世紀初頭に3回にわたってエチオピアを訪れ、なかで

も1905年6月から7月には、エチオピア帝国に征服されて間もないカファ地方を訪問、滞在している。そして、カファ地方に暮らす人々の生活や民俗、歴史に関する多くの記述を遺し、カファ研究の基本的枠組みの形成に大きな貢献を果たした。

筆者は、2014年9月からオーストリアのウィーンにて、フリードリッヒ・ユリウスが遺した資料群の調査に着手した。本稿では、フリードリッヒ・ユリウスの経歴と、彼が遺した資料群について報告する。

フリードリッヒ・ユリウスの人生¹

フリードリッヒ・ユリウスは、1873年にウィーンで生まれた。1881年、フリードリッヒ・ユリウスは8歳の時に、父親からクリスマスの贈り物として『アフリカ横断』(Burmahn 1880)を受け取った。この本はその後の彼の人生に大きな影響を与えるものとなり、彼は最初の頁に「1881年のクリスマスにパパから受け取った。おそらく、私の将来の運命を予言するものであった」と書き込んでいる。

アフリカに強い関心を抱くようになったフリードリッヒ・ユリウスは、大学進学を目指し、勉学に励んだ。しかし、彼が13歳のとき、父親が他界した。これにより、一家は経済的困難に陥り、フリードリッヒ・ユリウスは勉学を断念せざるを得ず、靴職人の徒弟となった。それでも、アフリカの大地を踏むことを切望し、1890年に徒歩と鉄道にてアドリア海に臨むトリエステとフィウメ (リエカ) まで到達する。同年11月には、ドナウ川に沿って黒海に向かい、イスタンブールまで旅する。しかし、アフリカに到達することは叶わず、フリー



写真1 フリードリッヒ・ユリウス
提供：クラウス・ビーバー (撮影年不明)

1 この部分の記述に関しては、ホルツアプフェル (Holzapfel 2012) とクラウス・ビーバー (Bieber 2015) に依拠している。

ドリッヒ・ユリウスはウィーンに戻って書店で販売員として勤務した。そして、書店で手に取った数々の本からアフリカに関する知識を蓄えた。なかでも、フリードリッヒ・ユリウスは、オーストリア人の元軍人フォン・カロットの著作『東洋とヨーロッパ』を読み、エチオピア高地の虜になった²。

フリードリッヒ・ユリウスは、書籍から得た知識をもとに、アフリカ、とりわけエチオピアについての一般講演をしばしば行った。これにより、フリードリッヒ・ユリウスは2人の退役軍人と知り合う。彼らは、スーダンにてマフディー（ムハンマド・アフマド）の反乱で捕虜となっていたオーストリア人軍人ルドルフ・カール・フォン・スラティン（Rudolf Carl von Slatin）を解放するためにスーダンへ行こうとしていた。フリードリッヒ・ユリウスはアフリカの専門家として彼らに同行することになり、1892年、初めてアフリカの大地を踏む機会を得た。3人はイタリア領だった現在のエリトリアを訪れ、そこからエチオピアを通過してスーダンへ入国しようと試みた。しかし、イタリア植民地政府は彼らがエリトリアからエチオピアへの国境を通過することを認めなかった。

帰国後、フリードリッヒ・ユリウスは、オーストリア＝ハンガリー帝国の貿易省（Ministry of Trade）に勤務する傍ら、アフリカに関する講演をたびたび行った。その内容は、彼自身の旅や、ヨーロッパで植民地をもたなかったオーストリア＝ハンガリー帝国と、アフリカで独立を保っていたエチオピア帝国の間での貿易の可能性に関するものであった。このような活動が実を結び、ハンガリー人の実業家アーノルド・セル（Arnold Szél）の指揮のもとで、セル社の取締役レオポルト・モルゲ

ンシュテルン（Leopold Morgenstern）とフリードリッヒ・ユリウスがエチオピアに渡航するための費用として、約70社から出資を得ることに成功した。1904年1月、フリードリッヒ・ユリウスらの一行は、贈り物や商品サンプルが入った36個の木箱を携えてエチオピアに赴いた。アディス・アベバに到着すると、メネリクⅡ世のアドヴァイザーであったスイス人アルフレッド・イルク（Alfred Ilg）を通して、フリードリッヒ・ユリウスらはメネリクⅡ世から謁見を許され、勲章を授かった。独学で習得したアムハラ語を話すフリードリッヒ・ユリウスに対して、メネリクⅡ世は大変驚いたと伝えられている。1904年6月、フリードリッヒ・ユリウスは、彼にとって憧れの土地であったエチオピアを訪問した興奮が醒めやらぬまま、アディス・アベバを後にした。

ウィーンに戻ったフリードリッヒ・ユリウスは、オーストリア＝ハンガリー帝国とエチオピア帝国の間での通商と友好に関する協定の締結に尽力するようになる。1905年1月、エチオピアに公使使節団が派遣された際、フリードリッヒ・ユリウスはエチオピアの専門家およびアムハラ語の通訳として使節団に加わった（写真2）。使節団は、3月にメネリクⅡ世に謁見して帰国の途に就いたが、フリードリッヒ・ユリウスは、使節団の一員であっ



写真2 アディス・アベバでのフリードリッヒ・ユリウス（写真中央）
提供：クラウス・ビーバー（1905年撮影）

² フリードリッヒ・ユリウスは、フォン・カロットによる『東洋とヨーロッパ』（von Callot 1854-55）の一部を抜粋したものを1923年に『クシとハベシを通る旅』（von Callot 1923）と題して編集・出版し、その序章を執筆している。

たバロン・フォン・ミリウス（Baron von Mylius）とエチオピアに残り、カファ地方への訪問を試みた³。

1905年4月19日、ミリウスとフリードリッヒ・ユリウスらのキャラバンは、カファ地方にむけてアディス・アベバを出発した。ノンノ、リンム、エンナルヤ、ジンマを旅し、6月7日にゴジェブ川に達した。そしてカファ地方に入り、帰路に就く7月2日までのおよそ1か月間、カファ地方に滞在した。彼らは当時のカファ地方の行政都市のほか、1897年まで同地に繁栄したカファ王国の王都が位置した場所や王墓を訪れた。カファ地方での滞在期間中、フリードリッヒ・ユリウスは継続的に日記を記すとともに、カファ語を学び、カファ王国の歴史や慣習、宗教などについて人びとから聞き取り、記録した。同年9月、彼らはアディス・アベバを出発し、ウィーンに戻った。

ウィーンに戻ったフリードリッヒ・ユリウスは、前職勤務を継続する傍ら、エチオピアへの再訪を切望した。1909年、エチオピア再訪が実現した。フリードリッヒ・ユリウスは実業家エミル・ピック（Emil Pick）と共にエチオピアを訪れ、3月にアディス・アベバに到着した。フリードリッヒ・ユリウスは、古い友人らと再会するとともに、メネリクⅡ世に謁見を許された。その後、エチオピア西部を通してスーダンに到達し、ハルツームを経由してサイド湾から船でオーストリアへ戻った。

帰国後、フリードリッヒ・ユリウスは復職するとともに、自身の旅とエチオピアに関する多くの論文や記事を発表した。1920年と1923年には、『カファ』（Bieber 1920, 1923）と題した著作を出版した。一方で、マラリアに罹患していたフリードリッヒ・ユリウスは、1923年1月末、体調不良を理由に職を辞す。それでも、ドイツの民族学



写真3 フリードリッヒ・ユリウスが暮らした家（2014年9月筆者撮影）



写真4 フリードリッヒ・ユリウスが暮らした家であることを示すプレート（2014年9月筆者撮影）

者レオ・ヴィクトル・フロベニウス（Leo Viktor Frobenius）と書簡を交わし、スーダン訪問の計画を立てた。ただし、健康状態の悪化により、それらの計画は実現しないまま、1924年3月3日に51歳でウィーンの自宅にて永眠した（写真3、4）。

³ フリードリッヒ・ユリウスが、なぜカファ地方に惹かれ、カファ地方に赴いたのか、その理由は現時点では明らかではない。フリードリッヒ・ユリウスの日記等を参照することで、今後、明らかにできる可能性がある。

遺された資料群⁴

フリードリッヒ・ユリウスの死後、彼がエチオピアを訪問した際に現地で収集した民族学的資料、旅行時に使用した機器、同地で撮影した写真、書籍、日記、草稿、書簡などが大量に遺された。一部の書籍は、長男フリードリッヒ (Friedrich) によって 1926 年 9 月にハンブルクに所在する機関へと売却された。その他の遺された資料は、次男オットー (Otto) が自宅に保管した。

オットーは、父フリードリッヒ・ユリウスから多大な影響を受け、アフリカに魅せられた。オットーは、フリードリッヒ・ユリウスの没後 5 年にあたる 1929 年、没後 10 年の 1934 年、没後 20 年の 1944 年に、フリードリッヒ・ユリウスの人生と業績についてラジオで紹介したり、一般講演会を開いたりした。1948 年には、それらを本にまとめて出版した (Bieber 1948)。

また、オットーはフリードリッヒ・ユリウスがエチオピアで収集した民族学的資料を、展覧会を開催して一般に公開した。1936 年には、「カファ王 (Kaffi Tatitino)」と題した展覧会を企画し、ハーゲンブント (Hagenbund)⁵ の協力を得て開催する (写真 5)。1944 年に第二次世界大戦のもとでウィーンに戦火が及ぶようになると、オットーは家族とフリードリッヒ・ユリウスの資料群をウィーンから約 70km 離れたドナウ川沿いの町シュピッツ (Spitz) へ避難させた。第二次世界大戦後の 1945 年、オットーは民族学博物館 (Museum für Völkerkunde) の協力を得て、フリードリッヒ・ユリウスの資料群を彼の家族が暮らしたウィーン市 13 区の自宅へと移動させた。ただし、フリードリッヒ・ユリウスの資料群を安全に保管することの重要性を感じてい



写真 5 1936 年に開かれた展覧会「カファ王」(写真左・次男オットー、中央・フリードリッヒ・ユリウスの妻バルタ、右・長男フリードリッヒ)
提供：クラウス・ビーバー (1936 年撮影)



写真 6 ハイレ・セラシエとオットー・ビーバー (写真右・オットー)
提供：クラウス・ビーバー (1954 年撮影)

たオットーは、フリードリッヒ・ユリウスがエチオピアで収集した民族学的資料の多くを 1946 年にウィーンの民族学博物館に貸与し、1956 年に売却する。なお、1954 年にハイレ・セラシエがオーストリアを訪問した際には、民族学博物館に展示されたフリードリッヒ・ユリウスの資料群の観覧に同行している (写真 6)。1955 年にハイレ・セラシエの戴冠 25 周年を記念する式典がアディス・アベバで開かれた際には、オットーはエチオピアへ渡航し、式典に参列している。

手元に残した資料群については、自宅にアフリカ・ルームを設けて常時展示した (写真 7)。また、オットーは、複数回にわたってウィーン市内外でフリードリッヒ・ユリウスがエチオピアおよ

4 この部分の記述に関しては、クラウス・ビーバー (Bieber 2015) および、2014 年と 2015 年に実施した彼からの聞き取りによる。

5 ハーゲンブントは、1900 年から 1938 年にかけてウィーンを拠点に活動した芸術家協会である。オットーはこの協会の会員であった画家カリー・ハウザー (Carry Hauser) と懇意にしており、協力を得ることができた。



写真7 オットーの自宅の一室に設けられたアフリカ・ルーム
提供：クラウス・ビーバー（1975年撮影）

びカファ地方で収集した資料群の展覧会を主催した。1975年、オットーは手元に残していた民族学的資料をウィーン市13区にあるヒーツィンク区博物館（Bezirksmuseum Hietzing）⁶に貸与し、その後、売却する。

1980年9月7日、ヒーツィンク区博物館では、同館所蔵のフリードリッヒ・ユリウスの資料群が常設展示されることとなった。この常設展示では、エチオピアの民族学的資料のほか、フリードリッヒ・ユリウスが生前に用いていた机、椅子、エチオピアへの渡航時に用いたスーツケース、カメラなども展示され、フリードリッヒ・ユリウスの自室を髣髴とさせる展示がなされた（写真8）。また、壁にはフリードリッヒ・ユリウスの写真、肖像画も展示された。その後、同館は改築のために休館し、2000年11月にリニューアルオープンした（写真9）。これに伴い、フリードリッヒ・ユリウスの資料群の展示物の内容は、エチオピアで収集した民族学的資料を中心とするものに変化した（写真10）。なお、民族学博物館では1973年に開催された特別展を最後に、フリードリッヒ・ユリウスの資料群は現在まで公開されていない。

6 日本では慣例的にヒーツィンクと表記される。たとえば、大阪府羽曳野市は、同区と1995年に友好交流都市協定を締結しているが、ホームページ上でヒーツィンクと表記している。本稿ではドイツ語の発音にならってヒーツィンクと表記する。



写真8 改築前のヒーツィンク区博物館のフリードリッヒ・ユリウス資料群の展示風景
提供：アストリド・エステルス・ビーバー（1997年撮影）



写真9 ヒーツィンク区博物館外観（2015年10月筆者撮影）



写真10 ヒーツィンク区博物館のフリードリッヒ・ユリウス展示室（2014年9月筆者撮影）

資料群の現状

今日、フリードリッヒ・ユリウスがエチオピアおよびカファ地方で収集した民族学的資料群や、彼が撮影した写真、旅行時の日記、草稿、家族や友人と交わした手紙や葉書などは、ウィーンの民族学博物館⁷、ヒーツィンク区博物館、国立図書館(Nationalbibliothek)に所蔵されている。ウィーンの民族学博物館は、エチオピアに関する民族学的資料257点を所蔵している⁸。ヒーツィンク区博物館は、200点以上のエチオピアの民族学的資料のほか、彼のプライベートに関する資料を所蔵している。また、国立図書館は、フリードリッヒ・ユリウスのエチオピア訪問時の日記のほか、カファ語とドイツ語で書かれたカファの歴史や民俗、宗教等に関する草稿など、35点を所蔵している。

国立博物館が所蔵する文書資料には、カファ地方の歴史、文化、宗教、住民の生活などに関する未刊行の文書が含まれている。なかには、文字のなかったカファ語を、フリードリッヒ・ユリウスが独自にアルファベットで表記した文書もある⁹。また、フリードリッヒ・ユリウスがエチオピア帝国を訪問した経緯や、当時のオーストリア＝ハンガリー帝国とエチオピア帝国の関係、さらには近代国家エチオピアの黎明期の様態を記した文書資料も含まれている。これらは、いずれも今日の現地調査では実証困難な、過去の歴史や人々の暮らしぶりを現在に伝える貴重な資料群であるといえよう。

ただし、ヒーツィンク区博物館に所蔵されている資料群は、必ずしも状態が良いとはいえない。同館には収蔵庫はなく、専門的知識を持つ人物や学芸員は不在である。そのため、資料の保管状態が悪く、資料の劣化・破損が進んでいる。加えて、同館が所蔵する資料群は、ほぼ全てが未整理に等

しい。同館が所蔵する資料群に関する情報は、資料名称、目録番号、所蔵経緯が記された館蔵品目録に集約されている。フリードリッヒ・ユリウスの資料群は、一部の資料のみ、館蔵品目録に記録されているが、大半は目録番号が資料に記されておらず、資料に付されていた目録番号を記したラベルが剥がれ落ちている。そのため、どの資料が館蔵品目録に記録されているのか、あるいは記録されていないのかが不明であり、一から資料群の整理、調査を実施し、資料群の全体像を把握することが必要である。

資料群の再評価と可能性

従来のエチオピア研究では、歴史研究は文字資料が残されているエチオピア北部およびエチオピア帝国の歴史の解明に集中してきた。他方で、19世紀後半にエチオピア帝国によって征服・編入された南西部は文字資料が乏しく、同地に関する研究は文化人類学による同時代的研究に偏ってきた。ただし、現地調査は共時的現在を解明するうえでは有用であるものの、通時的な視点から歴史を掘り下げようとする際にはその限界が否めないという課題も残されてきた。こうしたなかで、20世紀初頭のエチオピア、カファ地方の状況を記したフリードリッヒ・ユリウスの資料群を調査する意義は大きい。

近年、オーストリアでは、フリードリッヒ・ユリウスの業績を再評価する動きが高まっている。2012年、ウィーンにてフリードリッヒ・ユリウスの伝記に関するブックレットが出版された(Holzapfel 2012)。また、2013年にはヒーツィンク区博物館にてフリードリッヒ・ユリウスに関する講演会が開催された。2017年秋のリニューアルオープンに向けて現在改装中の民族学博物館では、アフリカ展示室にてフリードリッヒ・ユリウスの資料群を主としたエチオピアに関する常設展示が設けられる計画である。また、冒頭で示したNABUによる式典以降、カファ地方でもフリードリッヒ・ユリウスの業績が知られるようになっていく。2014年には、アディス・アベバにあるゲー

7 民族学博物館は、Museum für Völkerkunde という名称であったが、2013年4月に Weltmuseum Wien へと名称を変更した。ただし、本稿では民族学博物館という表記で統一する。

8 2015年2月25日、民族学博物館学芸員より聞き取り。

9 エチオピアにおいて、カファ語の正書法は1990年代に確立された。

テ・インスティトゥート (Goethe-Institut) で開催されたシンポジウム「北東アフリカにおけるドイツ語圏からの文化的研究」でもフリードリッヒ・ユリウスが取り上げられている。

フリードリッヒ・ユリウスがカファ地方を訪れた 1905 年は、カファ王国が崩壊し、エチオピア帝国に編入された 8 年後にあたる。当時のカファ社会は、数回にわたるエチオピア帝国との戦いとその後のアムハラによる統治のもとで疲弊するとともに、大きな変容のさなかにあった。こうした時期に、カファ地方に暮らした人々は、オーストリアから訪れたフリードリッヒ・ユリウスに何をどのように語ったのか。また、フリードリッヒ・ユリウスは、彼らをどのような眼差しで記録したのか。そして、現在を生きるカファの人々は、フリードリッヒ・ユリウスの資料群を通して自らの歴史や文化をどのように見つめているのか。

民族学博物館、ヒーツィンク区博物館、国立図書館に所蔵されているフリードリッヒ・ユリウスの資料群は、彼がエチオピアを訪問した際の状況を生き生きと伝えるものである。また、それらの資料群は、文字化された歴史資料が乏しく、空白となっている 20 世紀初頭のカファ地方およびエチオピアの歴史と当時の人々の生活を具体的に解明する糸口となる革新的な資料群であるとともに、今日のカファの人々にとって、自らの歴史や文化、アイデンティティの形成において大きな意味を有するものとなっている。ただし、フリードリッヒ・ユリウスの資料群を基礎資料として活用し、運用していくためには、あるいはその価値を再評価して後世に継承していくためには、まずは資料群の全体像を把握し、その詳細を解明することが課題である。

謝辞

本研究の実施にあたっては、平成 27 年度・公益財団法人日本科学協会・笹川科学研究助成の助成を受けた。ここに深く感謝いたします。

参考文献

- Bieber, Friedrich Julius. 1920–23 *Kaffa: Ein altkuschitisches Volkstum in Inner-Afrika; Nachrichten über Land und Volk, Brauch und Sitte der Kaffitscho oder Gonga und das Kaiserreich Kaffa*. 2 Bände. Münster i.W.: Aschendorff.
- Bieber, Klaus. 2015 The Bieber Family's Fascination with Africa, *ITYOPIS Northeast African Journal of Social Sciences and Humanities Extra Issue 2015 Cultural Research in Northeastern Africa: German Histories and Stories*, pp.139–155.
- Bieber, Otto. 1948 *Geheimnisvolles Kaffa im Reich der Kaiser-Götter*. Wien: Universum Verlagsges.
- Burmahn, Karl. 1880 *Quer durch Afrika : Gerhard Rohlfs' und Verney Cameron's Reisen*, Leipzig: Albrecht.
- Holzappel, Josef. 2012 *Friedrich Julius Bieber (1873–1924): Ein Afrikaforscher wohnhaft in Wien-Hietzing*. Wien: Bezirksmuseum Hietzing.
- von Callot, Eduard Ferdinand. 1854–55 *Der Orient und Europa. Erinnerungen und Reisebilder von Land und Meer*. Leipzig: Kollmann.
- von Callot, Eduard Ferdinand. 1923 *Reise durch Kusch und Habesch: Erinnerungen und Reisebilder*. Stuttgart: Union Deutsche Berlagegesellschaft.

インターネット

- Ober St. Veit: An der Wien 1133.at (2015 年 10 月 30 日閲覧)
<http://www.1133.at/document/view/id/556>
- 羽曳野市・友好交流都市ウィーン市 13 区ヒーツィンク (2015 年 11 月 28 日閲覧)
<http://www.city.habikino.lg.jp/10kakuka/04shiminkyodo/06tabunkakoryu/hpg000001257.html>

(よしだ さゆり／名古屋大学高等研究院)

新刊ライブラリー

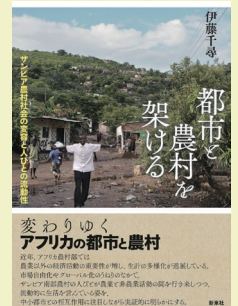
伊藤千尋 著

『都市と農村を架ける
—ザンビア農村社会の変容と人びとの流動性—』

新泉社、2015 年、291 ページ、4200 円＋税

原将也

京都大学、日本学術振興会



「都市と農村のバランス」は、どこの国にも存在する普遍的な課題である(本書 1 ページ)。著者が述べているように、都市への人口や経済の集中、農村の過疎化、地方分権化という課題はどこの国ももっている。本書の著者は、大学院生になってはじめてアフリカを訪れ、調査地となったザンビアの農村において不安定な農業生産の現実を知るなかで、まさに都市と農村を架けながら生活する「農民」に出会った。著者は農村で調査していくうちに、農村と都市のあいだを移動し、さまざまな生計活動に従事する村びとたちの柔軟さを知り、彼らを「農民」と呼ぶことをためらうようになった。

本書が対象としているザンビアの都市人口増加率年平均 4.2% であり、サブサハラ・アフリカ諸国のなかでも都市化率が高い国のひとつである。それは植民地時代に、南部アフリカ地域における労働力の供給地となったことや国内で鉱山開発が進められたことに起因しており、現在に至るまで出稼ぎを中心とした労働移動がさかんである。本書はそんな農業と非農業活動のあいだ、そして農村と都市のあいだを行き来する「農民」の生計活動を実証的に分析し、複雑化する農村と都市の相互作用を描きだしている。

著者は農村において多様化する非農業活動のなかでも、村内における畑の耕作や家の修理などのピースワーク (piece work) という短期の賃金労働が、世帯にとって重要な現金稼得の手段となっていることを指摘する。そのピースワークを生みだしているのが、農村ビ

ジネスをおこなう富裕層の農民であるという。農村ビジネスとは、村内でおこなわれている商店やレストラン経営のような商業、サービス業のことを指す。農村ビジネスの事業主の多くは高学歴であり、都市の経済悪化によって職探しに失敗し、都市から「追い返された」経験をもつ。本書では、彼らが農村に戻って商店やレストランを経営し、興隆していく様子がいきいきと描かれている。彼らは近年では、近郊の中小都市にも活動の場を広げ、よりよい生活のために新たなビジネスチャンスをつかもうとしている。

本書ではこのような農民の生計活動が、中小都市の存在によって成立していると指摘されている。著者は農民の出稼ぎの実態を分析し、現在の農民の生活範囲が農村にとどまらず、中小都市へも広がっていることを示している。調査村では降水量の年変動が激しく、農民たちは干ばつや食料不足が起こったときに素早く対処するため、出稼ぎ先として中小都市を好むようになった。農村から安く、すぐに移動することができる近郊の中小都市への出稼ぎは、困窮時においても参入しやすい。著者は数日や数週間という、ごく短期間の中小都市への出稼ぎが、村内におけるピースワークの代替となっている可能性を述べている。著者は農民たちの個々の生計活動を丁寧に検討していくなかで、彼らが中小都市を生活範囲とみなし、農村と中小都市を連続する空間として捉えていることを指摘している。

中小都市が農村を含めた地域社会の変容を担うカギ

となっているという著者の指摘は、現在のアフリカにおける都市と農村の関係性を捉えるうえで重要である。これまでザンビアにおいて、都市と農村は二項対立的に論じられてきた。しかし著者は、都市と農村が農村ビジネスや出稼ぎといった多様な関わり方をもつことを指摘し、両者の関係性を、個人や世帯が架ける経済活動のネットワークとして捉える重要性を説いている。最後に著者は、本書で示している農村や中小都市にお

ける変容が、本書の地域固有の事例とは言い切れないと感じていると述べている。その背景には、アフリカ各地で進展するグローバル化にともなう社会・経済の急速な変化がある。本書はザンビアのみならず、アフリカに携わる人間が少なからず感じている急速に変容するアフリカの断面を的確に捉えている。

(はら まさや)

浜本満 著

『信念の呪縛』

—ケニア海岸地方ドゥルマ社会の妖術の民族誌—

九州大学出版会、2014 年、544 ページ、8800 円＋税



橋本栄莉

九州大学、日本学術振興会

本書は、ケニア海岸地方に位置するドゥルマ社会の妖術信仰を事例に、人間集団をある信念へと呪縛し続けるシステムのあり方を明らかにした民族誌である。著者は30年以上にわたりドゥルマ社会でフィールドワークを続け、同社会の変化を目の当たりにしてきた。妖術とは、人に知られることなく他人に危害を及ぼす特別な手段のことである。ドゥルマの妖術使いは、実に様々な手段を用いて人々に不幸や病気、災難をもたらしている。

日本に暮らす多くの人は、アフリカの妖術と聞けば、自分たちとは全く縁のない「非合理的」思考に満ちた世界を想像するかもしれない。しかし、本書はこうしたアフリカの妖術に対するイメージを一掃する。貨幣経済、近代教育、開発、キリスト教など新しい概念や実践が流入するアフリカで、いかにして妖術信仰は展開しているのだろうか。

1990年代、アフリカ諸社会の妖術信仰にかんする議論が人類学者の間で再活性化した。というのも、社会の近代化とともに消え去っていくであろうと考えられてきた妖術信仰や実践が、新たなかたちで人々の生を縛り付けるようになったからである。序論では、この

ような「妖術の近代性」にかんする議論の批判的検討と、本書を貫く問題意識と視座が提示される。

第1部では、ドゥルマの人々が妖術に関して持っている一般的・専門的知識やイメージ、妖術使いや妖術が引き起こす諸問題が記述され、人々がどのように妖術の観念世界を構成しているのかが示される。続く第2部では、妖術に起因するとされた災厄に対する人々の対処法など、妖術をめぐる人々の諸実践が明らかにされる。

第3部では、妖術を経験したという3人のエピソードが取り上げられる。ここでは妖術の物語に内在するさまざまな仕掛けによって、妖術に対して懐疑的であった人々もが徐々に妖術の物語にとらわれてゆくさまが描かれる。そしてこの妖術の物語が、どのように妖術の現実的可能性を強化しているのかが明らかにされる。

第4部と第5部では、1980年代前後からケニアで活発化した地域ぐるみの抗妖術運動の特徴とその歴史的な展開が記述される。抗妖術運動とは、高名な施術師がリーダーとなり、地域住民が妖術使いを狩り出し一掃しようとするものである。ここでは周期的に反復す

る抗妖術運動が 20 世紀前半の植民地行政の産物であったことと、地域の「開発」をめぐる人々の思惑の中で、妖術信仰が新たなリアリティの次元を獲得していった過程が明らかにされる。

上記の議論を通じて、結論部では妖術信仰とはアフリカの古めかしい伝統などでは決していないことと、そして妖術信仰という信念と実践のさまざまなところにそれを真理化し、現実化する仕組みが含まれていたことが説得的に示される。ドゥルマ社会の妖術信仰は、西洋社会との接触とケニア地域行政に支えられながら展開してきた、「時代にチューンを合わせつつ生成してきた信仰と実践のシステム」(p. 502) なのである。

大変親しみやすい文体で記述された本書は、人類学やアフリカの諸事情に通じていない読者にも十分楽しめる専門書である。著者が調査の中で直面した思いがけない出来事、妖術実践に対する著者個人の素朴な意

見やツッコミ(?)など、思わず吹き出してしてしまう場面が満載である。一方で、人類学のみならず哲学や心理学などの分野で長年議論されてきた信念をめぐる問題も十分に引き上げられ、汎用性の高い議論が各章で展開されている。

本書を読み終えると、こうした信念の問題は、必ずしもドゥルマやアフリカ社会にのみ当てはまるのではなく、世界各地で、あるいは私たちの生のすぐ側で自分たちを縛り付けているものであることに気付かされる。本書は、アフリカ-西洋-日本という文化的コンテクストを超えて生起する複数の信念の様態と、それらが交わる場の臨場感を読者に与えてくれる重厚な民族誌である。本書で提出された結論が、著者の次の課題である「信念の生態学」へとどのようにつながっていくのかが楽しみである。

(はしもと えり)

大門碧 著

『ショー・パフォーマンスが立ち上がる
—現代アフリカの若者たちがむすぶ社会関係—
春風社、2015 年、352 ページ、4500 円+税

中澤芽衣

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



ウガンダの首都カンパラでは、夜になるとレストランやバーで、若者たちがステージ上で音楽にあわせてダンスや芝居を繰り広げている。人びとは、このショー・パフォーマンスをカリオキと呼び、パフォーマーも、多くの観衆もカンパラの夜を楽しんでいる。2014 年 7 月、初めて評者はカリオキに足を運び、カンパラの夜を楽しんだ。大音量の音楽にあわせてエネルギーに踊るパフォーマーをみているうちに、評者自身は自然と音楽にあわせて体を動かし、カリオキの魅力に引き込まれていた。このカリオキは日本語のカラオケに由来すると考えられており、遠く離れたウガンダにも日本の影響をうかがうことができるが、日本のカラオケとは異なるものである。

本書は、このカリオキとよばれるショー・パフォーマンスを対象に、1) カリオキのパフォーマーと観衆との関係、2) パフォーマーの所属するグループに対する集団意識、3) グループ内のパフォーマー同士にみられるつながりの 3 点に着目して、若者たちがつくりだす社会関係を描き出している。

第 1 章では、音楽にあわせて口パクで歌い、身体を動かす「マイム」、個人もしくは複数人で踊る「ダンス」、歌詞の内容にあわせて、喜劇的な動きをつけながら芝居を演じる「コメディ」といったパフォーマンスの内容が説明される。カリオキはこれらを組み合わせで構成されている。カリオキのステージでは、客は流れている音楽にあわせて踊り、気に入ったパフォーマ

ーにチップを渡すなど、パフォーマーと客の間で交流がみられるのが特徴である。

第2章では、カリオキがカンパラで勃興し、定着した要因として、1990年代以降つく国内政治の安定や経済成長を指摘している。経済成長や新しい技術の導入により、音楽をデジタルで自由にやりとりできる環境が整い、人びとは音楽をより身近に楽しめるようになった。西洋音楽やダンスに興味をもつ若者たちがレストランやバーでビジネスとしてパフォーマンスを始めたのをきっかけに、パフォーマンスをする人びとのグループが次々と生まれたのだという。

第3章では、カリオキのグループに着目し、レストランやバーのオーナーに雇われるグループ（雇用型）やパフォーマーが自主的に運営するグループ（自主運営型）といったグループの運営方法やパフォーマーの民族や出自、学歴、カリオキに参入した動機、報酬について分析している。グループ内では強い結束力はなく、人びとは報酬に対する不満や人間関係の悪化を理由に他のグループへ容易に移動する。ただし、他のグループに移動したからといって、パフォーマーたちの関係は絶たれることはなく、かれらはゆるいつながりを維持しつづける。

第4章では、カリオキのステージをめぐるグループ内の人間関係に着目し、パフォーマーたちによる演目構成の決定プロセスを分析している。パフォーマーたちは客を飽きさせないよう考慮し、カリオキで使用する歌や歌の順番などの演目構成を決定している。パフォーマーが踊る予定だった歌をDJが準備していなかったなどの理由で、当日に演目構成を急遽、変化することもあるが、パフォーマーたちは当日の演目変更を容認し、臨機応変に対応している。

第5章では、筆者自身がパフォーマーとしてカリオキに参加し、ダンスの練習場や楽屋、そして本番のステージ上でみられた、ダンスのふりつけやパフォーマンスで使う衣装といったモノを通してのパフォーマー同士のかかわりを記述している。カリオキのショーでは、踊る予定だった歌が流れないことや歌の順番が変わるといった突発的なハプニングが日常的に起こりうる。そのような場合でも、パフォーマーたちが互いを巻き込みながら、そのハプニングに対応する姿が生き

生きと描き出されている。

第6章では、パフォーマンスで使う歌を通じてのパフォーマー同士のかかわりについて論じている。パフォーマーは欲しい歌をデジタルで自由に入手できるが、すでにグループ内で別のパフォーマーがカリオキで同じ歌を使用していた場合、その歌を優先的に使用する権利は最初に歌を使用したパフォーマーに存在する。しかし、パフォーマーたちはその歌を使用するために交渉する余地は残されており、決して独占されることはない。パフォーマーは歌を通して、他のパフォーマーの存在を認識し、同じ歌を使用するために交渉するなどをして、パフォーマー同士がかかわりをもっていた。

終章では、これまでの章をまとめ、カリオキのパフォーマーたちがグループ間を移動し、流動的な関係をもつ一方で、互いを巻き込みながらショー・パフォーマンスを構成するなど、ゆるい紐帯を維持していると、筆者は指摘している。パフォーマーたちは、カリオキを通して共通のアイデンティティを築き上げ、結束を強めるといったことはなく、柔軟な関係のもとで集団を構成している。

著者自身がパフォーマーとしてカリオキに参加し、パフォーマーの日常生活やステージ上、楽屋の様子、パフォーマー同士の会話を臨場感あふれるかたちで、ダイナミックかつ緻密に描き出している。読者はステージに立つ著者の緊張感を共有しながら、パフォーマーと打合せをし、会話をしている感覚にとらわれる。

ウガンダでは政治的安定や経済成長、音楽のデジタル化といった社会環境の変化によって、人びとは夜間に外に出歩き、レストランやバーで食事をしながら音楽を楽しむことが可能となった。本書を通じて、読者はこうしたアフリカ都市部における人びとの生活の変化やエンターテインメントの多様化を知ることができる。本書は若者たちがむすぶ社会関係について細部にわたって記述しており、参与観察を行う上で参考になる。アフリカの音楽やダンスに興味がある人に限らず、アフリカの都市で参与観察を考えている人に、ぜひとも手にとってほしい1冊である。

(なかざわ めい)

澤村信英 編

『アフリカの生活世界と学校教育』

明石書店、2014 年、274 ページ、4000 円＋税



有井晴香

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

アフリカの教育開発に関する研究では、学校のなかで起こる事象だけが扱われ、地域の人たちにとって学校が実際にどのように捉えられているのか問われずにいることが指摘されてきた。「学校教育」に加えて「生活」という語がタイトルに含まれている本書は、そこに暮らす人びとの視点に立つことに重きを置いており、教育開発研究において見過ごされがちであった問題を問い直すものである。サブサハラ・アフリカの 11 の国がとりあげられており、それぞれの著者が長期間かけて継続的におこなってきたフィールドワークをもとにした論考となっている。また、本書の特徴のひとつには、教育開発を専門とする研究者だけでなく、人類学者による論考（高田明「[ナミビア] オバンランドのクンと教育」、秋山裕之「[ボツワナ] 優等生国家における少数民族と学校教育」）も含まれており、人びとにとって学校教育がどのように語られ、またどのような作用がもたらされたのかに関して厚い記述がなされていることがあげられる。

以下では、序章にくわえ、ナイル・エチオピア学会に関わりの深い北東アフリカの国（南スーダン、エチオピア、ケニア）を取り上げた各章の内容について紹介する。

序章「アフリカの生活世界と学校教育」（澤村信英）では、本書のねらいと構成、各章を通して見出された問い直すべき課題がまとめられている。澤村によると、アフリカにおける教育分野の研究は、援助機関の主導によっておこなわれてきた傾向があり、教育部門全体の現状分析にその関心は集中しているという。そのため、子どもが置かれている状況や学校内部の実態に関する研究が不足していると指摘する。本書は、アフリカ教育開発研究における新たな展開として位置づけら

れ、アフリカ各国の子ども、保護者、地域住民、教師といった学校に関わるさまざまな人たちを対象として、それぞれの研究者の関心にもとづいて当該社会の文脈のなかで学校を捉えるところに重点をおいている。また、編者がこれまでケニアでおこなってきたフィールド調査の事例をまじえながら、継続的な調査の重要性を指摘している。継続的に調査をおこなっていくことは、さまざまな教育的な事象をより公正に解釈するために必要であり、変化し続けていく社会のなかで、人びとにとって学校教育がどのような役割を果たしているのかを問いなおすことにつながっていくと述べている。

第 1 章「[南スーダン] 大きな社会変動の中の学校教育」（中村由輝）では、アフリカ大陸 54 番目の独立国として 2011 年に誕生した南スーダン共和国の教育史について記述している。南スーダンは、1956 年のスーダン独立の時期から紛争の中心地であり、独立後もいまだ不安定な情勢が続いている。このような状況が続いた背景はスーダン独立後の内戦だけではなく、エジプト、イギリスによる植民地時代に遡るといい、1820 年代からのスーダンにおける政治史とともに教育状況の変遷を追っている。独立後、教育制度の整備は重要課題として位置づけられていたものの、いまでも人びとに教育機会を保障するにいたらず、混乱した状態が続いているという。近隣国や遠く離れた列強に翻弄されながら 100 年以上ものあいだ南スーダンの人びとは教育の機会が奪われてきた。国内に人材が限られていることに加え、それぞれ異なった教育背景をもった人びとが教育システム作りに関して共通の認識をもてないまま、すべての教育課題に対処していかなければならない。こうした点に南スーダンの教育が抱える困難が

ある。不安定な情勢によって現地調査が難しく、利用できる資料が限られているなかで、中村は、南スーダンの人びとが自国の教育状況について把握し、分析できるように、環境を整えるための時間と支援が必要であると指摘している。

第5章「[エチオピア] 住民による学校支援の背景を探る」(山田肖子)では、学校数、就学者数が著しく増加している昨今のエチオピア農村において、住民が学校や教育の問題にどのように関わっているのかに焦点をあてている。オロミア州の14の小学校を対象におこなった参加型ワークショップを通して、住民による学校運営への関与の度合いを決める要因を分析している。その結果、近年の政府による学校教育の推進政策によって住民の教育への関心が高められただけではなく、もともと住民主体で教育について議論する基盤があったことを指摘している。また、エチオピアのみならず、アフリカの多くの地域において行政の分権化の考えのもと学校運営へのコミュニティ参加を促す制度作りがすすめられてきたが、制度上で掲げられているコミュニティという語が指す内容は曖昧なものであり、実際には学校を基点としたコミュニティは多層的かつ多面的なものであるという。そのような、ひとくくりにすることができない「コミュニティ」がいかに学校教育へ関与しているのかを知る上で、そのリーダーの存在に目を向けることが重要であると述べている。リ

ーダーシップの存否が学校運営に関わるコミュニティの活動が活発であるかどうかを決定付けていることを明らかにしている。

第6章「[ケニア] スラムに暮らす小学校修了者の教育継続」(大場麻代)では、ナイロビのスラム地域のひとつであるキベラに住む、中等学校に進学できなかった初等教育修了者を調査対象として、その理由を世帯背景から検討している。ケニアでは小学校・中等学校の授業料は無償化されているが、授業料以外にも補習授業費など各世帯が負担しなくてはならない費用がある。こうした教育費の負担が学校教育の継続を妨げるおもな要因となっていることを明らかにしている。また、保護者は自らの学歴に関係なく教育に重要性を見出し、学校教育に対して高い関心をもっていることも示されている。

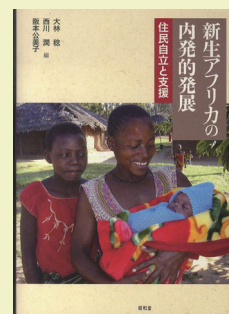
アフリカ各地で次々と学校が建てられ、より多くの人びとの生活のなかに学校教育が浸透しつつある現在、本書で提示されている生活と学校教育を結び付ける研究の視点はますます重要なものになっていくといえるだろう。人びとが学校教育をどのように受け止め、またかれらの生活にどのような変化がうまれているのかを問うためには、編者が述べていたように、継続的な調査・研究が不可欠であり、本書はその第一歩といえる。

(ありい はるか)

大林稔・西川潤・阪本公美子 編 『新生アフリカの内発的発展 —住民自立と支援—』

昭和堂、2014年、349ページ、3200円＋税

吉田早悠里
名古屋大学高等研究院



本書は、1960年のアフリカの年から半世紀を経て、大きな変動期にあるアフリカの内発的発展の問題を検討したものである。現在、10億を超える人口を抱えるアフリカでは、グローバリゼーションに伴う急速な変

化のもとで市場経済化が進むとともに、世界的な資源ブームのさなか、高い成長を示す国が登場した。他方で、人口増加、生態系の悪化、世界市場の動きと直結した紛争、民族対立などの問題が深刻な形で現れてい

る国々もある。本書は、こうした世界的な動きとともに、これに対応してアフリカの内部から生じている変化の動きのダイナミクスを分析することで、今日のアフリカの変化を理解することを目的としている。

本書において、内発的発展は2つの意味で用いられている。第1に、分析の枠組みとしてである。世界経済との接触、海外からの働きかけに対して、地域社会はどのように反応、対応しているのか、とりわけ歴史的、文化的に形成された人々の思考、集団的な反応によってどのような変化が引き起こされ、コントロールされ、地域独自の変化を生み出しているのか、こうしたアフリカの人々の思考、動きを内発的発展とする。第2は、方法論としての内発的発展である。内発的発展論は、社会変化に必ず文化が関わっているとし、社会変化と文化との相関関係を明らかにしようとする、社会動態に関する文化的な分析アプローチとして説明される。本書では、アフリカで進行する変化を、政治的、経済的に分析するだけでなく、さらに文化的、人類学的な分析ツールをも加えて総合的に検討する手法をとっている。

本書は、13人の執筆者による論考が、序説と12の章から構成されている。本章は2部構成になっており、第Ⅰ部は「各国・地域に見る内発的発展——住民自立に根ざす自前の民主主義」と題され、7章が収められている。アフリカ各地で観察される内発的発展の事例を検証し、それがいかに「自前の」民主主義を育み、新生アフリカを動かす動因となっているかを示すことが目的とされている。第Ⅱ部は「内発的発展と外部支援——相克と協働」と題され、5章から構成されている。アフリカにおける発展経験を通じて、内発的発展と外部支援の関係をどう理解するか、また両者の相克、協働の働きが、いかに内発的発展論を豊穰化させ、深化させてきたかが提示されている。第Ⅰ部は、アルジェリア、エチオピア、ニジェール、ザンビア、タンザニアといった国における具体的な事例を通して内発的発展が論じられている。これに対して、第Ⅱ部では一国の事例を掘り深めるというよりは、むしろマクロな視点からアフリカの国々と支援を行うドナーの関係が中心に論じられている。

以下では、第Ⅰ部からはエチオピアに関して取り上

げた第2章「エチオピアの開発と内発的な民主主義の可能性——メレス政権の20年をふりかえる」（西真如）、第3章「内発的発展を支えるコミュニティ種子システム——エチオピアにみるNGOと政府の協働」（西川芳昭）、第Ⅱ部からは内発的発展と外部からの開発援助の関係に関する論考について紹介する。

西は、エチオピアの内発的な民主主義の可能性について検討している。エチオピアでは、1991年から2012年8月までおよそ20年にわたってエチオピアの首相を務めたメレス・ゼナウィが「民主的な開発主義」（democratic developmentalism）と呼んだ政策が進められてきた。2006年頃から年率10%前後の経済成長を遂げるなか、メレスは「民主的な開発主義」の名の下に、公共事業の実施や政府の雇用拡大を推し進めた。西は、メレスが提唱した「民主的な開発主義」は、内発的な民主主義に根ざしたものではなく、民主的な開発政策であるかどうかとも疑わしいとしつつ、この思想はアフリカの開発と民主主義を考えるうえで重要な歴史的意義をもっていると評価する。

西川は、アフリカの農村地域に内在する作物遺伝資源を利用した農村地域の内発的発展の可能性について論じている。具体的には、多国籍企業の種子独占に対抗して、農民、国際NGOが協働して、政府の支持をも得て、コミュニティ・シードバンクを設立し、伝統的な農作物種子の保存と利活用に進み出していることを報告している。西川は、アフリカにおいては、必ずしも内発的とは言いがたい農村開発が主流化していると指摘する。たとえば、輸出志向の農業のひとつとして花卉産業があるが、これらの農場で働く住民は、彼ら自身の食糧生産活動から隔離され、現金収入も乏しい。エチオピアでは、食料安全保障のための収量増加を目指す政策に合わせて種子システムの構築が目指されるとともに、農民自身が作物遺伝資源を自らの地域発展のために直接利用する組織・制度の整備が実施されている。こうした取り組みは、農業生産性の向上と環境保全が両立する可能性を示し、アフリカにおける「農民の権利」「食料主権」を意識した内発的農村開発の実現につながると評する。

第10章「開発援助政策の変遷と限界——OECD開発委員会での議論を通じて」（尾和潤美）では、OECD

の開発援助委員会の援助政策の歴史的変遷、それがアフリカ諸国にもたらした影響、現在のグローバル化のなかで生まれてきている新たな課題について検討している。ドナー国政府、国際市民社会、受け取り国政府、受け取り国地方政府、受け取り地域の市民社会等、さまざまな「開発アクター」の間の履行や利害調整の問題を指摘し、支援者が自己満足に陥るのではなく、絶えず関係諸アクター間の関係を問い直すことで、アフリカ社会の持つ内発性が活かされることにつながると論じる。

第11章「内発的なガバナンス政策——外部主導型からの転換をどう図るか？」（笹岡雄一）では、アフリカのガバナンス政策について論じている。アフリカのガバナンス政策は、外部主導で推進されてきた。これは、植民地政府にはじまり、現在の先進国主導の国際経済体制やドナーの開発援助に至るまで受け継がれている。こうした外部主導のガバナンスの歴史的経緯を検討するとともに、そのアンチ・テーゼとして期待される内部主導のガバナンス政策を推進する主体とその方法、およびその条件を検討している。

第12章「可能環境（Enabling Environment）アプローチ——内発的發展を尊重する支援とは」（大林稔）では、近年の開発理論・政策で多く用いられるようになった社会開発を可能とするような政策環境と、内発的發展の関係が議論されている。大林は、従来の援助と内発的發展に関する議論を踏まえたうえで、可能環境アプローチに注目する。可能環境アプローチとは、対象に直接的な働きかけを行わず、対象を取り巻く環境の改善をはかることによってその発展を促す援助手法であり、受益者に自己決定権を還元する試みでもある。そ

こで、内発的發展の可能環境づくりに考慮すべき要素として、平和と安全の保障、安定したマクロ経済と市場の発達・公正な分配、適切な農業政策・制度、資源管理権の返還をはじめとした10項目を挙げ、「内発的發展の権利」を尊重した援助のあり方を提言している。なお、現実の援助の現場では、可能環境づくりを掲げていなくとも、政策はもちろん、自治体や市場のあり方、人々の認識にいたるまで、事業の枠を越えた環境に働きかけている真摯な試みは少なくない。これらの努力を可能環境づくりの観点から学び直すことが重要であると結論付ける。

本書は、激しい変化の波のなかにあるアフリカにおいて、内発的發展の主体は、日々の暮らしを生き抜く普通の人々であり、彼らの日々の暮らしの営為のなかに内発的發展があると指摘する。さまざまなレベルでの住民たちの社会発展や内発的發展の動きを明らかにするとともに、そこに外部ドナーがどのように働きかけ、外部援助と内発的發展の運動がどのような条件のときにいかなる帰結を導くのか、アフリカにおける内部的な変動ダイナミズムをミクロとマクロの双方の視点から提示することに成功している。本書の副題にある住民自立と支援は、外部からの介入と内側からの自立という相反する志向性を持つ。1960年代初頭に多くのアフリカ諸国が独立したが、国際社会は「開発援助」という名目の下で依然としてそれらの国の開発政策をコントロールしてきた。こうした過去を踏まえてアフリカの現状を多角的に描くことで、今後、どのようにアフリカと向き合うのかを読者に問いかける良書である。

（よしだ さゆり）

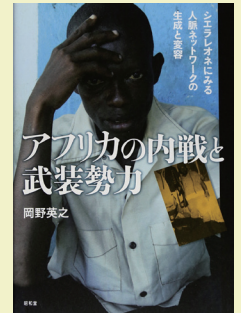
岡野英之 著

『アフリカの内戦と武装勢力
—シエラレオネにみる人脈ネットワークの生成と変容—』

昭和堂、2015 年、427 ページ、6800 円＋税

村橋 勲

大阪大学大学院人間科学研究科



本書は、シエラレオネ内戦における政府系勢力、カマジョー (Kamajors) / 市民防衛軍 (Civil Defense Force: CDF) の形成、統合、拡大の過程を、パトロン＝クライアント関係に基づく人脈ネットワーク (以下、PC ネットワーク) の生成と変容から明らかにしている。カマジョー / CDF は、シエラレオネ南・東部に居住するメンデ人を主体とする自警組織である。CDF は、反政府組織の革命統一戦線 (Revolutionary United Front: RUF) を上回る数の戦闘員を擁し、内戦中は主要な武装勢力として活躍したが、AFRC 政権期 (後述) における軍事基地ベース・ゼロの活動では、RUF 支持者とみなした市民への掠奪や暴行が横行したため、数人の司令官は国際人道法違反の容疑でシエラレオネ特別裁判所に訴追されている。

本書は、序論、第 1 章から第 11 章、そして終章から構成されている。著者は、カマジョー / CDF を、指揮系統が明確な軍隊としてではなく、リゾーム状に広がる人脈から動員される軍事的な社会ネットワークの集合体と捉え、組織の動態を司令官と戦闘員の PC ネットワークから分析している。第 5 章から第 11 章までは、カマジョー / CDF の各司令官の政治的思惑や権力争闘、戦闘員の離合集散が時系列に沿って詳細に描かれている。なお、著者は 2007 年からシエラレオネとリベリアで現地調査を行っており、本書で提示される事例は、元カマジョー / CDF 司令官への聞き取り調査のほか、シエラレオネ真実和解委員会報告書、シエラレオネ特別裁判所の裁判記録などの文書資料に依拠している。

はじめに、第 1 章からシエラレオネの歴史と内戦に至る社会的背景を整理する。西アフリカの小国、シエラレオネは、19 世紀初頭にイギリス植民地となり、解放

奴隷や奪還奴隷¹の入植により国家の建設が進められた。彼らは、首都フリータウン周辺に定住したが、その外側の内陸部には土着の人々が各首長国にわかれて暮らしていた。植民地政府は、フリータウン周辺の直轄植民地以外の領域を保護領とし、地元の有力者をパラマウント・チーフに任命して間接統治を敷いた。伝統的な首長国は、チーフダム²として再編され、支配家系となったパラマウント・チーフは、チーフダムの統治とともに植民地行政官と地域住民との橋渡しを任された。1961 年の独立後、シエラレオネでは、中央政府による集権化が進む一方で、中央から置き去りにされた地方のパラマウント・チーフたちは住民への専制支配を強化した。その結果、シエラレオネは、一握りのビッグマンが、公的な制度を迂回し、私的な社会関係に基づき、富、地位、武器などの資源を分配する新家産制国家の様相を呈した。しかし、資源の分配から排除された学生たちは反発を強め、後に反政府組織 RUF の主体を構成した。1991 年、サイドゥ・モモ軍事政権の下、フォディ・サンコー率いる RUF がリベリア国境付近で武装蜂起し、この事件を発端とした内戦が 2002 年まで続いた。シエラレオネ内戦による犠牲者は、死者 7 万人以上、難民、国内避難民は合わせて約 260 万

1 解放奴隷とは、18 世紀後半、イギリスの奴隷廃止論者によって解放され、アメリカからイギリスに移住した奴隷を指す。また、奪還奴隷とは、19 世紀初頭にイギリスで奴隷貿易禁止法が制定された後、拿捕された奴隷貿易船からフリータウンに連れてこられた奴隷を指す。

2 チーフダム (chiefdom) は、一般に、首長国あるいは首長制社会と翻訳されるが、本書では、シエラレオネの歴史的文脈に即して、植民地統治以前に林立していた各地の小国を首長国、その支配者を首長と記載する一方、植民地統治下で再編された統治体系をチーフダム、その支配者をパラマウント・チーフと記載することから、本稿の記載もそれに従う。

人に上る。

第4章では、カマジョーの社会基盤とカマジョー結社の特徴が述べられる。内戦中に誕生したカマジョーは、メンデ語で狩人を意味するカマジョイ (*kamajoi*) を語源とし、伝統的なメンデ社会の狩人を模倣して作られた。しかし、カマジョーの成員は、徒弟制によって狩猟の専門知識を伝承されるのではなく、結社に加入することで戦闘員として認められるという点で伝統的な狩猟民とは異なる。イニシエーターによる加入儀礼を受けたカマジョーの戦闘員は銃弾を跳ね返す能力を得たと考えられ、戦闘中はその能力を維持するために、護符を身につけ、結社の掟を守ることが求められた。

第5章と第6章は、サイドゥ・モモ政権³下での内戦の勃発から国家暫定統治評議会 (National Provisional Ruling Council: NPRC) 政権期⁴ (1991年～1995年) にかけて、カマジョーが誕生した背景と経緯を明らかにしている。シエラレオネ政府は、RUF 掃討のため、リベリア人難民⁵と地域住民の双方を組織的に動員し軍事力の強化を図った。RUF は、国軍の攻勢により一度は退却したが、1994年からゲリラ戦を展開し、農村部の集落を次々に襲撃した。これに対し、地域住民は自衛のため各地で自警団を組織するようになった。自警団への動員に際し、呪医やイスラム知識人が加入儀礼を取り入れたことでカマジョー結社が作られた。初期のカマジョーは、チーフダムを基盤としており、戦闘員はパラマウント・チーフを頂点とする PC ネットワークで結ばれていた。

第7章では、NPRC 政権後期から前期カバー政権期 (1995年～1997年5月) におけるカマジョーの動向に注目する。RUF は、カバー文民政権⁶が誕生した後

も、リベリア国民愛国戦線 (National Patriotic Front of Liberia: NPFL)⁷の支援を受け、政権打倒を目指しゲリラ戦を継続した。カバー政権は、RUF 掃討に向け国軍よりもカマジョーを重用し、ボー県のカマジョーの代理チーフ⁸、ヒンガ・ノーマンを国防副大臣に任命した。農村部では、RUF と国軍の双方による暴行と掠奪が横行し、カマジョーは自警組織としてより強い力を発揮することが期待された。この時期、カマジョー結社の加入儀礼はメンデ全域に広まり、イニシエーターを司令官とする部隊も登場した。カマジョーは、チーフダムを越えて統合し、より大きな勢力が形成され、国軍とも衝突するようになった。

第8章と第9章は、軍事革命評議会 (Armed Force Revolutionary Council: AFRC) 政権期 (1997年5月～1998年3月) におけるカマジョーの拡大に焦点を当てている。1997年5月、ポール・コロマによる軍事クーデターが起こり、カバー大統領はギニアに亡命した。コロマは AFRC 政権を樹立し、内戦を終結させるために RUF と連合政権を組み、カマジョーの解散を命じた。しかし、多くのカマジョーはカバー政権復帰を掲げて AFRC/RUF に抵抗した。リベリア国境付近の町ジェンデマに集結した各地のカマジョーは、西アフリカ諸国経済共同体監視団 (Economic Community of West African States Monitoring Group: ECOMOG)⁹の軍事支援を取り付け、組織の正当性を高めるためにノーマンを指導者として迎え入れた。ジェンデマ・カマジョーの司令官たちは、組織の名称を CDF と改め、リベリア人を戦闘員に組み入れた。一方、ノーマンは ECOMOG からの支援を手中におさめ、パトロンとしての地位を確

3 1985年から、シアカ・ステーブンス大統領に代わって、サイドゥ・モモ陸軍少将が後継者として政権を掌握していた。

4 1992年、バレンタイン・ストラッサーを中心とする下級将校が、クーデターによってモモから政権を奪い、国家暫定評議会 NPRC を打ち立てた。

5 第一次リベリア内戦 (1989～1996年) で戦闘を逃れシエラレオネに避難していたリベリア人難民。

6 1995年、NPRC 政権内部でのクーデターによりストラッサーは追放され、ナンバー・ツーのマーダ・ピオが国家元首となった。1996年、民政移管の選挙が行われ、テジャン・カバーが大統領に選出された。

7 リベリアで、チャールズ・テラーがサミュエル・ドウの独裁政権打倒を目指して結成した武装組織。1990年のドウ暗殺後、テラーはドウ政権派の民主統一解放運動 (United Liberation Movement of Liberia for Democracy: ULIMO) と武力衝突を繰り返したが、1993年に両者は一時的に和平合意した。テラーは、1997年の大統領選挙で圧勝し、大統領に就任した。RUF 指導者のサンコーはテラーの同胞である。

8 代理チーフは、パラマウント・チーフが戦闘などで死亡した後、後任にふさわしい人物がいない場合に代役として設けられる役職。

9 西アフリカ諸国経済共同体 (Economic Community of West African States: ECOWAS) が、内戦中のリベリアに派遣した平和維持軍。1997年のコロマによる軍事クーデターの際、数百名のナイジェリア軍が ECOMOG の一部としてシエラレオネに駐屯していた。

立すると、CDF の拠点をジェンデマの隣県のベース・ゼロに移し、メンデ以外の民族の自警組織を傘下に入れた。そして、ECOMOG やジェンデマ・カマジョーとともに多方面から AFRC/RUF に攻勢をかけた。1998 年 2 月、ECOMOG/CDF は、首都フリータウンを奪還し、同年 3 月、カバーが大統領に復帰した。

第 10 章では、後期カバー政権期誕生から内戦終結まで（1998 年 3 月～2002 年）の CDF による PC ネットワークの確立と内戦収束に伴うネットワーク解体までを追う。この時期、国軍が再編され、CDF は ECOMOG の指揮系統下に入った。中央では、ノーマンに近いベース・ゼロの CDF 司令官が幹部となり、農村部では、地方のカマジョーが行政事務所の人員として配置された。2000 年以降、和平プロセスが軌道に乗り、内戦が収束に向かうと、武装・動員解除および社会再統合（Disarmament, Demobilization and Reintegration: DDR）が進められ、CDF の戦闘員は次々と組織を離れた。リベリア人を含むジェンデマ・カマジョーの一部は、新たな資源獲得の機会を求め、リベリア民主和解連合（Liberian United for Reconciliation and Democracy: LURD）に参加し、第二次リベリア内戦を戦った¹⁰。一方、ノーマンは、DDR に反し CDF の戦闘員への軍事訓練を密かに続けていたが、2002 年に CDF の事務所が閉鎖され、2003 年にノーマンが逮捕されると CDF は解体した。

第 11 章では、数人のカマジョーのライフヒストリーから、彼らが異なる PC ネットワークを渡り歩く様子が描かれている。パトロンである司令官は、外部から得た資源を戦闘員に分配することが求められる。それ

ができないと戦闘員はある部隊を離れ、別の部隊に参加し、新たな資源を獲得しようとする。

終章では、カマジョー /CDF の統合と変容の過程から、カマジョー /CDF 全体とジェンデマ・カマジョーの PC ネットワークが分析される。前者は、各チーフダムのカマジョーが次第に統合され、AFRC 政権期にノーマンを頂点として確立する CDF の PC ネットワークであり、後者は CDF の一部でありながらノーマンとは独立して活動するカマジョーの PC ネットワークである。いずれもパトロンである司令官が資源をクライアントである戦闘員に適切に分配できるかどうか組織の規模や存続を決定付けると考察される。また、カマジョー /CDF の PC ネットワークはリベリアにも広がっており、このネットワークの解明は、一国の内戦が隣国の内戦を誘発する「紛争の連鎖」を理解する手掛かりを提供してくれる。

本書は、シエラレオネ内戦の主要な紛争アクターであるカマジョー /CDF を、私的な人脈を通じて構築される緩やかな統合体と捉えることで、アクター内部の権力闘争や離合集散、それに伴う組織の可塑性を実証的に示したと言える。1990 年代以降のアフリカの紛争では、集団として明確な外延を持たない民兵組織が軍事的に大きな役割を果たすことがあるが、本書はこうした民兵組織の流動性と暴力を考察するうえで参考になる。その一方、本書は、ほぼ全員が男性である自警組織の戦闘員を研究対象としており、PC ネットワークというタテの社会関係から内戦を生きる人々の生を描くことに終始している。そこで、最後になるが、地縁、親族、友人、恋人などを通じたヨコの社会関係に注目することで紛争の人類学において別の視点が生まれる可能性があるのではないかということを付記しておきたい。

（むらはし いさお）

10 テーラー政権打倒を目指し、セクー・コネが主導した反政府武装組織。第二次リベリア内戦（1999 年～2003 年）では、トマス・ニメリー 率いるリベリア民主運動（Movement for Democracy in Liberia: MODEL）とともに政府軍と交戦した。

佐藤靖明・村尾るみこ 編
『衣食住からの発見』

(100万人のフィールドワーカーシリーズ第11巻)

古今書院、2014年、194ページ、2600円＋税



児玉由佳

アジア経済研究所

本書は、2014年に刊行を開始した「100万人のフィールドワーカーシリーズ」の第1回配本の2冊のうちの1冊である。第11巻ではあるが、「フィールドワークの雰囲気や醍醐味を明快につたえやすい」(p. 186)という编者たちの判断のもと、第1回目の配本になったという。本書では、フィールドワーカーたちの衣食住に関する試行錯誤を通して、調査地の人々の日常生活が豊かに描き出されている。また、多く掲載されている写真も読者の理解を助けてくれる。

本書は、4部9章で構成されている。取り上げられている地域は、アフリカがもっとも多いが、それだけではない。章順に、ペルー、エチオピア、ブルキナファソ、南極、タンザニア、タイ、ソロモン諸島などが扱われている。章間にある3つのコラム（ザンビア、ケニア、南極）もそれぞれ住・衣・食をテーマにしたもので、楽しく読める。

第Ⅰ部「信頼関係の構築」では、アマゾン（第1章）とエチオピア（第2章）の村で、村に溶け込もうとするフィールドワーカーたちが、人々と関係を結ぶために飲食を共にしようと試行錯誤している様子が描かれている。

第Ⅱ部「新たなテーマの開拓」では、エチオピアの牧畜民と生活を共にする中でフィールドワーカーが新たな視点を見つけ出していく過程が描かれ（第3章）、次にブルキナファソの町では自ら伝統的な服を仕立てるという経験から、女性たちが衣服を通して関係性を構築していることを発見していく（第4章）

第Ⅲ部「日常生活を支える工夫」では、まず、過酷で危険な環境にある南極を舞台に、研究活動を進めていくための細心の準備が紹介されている（第5章）。次にブルキナファソの半乾燥地であるサヘル地域の村で食事調査を行うことによってフィールドワーカーと住民との関係に生じるジレンマが描かれている（第6章）。続いて、タンザニアの国立公園のキャンプに寝泊まりしながら、現地のトラックと共にチンパンジーの調査を行った経験が綴られている（第7章）。

第Ⅳ部「調査生活で見出す世界のつながり」では、自分と調査対象者との関係についてのフィールドワークを通じた考察が綴られている。まず、タイ北部のカレン人難民キャンプでは、この章の筆者が調査対象の難民にお礼の食事を振る舞って拒否された経験を原点として、自分と調査対象との関係性やカレン人の文化や社会をひもといていく（第8章）。次に、ソロモン諸島の島では、「調査すること」と「生活すること」のバランスの難しさを実感しながらも、筆者が人々との対話を通じてこの二つの関係への理解を深めていく過程が描かれている（第9章）。

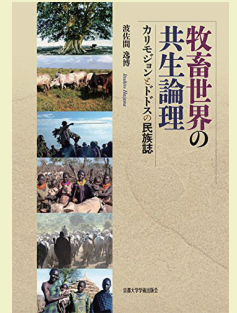
本書は、「100万人のフィールドワーカーシリーズ」という名にふさわしく、全世界に散らばって孤軍奮闘するフィールドワーカーたちの、論文ではでてこない苦労や日常生活の発見がちりばめられている。楽しくそして身につまされながら読み進めることができる本である

(こだま ゆか)

波佐間逸博 著
『牧畜世界の共生論理
—カリモジョンとドスの民族誌』

京都大学学術出版会、2015 年、312 ページ、4400 円＋税

白石壮一郎
弘前大学人文社会科学部



本書は、ウガンダ北東部牧畜民の生業牧畜の枢軸である人間－家畜関係をめぐる民族誌であり、全章節項にわたってフィールドワークに依拠した記載とそこからの考察を徹底的におこなっているゆえの迫力と説得力に満ちた圧倒的な作品である。この紹介記事では題名にある「共生論理」について要約的に言及するにとどめる。なお、カリモジョンもドスも、それぞれ古典的な民族誌のある別々の民族集団として扱われてきたが、一定以上の同一性をもった社会・文化クラスタを形成しており、本書を通じて著者は「カリモジョン・ドス」として扱う（本稿では以下たんに「牧民」と記すこともある）。

西洋は牧畜を、人間が自然を統御しつつ利用し生産する技術知としてみる。そもそも家畜化（domestication）の定義こそは人間中心的なものとなっている、と著者は言う。こうした生産技術観に立って、アフリカ牧畜民の生業牧畜はもはや持続的に生産可能ではないとする「牧畜の終焉論」がある。これへの著者の対論は明確である。

「人にとって直接には摂取できない植物資源を、血や肉といった利用可能な形態に変換する山羊や牛の頭数が揃っている」というだけでは生業牧畜は成立しないという、いわずもがなの事実が認識の外に放り出されている。人間の側から対象である動物の資質を見て取って行為し、対象の側からの応答がなければ、つまり、人間が身振りを呈示し、特定のしかたで触れ、そしてときに声を上げて指示を出し、家畜が人間に近づいて乳を分泌し、移動方向や行動を修正するといったコミュニケーションなレベルでの感覚刺激を介した関係の技法がなくては牧畜は成り立たないのである。[p. 2]

本書がカリモジョン・ドスの生業牧畜にまつわる事象を綿密に記載していくのは、かれらの牧畜のあり方を生産のための自然統御の技術としてではなく、人と家畜との相互的な関わりのアートとして把握するためである。

家畜（牛・山羊・羊）の個体識別、各個体の系譜・履歴の共有、牧童の群への介入、牛の授受を通じた社会関係の結成と維持、去勢牛の呼び名と人名との重なり、去勢牛を詠う牧歌などのトピックについて、文化・社会的な装置として描き出した民族誌は枚挙にいとまがない。著者がしめすデータと事例からわれわれは、それら牧民の営みひとつひとつのあり方の微細な襞と必然とを従来のどの民族誌よりも生き生きとした形で了解でき、かれらの人間－家畜観の全体のなかに布置したうえで「分かった」という感を得ることができる。牧民は、離乳を果たすわずか2歳前後で、体重2kg前後の子山羊や子羊を両腕で抱え、歩いて家畜囲いのなかに連れて行く役割を担う。これがデビューで、以降かれらは家畜のケアに終生参与する [p. 111]。個々の家畜の一生と個々人の一生とがかかわり合い、重なり合うあり方。個々人の人生の節目には牛や山羊の個体の生が刻印されている一方で、家畜の側にとっても小さなころから育てられることによって、人間とともにある居留地の囲いは広大な放牧地とは異質な親密圏となっているのであり、異種混浴的な社会性獲得の場と見なしうるのである [p. 247]。

たとえば、牧童の特定の牛に対する名前の呼びかけに対して、呼ばれた個体は周囲の個体が反応しない中で正確に応答を示すことが、牧童の「名前呼びテスト」調査によって明らかにされる（3章2節内「個体名とコミュニケーション」）。男性は（審美的に）お気に入り

りの体色をもつ個体にちなんだ「去勢牛の名前」を持っている。同じ去勢牛の名前をもつ者どうしても多いが、同名の者どうしは特段の関係にあるわけではない。だとすれば、この名は個人特定の機能も社会関係の表現機能も負っていない。あくまで最愛の家畜体色・模様を表明するところに力点がある（2章2節内「家畜の名前と人の名前」）。各々の牧童の吟じる牧歌は「作る」ものではなく「想起する」もしくは「おとずれる」ものであり、10歳前後の牧童からおとなまで、家畜の個体名を詞に加えたものが繰り返しその個人によって口ずさまれる。収集された745曲の牧歌では、10歳台の牧童の歌には「放牧」が、30歳台以上の男性の歌には「家畜の所有」が高い割合でトピックとして歌い込

まれている（4章3節）。

個々人と山羊・羊・牛の各個体とはともに存在し合うことによって一生を過ごす。「〈顔〉をもつ個別的な他者に徹底的に寄り添う」というかれらの営為は、「ある特定の類的な集合を示差特徴に応じて階層的にカテゴライズする」近代西洋のメンタリティとは根源的に異質なのだ [pp. 11-12]。本書に著者が言う「共生論理」とは、カリモジョン・ドスの牧畜社会が生活経験のなかで独自に洗練させてきた、ヒト-動物間のトランススピーシーズな関係を基礎づける実践論理の総体なのである。

（しらいし そういちろう）

会員の異動

■ 入会者

氏名	入会年	所属
島津 侑希	2015 年	名古屋大学大学院国際開発研究科
榎野 愛	2015 年	株式会社三祐コンサルティング海外事業本部技術 1 部
島津 英世	2015 年	合同会社環境と開発研究所
森口 岳	2015 年	東洋大学国際地域学部
大門 碧	2015 年	京都大学アフリカ地域研究資料センター
江端 希之	2016 年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

■ 退会者

氏名	退会年
大城 道則	2014 年
佐々波 秀彦	2014 年
嶋田 雅暁	2014 年
萩生田 憲昭	2014 年
ジョン エドワード フィリップス	2015 年
レダ アクリルハブトゥ	2015 年
菊池 忠純	2015 年
大岩 隆明	2015 年
仲谷 英夫	2015 年
屋形 禎亮	2015 年
伊藤 義将	2015 年

編集後記

電子版のみとなってこれで3号になります。前号でデザインを刷新しましたが、今号はさらに電子版ならではの機能も追加しました。具体的には、目次の青字箇所をクリックすればその文章の開始位置に飛び、URLをクリックすればブラウザと連動してそのURLが開くリンク機能を取り入れてみました。インターネットにつながった環境で本誌は読まれるであろうと考えての試みでしたが、いかがだったでしょうか。

とはいえ、今号の目玉は10名近い言語学者の方に寄稿いただいたJANESフォーラムでしょう。学会発表や論文など通常の研究成果にはまず示されることのないフィールドワークの様子などを開陳していただいたように思います。ひとえに北東アフリカで言語研究をされるといっても、さまざまなバックグラウンドそして問題関心をもって研究されていることが伝わってきました。また、これは人類学を専門とする私に限っての話かもしれませんが、近隣の社会でお互いフィールドワークをしているといっても、実際どのように調査が行われているのかわらず、神秘的なベールに包まれていました。今回その謎は大幅に解消されました。政治状況に翻弄され、過酷な自然条件や病気と悪戦苦闘しながら行われていること、現地の人たちに調査の意図を理解してもらい関係を築いてやっていくことが肝要であることなどわかりました。これらは分野を問わずフィールドワークを行う人たちにはおよそ共通した点なのかもしれません。

今回私が特に印象づけられたのはインフォーマントとの一期一会ということです。言語学にかぎらずフィールドワークでは得がたいインフォーマントとの出会いが研究に進展をもたらすことがあるのはたしかです。ただ、言語学ではその重要性は他分野の比ではないと感じました。私の理解が正しければ、言語学のフィールドワークでは、母語に精通するだけでなく、調査者の意図を理解し、長時間の調査につきあえるインフォーマントと出会うことが決定的に重要です。しかし実際にそうした人と出会うのは容易でなく、出会えたとしても別の機会には会えないかもしれず、するとインフォーマントをまた探さねばならないだけでなく、調査内容も練り直さなければならないといった具合で、得がたいインフォーマントとの出会いが調査の成否に直結する感があります。論文などの研究成果にはそうした様子は微塵も感じられず、むしろ専門用語を駆使して言語の深遠な世界を解き明かしていく感がありますが、実際には人間的な出会いそして濃密なやりとりの中で調査が行われていることを改めて知った次第です。読者にはより言語学の中身に興味を覚えた方もおられることでしょう。いずれにせよ、今回の企画が何かのきっかけになれば幸いです。取りまとめていただいた柘植先生、若狭さん、本当にありがとうございました。

石巻の大会の際に編集代表の役を仰せつかったのはや3年。何とか3号発行することができ、ほっとしています。学会員の皆様の活発なご寄稿と編集委員の多大なご協力の賜物です。本ニュースレターが今後さらに充実したものとなっていくことを願います。

藤本武

JANES ニュースレター 23号

2016年3月31日発行

編集・発行：日本ナイル・エチオピア学会

編集委員：藤本 武（代表）、佐藤靖明、増田 研、村橋 勲、吉田早悠里

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入

Tel: 075-415-3661 Fax: 075-415-3662 E-mail: janes2@nacos.com

JANES